

ONLINE ISSN 2188-5451

# 薰物書の研究



第 五 号

令和元年（2019）11 月

薰 物 書 研 究 会 編

## 薫物書研究会会則

- 一、本会は、薫物書研究会（たきもののしよけんきゅうかい）と称する。
  - 一、本会は、現行の図書分類法で香書に分類される和書のうち、薫物の処方と調合法を主題とした薫物書（たきもののしよ）の研究を行うことを目的とする。
  - 一、本会は、右の目的を達するために、左の事業を行う。
    - 1 会誌「薫物書の研究」の発行
    - 2 その他必要と認められる行事
  - 一、本会の会員は、日本の薫物書に関する学術研究を行う者で、本会の趣旨に賛同するものとする。
  - 一、本会の会員のうち、日本の薫物書を主題とした研究業績（投稿時に所属した研究機関以外で発行された査読付き学術研究誌に掲載された学術論文、または博士学位論文）を持つ者は、本会の会誌に研究を発表することができる。
  - 一、本会には、役員として代表一名と監事一名を置く。
  - 一、代表は会の事務局を兼ねるほか、会誌の発行（年一回）等の事業ならびに総会（年一回）の開催を行い、監事は会計を監査する。
  - 一、役員の選出は選挙による。選挙は会員の互選とし、総会において行う。
  - 一、役員の任期は二年とする。ただし、再任を妨げない。
  - 一、本会に入会を希望する者は、住所・氏名・職業・業績一覧を記載して本会事務局へ申し込まなければならない。
- 付 則
- 一、会費は原則として無料とする。ただし、本会からの連絡に費用の発生する会員に対しては、実費の負担を求める場合がある。
  - 一、本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。
  - 一、本会則は、平成二六年四月一日から施行する。

### 薫物書の研究 第五号（令和元年）

#### 目 次

陽明文庫所蔵「焼物之方」翻刻と校異  
附・『薫物調合秘方』人名家名等解説及び索引

田中圭子 1-91 頁

.....

### A Study of *Takimono* Books Vol.5 (2019)

#### Content

A Reprint and Comparison of *Takimono-Chogo-Hou* Possessed in 'Yomei-bunko' Library with the Commentary and Index such as Person's Names and Family Names Recorded in *Takimono-Chogo-Hou*

Keiko TANAKA pp.1-91.

# 陽明文庫所蔵「焼物之方」翻刻と校異

## 附・『薫物調合秘方』人名家名等解説及び索引

田 中 圭 子

### 解題

陽明文庫所蔵「焼物之方」一冊（無題、和装袋綴、中本、整理番号・九四九五三）は、複数の香具を細かく砕き和合して成る芳香剤「薫物」の処方等の類纂である。書名は「たきもののほう」と訓むものとして行われたのであろう。本冊の現状に、外題、内題等の固有の書名は伝わらない。後述するが、陽明文庫には、本冊と同様に書名を伴わない資料一点（整理番号・九四九五二）が、本冊と同じ「焼物之方」の書名によって収蔵されることから、固有の書名が不明な場合の整理の手段として、所蔵先により便宜上付された書名であったかと考える。

装訂の現状が冊子体であるのに対して、跋文の書写者識語には「右一帖」云々と記されるほか、書中の随所にいわゆる不審紙の体裁で貼付された藍色の紙片には、本書の現状における丁の折り目に重なるように付着して伝わるものもみられる。以上の特徴から、跋文の行われた当時には、粘葉装などの折本装訂がなされていた可能性がある。

本書の内容は、薫物の処方、及びその調合に際して留意すべき事項に関する諸説から成る。具体的には、平安時代後期の類纂と伝わる『薫集類抄』等に載録のあった伝統的な種類の薫物、例えば「黒方」、「侍従」、

「梅花」、「荷葉」、「菊花」、「落葉」、「薫衣香」の処方に加えて、従来の薫物とは異なる銘と香具、処方により、室町時代以降に新たに考案されて普及したと見られる薫物（以下、新作薫物と称す）、例えば、「仙人」、「玉椿」、「千種」、「新枕」、「若草」、「野風」といった銘による、主としていわゆる練香状態に仕上げて用いられた品々の処方、計七十四点と、以上の薫物、新作薫物の調合に際して特筆すべきと筆者の考えたであろう事項や、処方される香具の特徴及び調整法等に係る内容の散文体による言説、計十八点とが載録される。以上の薫物の処方と調合の説の概要及び掲載順序については本解説8頁の表1にまとめて記載しており、以下の解説と併せて参照されたい。

本文の内容を既存の他書と比較した結果、本冊に載録される薫物の処方と調合の説の内容、掲載順、及び本紙本文の行配りは、東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」一冊（無題、和装袋綴、中本、函号・一一三―四―一一―、マイクロフィルム版請求記号・N2208）におおむね一致することが分かった。稿者は既出の拙稿において「薫物調合秘方」の解題及び翻刻を行ったことがある（註二）。そこでは、「薫物調合秘方」が江戸時代前期までの皇室において伝来し収集された薫物諸書や薫物諸方をもとに類纂された可能性とともに、後水尾法皇（人名家名等解説及び索引61頁）

御書として近代の皇室の官庫に伝来した可能性のあることを報告していた。

後述するが、本書の跋文によれば、「焼物之方」は後水尾法皇震筆を祖本とする後西院（人名家名等解説及び索引 66 頁「新院」）御秘蔵の一本を底本として、近衛基熙（人名家名等解説及び索引 85 頁）が書写した一本、又はその写本として伝来した可能性がある。「薫物調合秘方」と「焼物之方」の本文が近似することにも鑑みて、「焼物之方」の跋文に云う同書の祖本が「薫物調合秘方」であつた可能性は、検討に値するかと考える。

以下の解題では、考察の過程で「薫物調合秘方」及び「焼物之方」の祖本の書名を便宜上『薫物調合秘方』とした上で、東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」は東山御文庫本と、陽明文庫所蔵「焼物之方」は陽明文庫本と称し、陽明文庫本の書誌について、既出の拙稿で報告した東山御文庫本の書誌と比較しながら考察する。また、本稿の附録として掲載する『薫物調合秘方』人名家名等解説及び索引」では、東山御文庫本及び陽明文庫本に記載された特定の人物及び家の呼称を標目として、これらの人物及び家の合香家としての業績について解説を試みる。これにより、室町時代後期から江戸時代前期にかけて禁裏を頂点とする上層社会において実施、継承、変容された薫物文化の、実相及び変遷を解明する一助となれば幸甚である。

「焼物之方」の書名を付されて伝来する『薫物調合秘方』陽明文庫本一冊（整理番号・九四九五三）は、装訂は和装袋綴、書型は中本、現状の表紙等に固有の書名を確認することはできない。表紙、裏表紙とそれらの前後の遊紙計二丁を除く二十九丁分の本紙に記載された本文は、薫物の処方（以下、薫物方、方とも称す）七十三点、及び薫物調合の手順や材料となる香薬の選別、調整等に関する諸説十八点から成り、これに

本文中に綴じ入れた紙片（以下、挿紙と称す）に記載の薫物方一点、及び本文末尾の一面に記載された跋文も伝わる。以上により、本書に伝来する薫物の処方は七十四点、調合の説は十八点となる（表 1）。

所蔵機関である公益財団法人陽明文庫では、文庫側が作成して館内閲覧時等の便宜に供される非公開目録二点が利用されており、一つは手書きにより（以下、手書目録と称す）、いま一つは活字により（以下、活字目録と称す）、諸書の書目と書誌の概要を列挙する。陽明文庫本及びその前後の諸書の書誌については、各目録において、次のように記される。

焼物之方	保之	「雖為秘蔵方」云々	一通	九四九五二
		寶永二年十一月廿三日		
焼物之方	基熙	黒方、仙人、玉椿等、	一冊	九四九五三
薫衣香方	貞享五年	基熙公御写	一冊	九四九五四
香之方		基熙公御写ナルベシ一通		九四九五五
基熙公台翰	香之事	一卷		九四九五六
		（手書目録、一部抜粋）		
九四九五二	焼物之方	保之	「雖為秘蔵方」云々	一通
		寶永二年十一月廿三日		
九四九五三	焼物之方	基熙	黒方、仙人、玉椿等	一冊
九四九五四	薫衣香方	貞享五年	基熙公御寫	一冊
九四九五五	香之方	基熙公御筆ナルベシ		一通

## (活字目録、一部抜粋)

手書目録では各行頭から書名等、及び内容や書写者に関する事項を記し、資料の点数を装訂に即した数詞により記した後に、最後に固有の整理番号を示している。活字目録では整理番号が各行頭に配され、続けて書名等、書写年次、書写者又は内容に関する事項が記された後に、資料の点数を示している。両目録によれば、本書の書名はいずれも「焼物之方」とある。直前の整理番号を付された資料も同じ書名で記載されるが、資料の形態や書写者、内容の異なる別資料である。活字目録には「基熙」の語が九四九五二と九四九五三のどちらに関する事項か不明な書式で記述されている。

管見に、九四九五二の現状には「基熙」の語が記述されないのに対して、後述するが、九四九五三の文末には、書写者名を「左僕射基熙」とした跋文が伝来する。陽明文庫の活字目録に云う「基熙」は、九四九五三の内容に関して右傍書の形で追記された情報と見なしておきたい。

さて、表1によると、陽明文庫本の方、説の内容及び掲載順は、東山御文庫本におおむね一致している。これらの二本を比較すると、次の(一)から(五)として示した顕著な違いを確認することができる。

- (一) 東山御文庫本では挿紙一葉に記載されて伝来する処方十三点が、陽明文庫本では本紙に記載されること
- (二) 東山御文庫本には、陽明文庫本に載録されない独自の記述として、挿紙一葉に記載された無記名の処方一点を含む処方七点、説三点、及び薫物の銘と調合の分量に関する記述一点を確認できること
- (三) 陽明文庫本の挿紙一葉及びそこに記載の薫物方一点は、東山御

文庫本に伝わらないこと

- (四) 伝承書写者「基熙」による陽明文庫本末尾の跋文は、東山御文庫本には伝来しないこと

- (五) 以上の異同により、載録される薫物の処方と調合の説の数は、東山御文庫本では本紙及び挿紙に記載の処方が合計八十一點、説が合計二十一點に上るのに対して、陽明文庫本では処方七十四點、説十八點と、やや少ない数にとどまっていること

二本間の異同の詳細については表1、及び本稿に翻刻している陽明文庫本テキストの脚欄に掲載した東山御文庫本との校異を参照されたい。以下の本稿では、右の内(一)から(四)の違いの生じた経緯について、既出の拙稿における報告や管見に基づき考察する。

- (一) は、東山御文庫本に付随する三葉の挿紙(既出の拙稿に「挿紙A」、「挿紙B」、「挿紙C」と称する。)の内、挿紙Aに記載された処方十三点に関する異同である。東山御文庫本では、字配り、行配りとも本文のそれとは異なる書式により、薫物「梅花」の処方ばかり十三点(方の通番…挿紙A方1〜13)が、挿紙Aの表に列挙されるのに対して、陽明文庫本では、挿紙Aの「梅花」方十三点の全てについて、挿紙Aと同じ掲出順序により、本紙の文末、跋文の直前の紙面に書き写されている(方の通番…方61〜73)。

陽明文庫本の跋文に記された本冊の来歴が確かなものであり、東山御文庫本が跋文に云う「後水尾震筆」に該当するならば、また、東山御文庫本の挿紙三点が、跋文に云う「新院」こと後西院の「御秘本」の書写以前から東山御文庫本中に挿入されて伝来したとすれば、挿紙Aの内容は、後西院、又は近衛基熙のいずれかにより本文化されたことになる。

- (二) は、東山御文庫本に記載される三組の薫物の処方、及び連続する調合の説についての異同である。薫物の処方については、①東山御文

庫本において連続して記載される四種類の薫物「落葉」、「菊花」、「補闕」、「拾遺」の処方各一点、計四点（方の通番：東山御文庫本では方46、49、陽明文庫本に方46・47）の内、はじめの二種類・二点の有無、②挿紙Cにおける末尾の処方一点（方の通番：東山御文庫本では挿紙C方1、陽明文庫本に無し）の有無という異同の他に、③やはり連続する薫物「黒方」の処方四点の有無（方の通番：東山御文庫本では方60、63、陽明文庫本に無し）がある。薫物調合の説については、香具「麝香」、「甲香」、「蜜」それぞれについての連続する三点の説の有無（説の通番：東山御文庫本では説6、8、陽明文庫本に無し）を確認している。

『薫物調合秘方』の二本において、①の連続する薫物の処方の末尾には「右四方新院御所傳古筆一卷之内」とある。他書と比較した結果、同じ処方群が、鎌倉時代写本と鑑定される杏雨書屋所蔵『香秘書』一卷、及びその諸本と考えられる賀茂別雷社伝来「薫物方」一卷に、『薫物調合秘方』に対して掲出順序を逆行させながら断続的に載録されることが判明した。前述の既出の拙稿では、『薫物調合秘方』に云う依拠資料「新院御所傳古筆一卷」が、『香秘書』や「薫物方」またはその散逸した諸本に内容のよく似た薫物書である可能性を指摘している。

②の東山御文庫本挿紙Cに記載の薫物方の内容を、調査の現時点までに知り得た他書の薫物方と比較したところ、同一ないし類似した処方（以下、同類文と称す）は確認できなかった。銘だけでなく、由緒や時代性も不明な薫物方であり、かえて特徴的な品であると言えるかもしれない。或いは、書写当時の既存の処方を参考に工夫するといった従来のな手法を取らず、なかば即興的に発案されて書き残された処方である可能性も、検討すべきかと考える。また、こうした推測が事実であるとすれば、実在の有力者らに關係すると見られた挿紙A記載の薫物方十三点が本文化されたこととは対照的に、由緒や来歴の不確かさ、薫物としての完成度の甘さというものが、諸本における本文化に至らなかった所以の

一つであつたとも考えられよう。

③の東山御文庫本に独自の薫物「黒方」の四点の処方群は、冒頭の方60に「三両合」、すなわち香具の沈を三両程度としてそれを基準に他の香具の分量を調整した処方であると併記される他、「新上東門院御相傳之御方」、新上東門院勸修寺晴子の相伝なさった処方であるとも記載される。ここから数えて四番目の方63までは、方60に同じく「二両合」として目方の情報が併記されるが、由緒に関する記述が成されず、方64に至って「四両合、勅方、何之勅方不知也」と記載される。以上の記述の有り様から、「新上東門院御相傳之御方」とは、方60から63の四点の処方の由緒として記載されたものであり、これらは由緒を同じくする一連の処方群として載録されたものと解釈しておきたい。

なお、③の四点の処方群が東山御文庫本に記載されて陽明文庫本には伝来しない所以については、誤写による脱落か、或いは何らかの意図による割愛であつたのか、調査の現時点においては推定しがたい。

(三)は、陽明文庫本に伝来する挿紙一葉の表に記載された薫物「梅花」方（方の通番：東山御文庫本に無し、陽明文庫本に挿紙方1）の有無についての異同である。本方は陽明文庫本に独自の処方であり、管見に知り得た他書においても同類文を見出すことができない。

本方の由来について、処方の冒頭には「寛文六三廿四御調合」と墨書される他、処方の末尾には「右ハ御入香也コヽニ（改行）トチクワフル也（改行）基熙私ニ（改行）朱書也」と朱筆で記される。

冒頭の記述は、ある人物が寛文六（一六六六）年三月二十三日にこの「梅花」方を「御調合」したことを云う。調合した人物は、記述の筆者よりも高位の人物と理解できる。末尾の記述によれば、この処方は「御入香」であり、それを「コヽ」こと本冊に「トチクワフル」、綴じ加えるのだと云い、この綴じ加えた挿紙に対して、「基熙」が「私ニ」、私事として朱書したのだと読める。

本方が他本と他書に対して独自であるのに対して、由来の一部は本書の後文に一致する。すなわち、東山御文庫では挿紙に、陽明文庫本では巻末の本紙に記載された薫物「梅花」の処方群（方の通番…東山御文庫本に挿紙方A1～13、陽明文庫本に方61～73）の内、「勸」なる合香家にゆかりの「三方」こと連続する三点の処方には、冒頭の処方に「寛文六三廿四始調合」と記されており、年号が陽明文庫本の挿紙方1に記されたそれに同じである。陽明文庫本の挿紙方1が東山御文庫本から脱落した経緯と時期については、今後の調査研究により究明したい考えである。

（四）の異同は東山御文庫本の現状に対して陽明文庫本に独自に伝来する跋文についてである。東山御文庫本の解題及び翻刻を掲載した既出の拙稿において、東山御文庫本が後水尾天皇御書として近代の皇室の官庫に伝来した可能性のあることを報告していた。陽明文庫本の跋文には、本冊の来歴に係る伝承として、本冊が「後水尾震筆」及び「新院自令写御秘本」に關係する一本である由が、次のように記述される。

右一帖以 後水尾震筆

新院自令寫御秘本也 基熙

薫御相傳之後頗望申之

間致免書寫於燈下卒爾書

之秘函底者也

貞享元年仲冬吉辰 左僕射基熙

（二十九丁表）

（訓読…右の一帖は後水尾（法皇）震筆（改行）を以て新院自ら写させ（給ふ）

御秘本也。 基熙（改行）薫（たきもの）御相伝の後に頗望申すの（改行）間、書

写を免ぜらるるを致して、燈下に卒爾して之を書す。（改行）函底に秘すべき也

（改行）貞享元年仲冬吉辰 左僕射基熙

（右の訓読文は稿者作成。句読点は稿者が補って記入。丸括弧（ ）内には跋文に記載の無い語を補った他、直前の語の音訓、闕字の有無、及び改行の実施について記入した。）

跋文は「右一帖」から始まる。ここでの「一帖」は前文を本文とする薫物書を云う。本冊は、現状では装訂及び資料点数は和装袋綴一冊として伝来するが、跋文に「一帖」とあることに鑑みて、跋文が記述された当時には、折本一帖の写本として伝来していた可能性がある。

跋文の「後水尾震筆」云々の記述は次のように解釈できよう。すなわち、以上の本文を載録した薫物書は、「後水尾震筆」を底本として、「新院」と呼ばれる上皇が自ら書写なさった御秘本である。「基熙」は薫物を御相伝いただいた後で熱心にお願ひ申し上げて書写を許され、燈火の下で急いでこれを書写した。この写本は函の底に入れて秘すべき書である。貞享元年仲冬吉辰、左僕射基熙。

「後水尾震筆」とは、後水尾法皇の震筆を意味することが明らかである。法皇の諡号に「院」等の尊称を伴わないのは、跋文筆者による意図せぬ誤りによるのであろうか。「貞享元年」は西暦一六八四年、「仲冬吉辰」は十一月の吉日に当たる辰の日を云い、「左僕射」は左大臣の唐名である。以上により、「新院」は、後水尾法皇晩年に「法皇」に対して「新院」と称せられた後水尾法皇皇子後西院に、貞享元年に「左僕射」こと左大臣に任じたと云う「基熙」は、近衛基熙に比定する。

今出川公規の日記『公規卿記』寛文五（一六六五）年七月四日条によれば、後水尾法皇と後西院とは、禁裏炎上により焼失した禁裏官庫の再構築の一環として、薫物の古書の蒐集、書写に協働して取り組んでいる 註

二。また、近衛基熙の日次『基熙公記』元禄十五（一七〇二）年六月一日及び三日条によると、基熙は後西院の在世中に薫物の一種である薫衣香の新作である「山吹（ヤマブキ）」、「八重一重（ヤエヒトエ）」、「潤紅（ジュンコウ）」、「ねみたれかみ（寝乱髪、ネミダレガミ）」、「臺（ウテナ）」の五種類の委細を、基熙曰く「非傳授」、正式な伝授ではないが口伝として聞き伝えており、元禄十五年六月三日に東山天皇の御前に伺候してこれらを申し入れたと云う（註三）。

六月大

一日辛亥 天從昨日雨不休未刻漸止了

從一昨日沌方今日漸時快氣仍不出雖右府○（右傍書「令」）參

内了晚景左中将隆實朝臣爲御使來所出逢

仰云兼々所被仰薫衣香調合之事可被聞食

間一兩日中可參旨也跪承了明後三日已

刻可參旨申入了凡薫衣香之事雖非傳授亦有

口傳等從 後西院委被仰聞之大概余外無其

仁歟今度可申入子細條々仰下爲公用所習置

心（尤）叶所存喜悅々々

「（70丁ウ）

（一日条後文「公方殿より」云々は省略）

二日壬子 天朝晴午後猶半後雨下

無爲指要事人來而已

三日癸丑 天陰時々見日影朝間雨時々下晚猶

不休

已刻武家傳奏兩人來皆言談此席先日不來之

賀茂方申狀寫留間返遣云々已半刻參 内今

日薫衣香御調合始也先日蒙仰之間書薫衣香

方五種 山吹 八重一重 潤紅 ねみたれかみ 臺 以上書折紙

一々別紙也

隨身之又持參香具等被召七十二條間先申権

「（72丁オ）

目之事即一々御調香大典侍局新大典侍局兩

人時々在御前凡薫衣香事雖無爲指披（ママ）傳所

非無口實仍披藏之事等一々令言上尤有御

感 後西院ヨリ被傳下之趣不殘一事申入了

當時調合之事無知古實者余不慮傳來叶時宜

是聊數奇之所爲也自愛々々酉刻退出了

（四日条 略）

「（72丁ウ）

『基熙公記』（註四）元禄十五年（一七〇二）

以上の記述に鑑みて、後水尾法皇震筆の薫物書が存在し、それを後西



院が書写したとする伝承には、蓋然性が認められよう。また、基熙が確かに後西院から薫衣香五種の委細を聞き伝えたとすれば、跋文に云う「薫御相傳」とは、「新院」こと後西院から基熙に対して行われた薫物方の伝授を意味する可能性があるが、上述の『基熙公記』に「非傳授」とあるところとは齟齬を生じる。日次の記述が基熙の謙退の姿勢を反映している可能性も含めて、跋文の解釈や史実性の判断にはなお一層の調査と慎重な分析を要するかと考える。

また、東山御文庫本は、前述の通り後水尾天皇御書として皇室に伝来した可能性のあることから、陽明文庫本の跋文に云う「後水尾震筆」が東山御文庫本に該当する可能性は、極めて高いと考える。一方で、跋文に陽明文庫本の底本として言及される「新院自令寫御秘本」こと後西院宸筆の一本に該当しそうな伝本については、既存の目録類に所在や伝来の有無について報告が無く、稿者が現時点までに実施してきた調査においても未確認である。

東山御文庫本と陽明文庫本の現状には、以上の(一)から(四)を要因として、互いが載録する処方や諸説の一部の内容、及び(五)に示した処方と説の合計に相違が生じていることが分かる。一方が他方を直接の底本として臨写したものとしては、異同の甚だしいことから、二本は直接的な書承関係に無いものと推定すべきであろう。この可能性に鑑みて、陽明文庫本の跋文に云う「新院」こと後西院の御秘本が存在したと、及びこの散逸本が陽明文庫本の底本であり、東山御文庫本が跋文に云う「後水尾震筆」こと後水尾法皇震筆の写本に該当する可能性は高いと考える。

今後の調査研究では、後西院御秘本なる散逸本の探索や、『基熙公記』の記述に照らした陽明文庫本の跋文の跡付け等に取り組むことにより、東山御文庫本と陽明文庫本との先後関係の解明、及び『薫物調合秘方』

原本の確定ないし復元に向けて、引き続き取り組みたい考えである。

## 注

- 一、拙稿「東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」『杏雨』第十四号、武田科学振興財団、平成二十三年
- 二、拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』翻刻…附・『薫物秘藏抄』人名家名等解説」『薫物書の研究』第二号、薫物書研究会、平成二十八年）八―十二頁参照。
- 三、以下の『基熙公記』本文は拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』翻刻」『薫物書の研究』創刊号、平成二十六年）の解題文末注六〇において引用しており、併せて参照されたい。
- 四、東京大学史料編纂所所蔵、謄写本、請求記号：2073-175-84-54

## 附記

本稿はJSPS科研費JP1800340の助成を受けたものです。  
本稿への「焼物之方」翻刻の掲載に際して許諾を賜りました公益財団法人陽明文庫、及びご高配を賜りました同文庫長名和修氏、右のJSPS科研費補助事業による活動の一環として平成三〇年度に実施しました同文庫における閲覧調査にご参加くださった研究分担者及び研究協力者の皆様（広島県立歴史博物館主任学芸員石橋健太郎氏、帝京大学短期大学専任講師中村健太郎氏、志學館大学専任講師日高愛子氏）、並びに「焼物之方」の書誌に関する愚見に貴重なご教示、ご指摘の数々を賜りました古典研究会の皆様方、並びに本稿への査読を賜りました方々に対しまして、深甚なる謝意を表します。

【表1】 東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』を基準とした載録方・説の概要及び同類文 一覧

書名	所蔵機関等	掲出順	方・脱番	他本の番	紙・項目名	由緒、概要等	書中と他書の同題文(【 】内は重宝譜書の略号。内容は表2に記載。赤字は真山御文庫本とその通巻)
重宝適合秘方	東山御文庫	1	方1	方1	黒方	此方旧院御ソツカラ御相伝也、依之常二令調合秘方也	
重宝適合秘方	東山御文庫	2	方2	方2	同方(黒方)	正親町院御方	【衆】方61△.75△
重宝適合秘方	東山御文庫	3	方3	方3	侍従	秘方巻物内也；此巻物 寂筆(後柏原院)焼失可憐々々	【重集】方40.56【焼物】方10【故書】方46【重上】方53
重宝適合秘方	東山御文庫	4	方4	方4	黒方	品二相伝之方	
重宝適合秘方	東山御文庫	5	方5	方5	仙人	自後陽成院新上東門院御相伝方也	
重宝適合秘方	東山御文庫	6	方6	方6	同(仙人)	奥	
重宝適合秘方	東山御文庫	7	方7	方7	玉椿	勅作方也	【重上】方131【方】方33
重宝適合秘方	東山御文庫	8	方8	方8	千種	勅作方	【た】方21【重・京菊】方10【重上】方85.137【黒秘】方8
重宝適合秘方	東山御文庫	9	方9	方9	花橘	勅作方	【重・京菊】方14【重上】方80【方】方45
重宝適合秘方	東山御文庫	10	方10	方10	野風	勅作方(※野風は花橘から生まれた?)	【重・京菊】花橘方15【重上】野風方95
重宝適合秘方	東山御文庫	11	方11	方11	黒方	轉法輪家方美香公以自筆書写之	【た】方6【重上】方24.113△【方】方10△
重宝適合秘方	東山御文庫	12	方12	方12	同(黒方)	右准后御方従 後陽成院御相伝之方云々	
重宝適合秘方	東山御文庫	13	方13	方13	同(黒方)		
重宝適合秘方	東山御文庫	14	方14	方14	仙人		【重方】仙人方10
重宝適合秘方	東山御文庫	15	方15	方15	玉椿		【重上】方89【方】方23
重宝適合秘方	東山御文庫	16	方16	方16	野風		
重宝適合秘方	東山御文庫	17	方17	方17	侍従		
重宝適合秘方	東山御文庫	18	方18	方18	富士		
重宝適合秘方	東山御文庫	19	方19	方19	ほし(干)	九条家方	【方】方78
重宝適合秘方	東山御文庫	20	方20	方20	をそくら	伏方・寛文五十五十日作テ調合	【秘方】方51△
重宝適合秘方	東山御文庫	21	方21	方21	千年菊	秘伝方也可秘々々・伏方・同日(寛文五十五十日)調合	
重宝適合秘方	東山御文庫	22	方22	方22	若草	近衛殿御方・東方之内	
重宝適合秘方	東山御文庫	23	方23	方23	若草	伏方・同日(寛文五十五十日)調合此夜重ヲ二分入之合損也但匂と無別敬	【重方】方5△【重上】方92△.132【方】方24【95086】方3
重宝適合秘方	東山御文庫	24	方24	方24	落葉	伏方・寛文五々十八調合	【重・京菊】方9△【重上】方76△【上1】方5【上2】方5【黒秘】方10
重宝適合秘方	東山御文庫	25	方25	方25	荷葉	御室方・寛文五々十八調合	【た】方11【重・京菊】方6【秘方】方31【重上】方46.連葉方130【上1】方3△【上2】方3△
重宝適合秘方	東山御文庫	26	方26	方26	同(荷葉)	東方	【重】方122△
重宝適合秘方	東山御文庫	27	方27	方27	同(荷葉)	同(東方)	【重】方25△
重宝適合秘方	東山御文庫	28	方28	方28	同(荷葉)	同(東方)	【重】方27△
重宝適合秘方	東山御文庫	29	方29	方29	同(荷葉)	伏方	
重宝適合秘方	東山御文庫	30	方30	方30	同(荷葉)		
重宝適合秘方	東山御文庫	31	方31	方31	同(荷葉)	勅方・私同；御室方	【た】方11【重・京菊】方6【秘方】方25【重上】方46.連葉方130【上1】方3△【上2】方3△
重宝適合秘方	東山御文庫	32	方32	方32	同(荷葉)	同(勅方・私同；御室方)	【た】方12【重上】方47
重宝適合秘方	東山御文庫	33	説1	説1	(安息香の概要と使用法)	シメリタル物ニ子候茶碗ニ入テスリクタクアマツラ半ニ入ヨクアマツラニ合ツキ合ソウロウ其後残アマツラ入テツキ合候	
重宝適合秘方	東山御文庫	34	方33	方33	侍従	東方・是ハ心より外にちらめ方也	【重ノ方】方4【重】方7
重宝適合秘方	東山御文庫	35	方34	方34	同(侍従)	同(東方)	【重】方10
重宝適合秘方	東山御文庫	36	方35	方35	ししう(侍従)	せしうやうのししうの方；同(東方)	【重集】方61.62.66.76.79.82【焼物】方15.17【重・書様】方4.33【雑要】方6【故書】方4.10【た】方3【重】方21.29.42.67【重上】方17.32.41.100.110【重・乾々】東方方1
重宝適合秘方	東山御文庫	37	方36	方36	ししう(侍従)	同(東方)	【重】方124
重宝適合秘方	東山御文庫	38	方37	方37	同(侍従)	同(東方)	
重宝適合秘方	東山御文庫	39	方38	方38	侍従	冬用之、当家如此・勅	【香秘】方2【故書】方38【た】方17【重上】方54
重宝適合秘方	東山御文庫	40	方39	方39	同(侍従)	同(勅)	【秘方】方9△【上1】方7△
重宝適合秘方	東山御文庫	41	方40	方40	菊花	伏方・寛文五々十八調合	【重上】方64△.千種方83△
重宝適合秘方	東山御文庫	42	方41	方41	同(菊花)	同(伏方)・勅方同之但癖1分云々	【重方】方6【重】方123【重上】方72
重宝適合秘方	東山御文庫	43	方42	方42	同(菊花)	御室方・相伝品	【重方】方125【秘方】方52【重上】方86【方】方41
重宝適合秘方	東山御文庫	44	方43	方43	仙人	伏方	【重】方48【重上】方87【上1】方24【上2】方24.31△.40△.61△
重宝適合秘方	東山御文庫	45	方44	方44	同(仙人)	御室方	【重】方49△【重・京菊】方8【重上】方82.野風方135△【方】野風方105△【黒秘】野風方11【上1】野風方10【上2】野風方10
重宝適合秘方	東山御文庫	46	方45	方45	新枕	勅同 轉法輪方也	
重宝適合秘方	東山御文庫	47	説2	説2	(沈の特徴と調製法)	沈 水にうかへしつみたるよししらへやうはあまりこのやうなるもわろし又のきのさきのやうなるもわろし	
重宝適合秘方	東山御文庫	48	説3	説3	(丁子の特徴と調製法)	丁 をしてしるのあるかよき也過黒きかよき也赤きをさらふ也こしらへやう花枝をとどておろす也	
重宝適合秘方	東山御文庫	49	説4	説4	(白檀の特徴と調製法)	白 過煎なるよしはめもけつりさてききみおろす也	
重宝適合秘方	東山御文庫	50	説5	説5	(薫陸の特徴と調製法)	薫 煎すきとをるやうなるよしかなうすてにくたきとすこふ(う)也	
重宝適合秘方	東山御文庫	51	説6	(なし)	(麝香の特徴と調製法)	麝 焼て久しくゆる程よしなめてにかきは匂よしとすこしらへは毛皮を取りてちも右もへ方へすりてふるう也	
重宝適合秘方	東山御文庫	52	説7	(なし)	(甲香の特徴と調製法)	※ 本巻物内、51より54の頁に「麝香・白檀・沈・丁子・白檀・沈・	

【表1】 東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』を基準とした載録方・説の概要及び同類文 一覧

薫物調合秘方	東山御文庫	70	方49	方47	拾遺	右四方新院御所伝古筆一卷之内	【香秘】方22
薫物調合秘方	東山御文庫	71	方50	方48	黒方	本 尊悟筆	
薫物調合秘方	東山御文庫	72	方51	方49	遅桜	一両合:本云 後奈良院以宸筆令書写者也;慶長十五年十月廿七日 智仁(御自筆)	【秘方】方20△
薫物調合秘方	東山御文庫	73	方52	方50	仙人	一両合:合したひ焼歌;本云 後奈良院以宸筆令書写者也;慶長十五年十月廿七日 智仁(御自筆)	【薫】方125【秘方】方43【薫上】方86【方】方41
薫物調合秘方	東山御文庫	74	方53	方51	梅花	二両合:本 智仁親王御筆;右朱点之分八条殿方也(方59讀語)	
薫物調合秘方	東山御文庫	75	方54	方52	黒方	勅方:四両(＝四両合);古本正親町院宸筆(改行)本 智仁親王筆(方53讀語);右朱点之分八条殿方也(方59讀語)	【秘方】方64△
薫物調合秘方	東山御文庫	76	方55	方53	(黒方)	二両合:古本正親町院宸筆(改行)本 智仁親王筆;右朱点之分八条殿方也(方59讀語)	【秘方】方65△
薫物調合秘方	東山御文庫	77	方56	方54	くろほう(黒方)	三両合:右朱点之分八条殿方也(方59讀語)	【秘方】方60
薫物調合秘方	東山御文庫	78	方57	方55	くろ(黒方)	三両;のち:右朱点之分八条殿方也(方59讀語)	【秘方】方61
薫物調合秘方	東山御文庫	79	挿紙A方1	方61	梅花	新上東門院御方	
薫物調合秘方	東山御文庫	80	挿紙A方2	方62	同(梅花)	勅;三方:寛文六三廿四作調合	【薫集】侍従方48【香秘】方31【雑要】方16【故書】方32,梅花方47【秘方】挿入紙A方2△,同方5,9【た】梅花方7【薫上】梅花方2,7,10,114
薫物調合秘方	東山御文庫	81	挿紙A方3	方63	同(梅花)	勅;三方:寛文六三廿四作調合	【た】方8【秘方】挿紙A方6【薫上】方3
薫物調合秘方	東山御文庫	82	挿紙A方4	方64	同(梅花)	勅;三方:寛文六三廿四作調合	
薫物調合秘方	東山御文庫	83	挿紙A方5	方65	同(梅花)	伏;五方	【薫集】侍従方48【香秘】方31【雑要】方16【故書】方32,梅花方47【秘方】挿入紙A方2△,同方5,9【た】梅花方7【薫上】梅花方2,7,10,114【薫秘】梅花方5【上】梅花方5【上2】梅花方2
薫物調合秘方	東山御文庫	84	挿紙A方6	方66	又(梅花)	伏;五方	【た】方8【秘方】挿紙A方3【薫上】方3
薫物調合秘方	東山御文庫	85	挿紙A方7	方67	又(梅花)	伏;五方	
薫物調合秘方	東山御文庫	86	挿紙A方8	方68	又(梅花)	伏;五方	
薫物調合秘方	東山御文庫	87	挿紙A方9	方69	又(梅花)	伏;五方;先常方	【薫集】侍従方48【香秘】方31【雑要】方16【故書】方32,梅花方47【秘方】挿入紙A方2△,同方5,9【た】梅花方7【薫上】梅花方2,7,10,114【薫秘】梅花方5【上】梅花方5【上2】梅花方2
薫物調合秘方	東山御文庫	88	挿紙A方10	方70	同(梅花)	仁方	【薫・京菊】方2【薫上】方5【方】方46
薫物調合秘方	東山御文庫	89	挿紙A方11	方71	同(梅花)	東方	【薫】方9△,方121
薫物調合秘方	東山御文庫	90	挿紙A方12	方72	同(梅花)	同(東)方	【薫】黒方方41
薫物調合秘方	東山御文庫	91	挿紙A方13	方73	同(梅花)	四辻方	
薫物調合秘方	東山御文庫	92	挿紙C方1	(なし)	?		
薫物調合秘方	東山御文庫	93	方58	方56	くろほう(黒方)	二両合:右朱点之分八条殿方也(方59讀語)	【秘方】方62
薫物調合秘方	東山御文庫	94	方59	方57	(黒方)	のち:元和元年十月七日女院御所御相伝御方可秘者也;本御自筆 智仁;右朱点之分八条殿方也	【秘方】方63
薫物調合秘方	東山御文庫	95	方60	(なし)	黒方	三両合:新上東門院御相伝之御方	【秘方】方56
薫物調合秘方	東山御文庫	96	方61	(なし)	(黒方)	後;三両合:◎:(新上東門院御相伝之御方)	【秘方】方57
薫物調合秘方	東山御文庫	97	方62	(なし)	同(黒方)	二両合:同御方(新上東門院御相伝之御方)	【秘方】方58
薫物調合秘方	東山御文庫	98	方63	(なし)	(黒方)	後;二両合:(新上東門院御相伝之御方)	【秘方】方59
薫物調合秘方	東山御文庫	99	方64	方58	黒方	四両合:勅方、何之勅方不知也	【秘方】方54△
薫物調合秘方	東山御文庫	100	方65	方59	同(黒方)	二両合:同	【秘方】方55△
薫物調合秘方	東山御文庫	101	方66	方60	同(黒方)	相伝不知也	
薫物調合秘方	東山御文庫	102	(なし)	挿紙方1	梅花	寛文六三廿四御調合ノ右ハ御入香也コレニチクワフル也基熙私ニ書来也;後ナン 全ノ二千三百ツク	

【表2】『薫物調合秘方』載録方・説の同類文載録先 略称一覧

略 称 (数字、五十音順)	書 名	所 蔵 先(備考)	請 求 記 号(備考)
95096	薫物調合要書	陽明文庫	95096
薫合	薫物合様	京都大学附属図書館菊亭文庫	菊巻109
た	たきものゝほう	高松宮本(宮内庁管理)	22
薫	薫物之方	徳川林政史研究所	旧蓬左36-7
薫・乾々	薫物之方	武田科学振興財団杏雨書屋	乾々2172
薫・京菊	薫物方	京都大学附属図書館菊亭文庫	マイクロフィルム整理番号P1130
薫・書陵	薫物方	宮内庁書陵部	函号266-118
薫ノ	薫物;薫物ノコト	高松宮本(宮内庁管理)	38
薫集	薫集類抄	国立国会図書館、他(刊本有り)	YR1-N6、等
薫上	薫物方上;薫物秘蔵抄	京都大学附属図書館菊亭文庫	菊巻110
薫方	薫方之書;後西天皇宸翰	宮内庁書陵部	宸1420
故書	薫物故書	専修大学図書館菊亭文庫、等	第2函122号
香具	香具撰様調様	専修大学図書館菊亭文庫	第2函119号
香秘	香秘書	武田科学振興財団杏雨書屋	研1469
黒秘	薫物黒方秘方	宮内庁書陵部	函号163-805
雑要	類聚雑要抄	宮内庁書陵部、他(刊本有り)	函号B6-320、等
衆	衆香類集	徳川林政史研究所	旧蓬左36-5
焼物	焼物調合法	名古屋市蓬左文庫	162-15
上1	薫物書	上田流和風堂	なし(本稿にて便宜上〔無題・薫物書01〕とする)
上2	薫物書	上田流和風堂	なし(本稿にて便宜上〔無題・薫物書02〕とする)
挿紙・恩	(無題・挿紙)	四天王寺国際仏教大学附属図書館恩頼堂文庫	薫集類抄写本(請求記号447)中に伝来。
秘方	薫物調合秘方	東山御文庫(宮内庁管理)	函号113-4-1-11
万	萬方	専修大学図書館菊亭文庫	第2函第118号

## 凡例

### 【翻刻】

- 一、公益財団法人陽明文庫所蔵「焼物之方」(写本、一冊、和装袋綴、中本、請求記号…九四九五三)を底本として翻刻した。
- 一、底本の変体仮名はすべて通行の字体に改めた。
- 一、底本の漢字は、「ㇿ」を除いて原文の用字に近い通行の書体を採用した。
- 一、繰り返し記号は、「ゝ」「く」は底本のまま、「ゝ」は「々」に置き換えて記した。
- 一、文字色は底本のままに表示した。また、本紙中の藍色の細長い小紙片が貼付される箇所には、該当範囲に青書で「藍色細長紙片」と記した。
- 一、字配り、行配りは、底本の現状を反映したものとなるよう、可能な限り底本に忠実に行った。
- 一、表紙、遊紙、本紙の範囲は各紙面の末尾に次のように記して明示した。  
(例) 一丁表末尾 「(一丁表
- 一、東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」の本文に対して異文の見える語句については、当該語句の冒頭右傍書として異文の通番を算用数字により示した。なお、算用数字は朱書により表示した。

### 【校異】

- 一、異文を収集した諸本の略号は次の通りである。  
**【陽】** 陽明文庫所蔵「焼物之方」(書誌情報は前掲**【翻刻】**に記載)  
**【東】** 東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」 写本 一冊 和装袋綴、中本、函号…一一三—四—一—一一、マイクロフィルム版請求記号：N2208
- 一、異文は本文の真下、又は前後に位置する脚欄に配置した。
- 一、異文の標目の表記は翻刻に依った。
- 一、本文の語句・文章・記号の有無や用字、送り仮名、文字色、掲載位置の違い等他、遊紙や挿紙の有無、行末の字配り、紙面の行配りの違いについても異文として収集した。

翻刻と校異

(外題、題簽なし)  
(貼紙「白」)

(洋紙、刷り蔵書票「94953」)

「(表紙)

「(表紙内側)

---

「  
(遊紙裏)

「  
(遊紙表<sup>1</sup>)

---

1  
遊紙  
東  
になし。

2  
（藍色細長紙片） 黒方  
此方旧院御口ツカラ御相傳也  
依之常ニ令調合秘方也

方1 沉 三兩三分 丁 一兩一分

白 三分 薫 三分

貝 三分 麝 一分二朱

同方 正親町院御方

方2 沉 一兩一分 丁 一分三朱

白 一分二朱 薫 一分一朱

「（一丁表）

貝 一分一朱 麝 二朱

（藍色細長紙片） 侍従 秘方卷物内也此卷物 震筆  
燒失可 惜々々

方3 沉 四兩 丁 二兩

貝 一兩 甘 或一分  
一分二朱

（三行分アキ）

「（一丁裏）

2  
旧 東翻刻に「舊」。正しくは陽に同じ。



黒方 品ニ相傳之方<sup>3</sup>

方4 沉 一兩一朱 丁 二分一朱 貝 一分

白 一分一朱 薰 一分 麝 一朱

(四行分アキ)

「(二丁表)

(白紙)

「(二丁裏)

---

3 品 東 拙稿に難読箇所として「●」と表記。「品」に改める。

（藍色細長紙片） 仙人 自後陽成院新上東門院御相傳方也<sup>4</sup>

方5 沉 三兩三分 丁 一兩二朱

貝 二分一朱 白 二分二朱

薰 二分三朱 麝 一朱々中  
三朱

甘 一分二朱 麝 一分一朱

同 奥

方6 沉 二兩 丁 二分一朱

貝 一分 白 一分一朱

薰 一分二朱 麝 一朱々中  
朱中

甘 三朱 麝 二朱々中

（四行分アキ）

┌（三丁表）

└（三丁裏）

4 方也  
〔東〕改行、下寄。

(藍色細長紙片) 玉椿 勅作方也

方7 沉 四兩 丁 二兩

甘 一分二朱 貝 一兩

薰 一分 麝 一分

麝 三分

(一行分アキ)<sup>5</sup>

千種 勅作方

方8 沉 五兩 丁 二兩

貝 一兩 白 一兩

薰 一兩 麝 一分

甘 二分 麝 二分

(一行分アキ)

┌ (四丁表)

5

東 頁末に一行分アキあり。

└ (四丁裏)

花橘 勅作方

方9 沉 二兩二分 丁 三分 かろく

貝 二分 白 三朱

薰 二朱 麝 一朱 重

甘 一朱 おもく 麝 二朱

(二行分アキ)

野風 勅作方

方10 沉 四兩二分 貝 一兩

甘 一分 白 一分一朱

丁 一兩二分 麝 一分

薰 三朱

(二行分アキ)

┌ (五丁表)

└ (五丁裏)

黑方 轉法輪家方實香公以自筆  
書寫之

方1 1 沉 四兩 丁 二兩 白 一兩 薰 一兩

甲 一兩 麝 一分

同

方1 2 沉 三兩二分 丁 一兩一分 白 一兩 貝 一兩

薰 一兩 麝 一分朱中

右

准后御方從 後陽成院御相傳之方云々<sup>6</sup>

同

「(六丁表)

方1 3 沉 一兩一分 丁 二分一朱 白 一分一朱

薰 一分 貝 一分 麝 一朱

仙人

方1 4 沉 一兩一分 丁 二分 貝 三朱<sub>重</sub>

白 三朱<sub>輕</sub> 薰 一分 麝 一朱

甘 三朱<sub>輕</sub> 麝 一朱

玉椿

「(六丁裏)

6

方云々

東 改行、下寄。

方15 沉 一兩 丁 二分 甘 一朱々中 貝 一分 輕

薰 一朱 麝 一朱

野風

方16 沉 二兩 丁 一兩 貝 一分 白 二分

薰 二分 藿 一分 青木 一朱 輕 甘 二朱

桂心 一朱 輕 麝金 一朱 輕 麝 二朱

侍從

(御印聚味富士)

方17 沉 一兩 丁 二分 甘 一分

麝 一分 貝 一分

富士

方18 沉 一兩三朱 丁 一分三朱 貝 三朱

薰 二朱 白 二朱 麝 一朱 燒テ 生腦 朱中

(一行分アキ)

「(七丁裏)

「(七丁表)

7

挿紙方1  
梅花 寛文六三  
廿四御  
木 二兩 大 調合  
花 一兩 小  
○ 半朱コゝニテ入  
貝 二分  
甘 二朱  
臍 三朱  
後ナシ 全  
二千三百ツク  
右ハ御入香也コゝニ  
トチクワフル也  
基熙私ニ  
書朱也

「(挿紙表／七丁裏・八丁表の間)

「(挿紙裏／七丁裏・八丁表の間)

7

挿紙及び挿紙方1以下の記述 東 なし。ただし、東 二十三丁以降に寛文六年三月廿四日付けによる処方群を記載した挿紙一葉あり。この挿紙の記述は 陽 においては二十七丁表から二十八丁表までの本紙に記載。

(藍色細長紙片)

ほしの合様 九条家方

方19 一ちん一兩 一丁子一分 一白檀一朱

一薰陸一朱 一麝香一朱 一甘松少

一蜜 ヨキホトニ

(一行分アキ)

┌ (八丁表)

(白紙)

└ (八丁裏)



(点) 8  
をそさくら 伏方 寛文五五十日始テ調合

方20 沉一兩 丁一分一朱 貝一分三朱 白一朱半 9

薰一分半 甘一朱 麝一朱半

(墨点) 秘傳方也可秘々々伏方  
千年菊 同日調合

方21 沉三兩 丁二兩二朱 甲二分二朱 白一兩 10

薰三朱 甘三朱 麝一朱 麝三朱 11

方22 (墨点) 12 若草 近衛殿御方 東方之内  
若草 伏方 沉五兩 丁一兩二分 白一兩 薰一兩 貝二分 13

方23 沉三兩 占唐三分 貝一兩一分 白二分

丁一兩 薰一分 甘三朱 麝二分 15 16 17 18  
同日調合此時薰二分入之  
合損也但匂ヒ無別儀歟

(墨点) 落葉 伏方 寛文五々十八調合

方24 沉五兩 丁三兩 白三分 薰三分 藿二分 19

麝一朱 青木香一朱 桂心一朱 甘一朱 20

貝一兩 麝二分 占唐一朱 代

21  
(三行分アキ)

「(九丁表)

「(九丁裏)

8 始テ 東 翻刻に「作」。陽により改める。

9 「白一朱半」の下 東 ここに「薰一分半」あり。

10 「白一兩」の下 東 ここに「薰三朱」あり。

11 近衛殿御方 東 翻刻に「御」なし。改める。

12 沉五兩 東 沉三兩

13 貝二分 東 ここから改行。

14 詹 東 翻刻に「詹(ルビなし)」。陽により「詹(ルビなし)」に改める。

15 秘密也 東 翻刻に「秘是」。陽により改める

16 此時 東 翻刻に「比夜」。「此夜」に改める。

17 薰 東 薰ヲ

18 之 東 翻刻に「候」。「之」に改める。

19 「藿二分」の下 東 ここに「麝一朱」あり。

20 「甘一朱」の下 東 ここに「貝一兩 麝二分 占唐一朱」あり。

21 空行幅 東 に六行分あり。

(墨点)

荷葉 御室方 寛文五々十八調合

(藍色細長紙分)

方25 沉三兩 甘三分 貝一兩一分 小 白一分 麝二朱

薰二分 藿二分 丁一兩半朱 麝一分半朱

同 東方

方26 沉三兩三分 丁一兩一分 甘三朱 貝一兩一分 藿二朱

白二朱 麝一分 麝一分 安息香一分

同 同

方27 沉三兩三分 丁一兩<sup>2</sup>分 貝一兩一分 白一朱

甘二朱 しうこん一分 代さかう

同 同

方28 沉三兩三分 丁二兩二分 甘二朱 白一朱

貝一兩一分 麝一分 藿二朱

同 伏方

方29 沉二兩二朱 或四朱 丁一兩 或加一分 或一朱 甲三分二朱

白二朱 輕或三朱或一朱 甘一朱 麝四朱

同

方30 沉四 (以下、脱落のママ)

23

┌ (十丁表)

└ (十丁裏)

22 「(闕字)分」 東にも同じ。伝写の過程における脱落もしくは意図された脱落の両

面を検討すべきであろう。後者の場合、分の目方は口説等の形式で継承された秘説であったか。『薫集類抄』以下の薫物諸書において、丁子の目方は季節ごとに増減されたと伝わる。

23 方30以降の紙面 東に一行分の空きあり。

同 勸方 24  
私同御室方

方31 沉三兩 大 甘三分 貝一兩一分 小 白一分 此方には黄 25  
麝一朱

薰二分 藿二分 丁一兩半朱 麝一分半朱

同 同

方32 沉四兩 甘三朱 大 貝一兩 大 白一朱 大 26

同前 麝一分 藿二朱 大 丁一兩二分 青木香一朱 27

説1 安息香一朱 28  
ツラ半ニ入ヨクアマツラニ合ツキ合候  
其後残アマツラ入テツキ合候

31

「(十一丁表)

(白紙)

「(十一丁裏)

24 私 東 翻刻に「●」。陽により改める。

25 黄\* 東 翻刻に「●●へキ」。陽により改める。

26 「白一朱 大」の下 東 ここに「麝一分」あり。

27 「青木香一朱」の下 東 ここに「安息香一朱」あり。

28 「シメリタル物」云々 東 二行目「アマツラニ合ツキ」、三行目「其後」からの改行に  
よる二行で記述。

29 入デクタキ 東 入デスリクタキ

30 アマツラ 東 ここから改行(注28)。

31 説1以降の紙面 東 一行分の空きあり。

侍従 東方

方33 沉四兩 丁一兩三分 貝一兩一分 甘二分

麝三分 是ハ心より外にちらさぬ方也

同 同

方34 沉四兩 丁二兩 貝三分 麝二朱 麝二朱

せうしやうのしゝうの方 同

方35 ちん四兩 丁二兩 かい一兩 白一分

くん一分 しや二分

「十二丁表」

しゝう 同

方36 ちん二兩 丁三分 かい二分 白二分 くん二分二朱 32

かん二朱 33

同 同

方37 ちん六兩 丁四兩 かい一兩三分 かん三分 う一兩

白二分 さ二朱

侍従 冬用之 當家如此 勸

方38 沉四兩 丁二兩 貝一兩 甘二兩 麝一分

同 34

方39 沉四兩三分 丁二兩 貝二兩 甘二分 青木香一朱 黄 35 麝一朱

「十二丁裏」

32 「くん二分二朱」の下 東 「かん二分」あり。

33 二朱 東 二分

34 黄 東 ここに「同」あり。方38の「冬用之 當家如此 勸」に同じとの意ととれる。  
35 黄 麝一朱 東 ここから改行。「黄」は 東 翻刻に「十七」。陽により改める。

(墨点) 菊花 伏方 寛文五々十八調合

方40 沉二兩 丁一兩 甲三分 薰三朱 36

藿三朱 麝一分

同 同

方41 沉四兩 丁二兩 甲一兩 薰一分 甘一分 麝一分

麝二分 勸方同之但麝一分ト云々

同 御室方 相傳品 37

方42 沉二兩 丁一兩 貝二分 白一朱 薰一朱 麝一朱

「(十三丁表)

(白紙)

「(十三丁裏)

36 「薰三朱」の下 東 ここに「藿三朱」あり。

37 品 東 翻刻に「●」と表示。陽により改める。

仙人 伏方

方43 沉一兩 丁二分 貝一分 白一朱 薰一朱 甘二朱 麝二朱

同 御室方

方44 沉三兩 丁一兩 貝二分 白一朱 薰二朱 麝二分

38  
(二行分アキ)

┌ (十四丁表)

(白紙)

└ (十四丁裏)

38  
方44以降の紙面  
東に四行分の空きあり。

新枕 勸内 轉法輪方也

方45 沉四兩 重 丁二兩 甲二分 白一兩 輕

薰一兩 輕 藿二分 青木一朱 甘一分

桂心一朱 輕 麝一分 麝一朱

39  
(二行分アキ)

┌  
(十五丁表)

39  
方45以降の紙面  
東に四行分の空きあり。

(白紙)

┌  
(十五丁裏)

説2 沈 水にうかへてしつみたるよしこしらへやうハあまり  
このやうなるもわろし又のきのさきのやうなる  
もわろし<sup>41</sup>

説3 丁 をしたしるのあるかよき也色黒きかよき  
也赤きをきらふ也こしらへやう梅枝なとをとり  
ておろす也<sup>42</sup>

説4 白 色黄なるよしかはめもけつりさり  
てきさみおろす也<sup>43</sup>

説5 薫 黄にすきとをるやうなるよしかなうす  
にてくたきてふるう也<sup>44</sup>  
<sup>45</sup>

<sup>46</sup>

(白紙)

「(十六丁表)

「(十六丁裏)

4 0 しつみたる 東翻刻に「しろみたる」。陽により改める。

4 1 わろし 東にここから改行。

4 2 色 東翻刻に「過」。陽により改める。

4 3 色黄 東翻刻に「煎過」。陽により改める。

4 4 黄 東翻刻に「煎」。陽により改める。

4 5 「にて」以下の一行 東ここから次の紙面に記載。

4 6 白紙の前 東ここに一丁あり、麝(香)、貝(香)、蜜についての次の三説を記載。

説6 麝 焼て久しくくゆる程よしなめて(改行)にかきは匂よしとすこしらへは毛皮  
を取り(改行)て左みも右みも一方へすりてふるう也

説7 貝 ふるきを用いまたすらぬさきに水の中へ(改行)灰を入おれぬ程に煎してす  
る也さて千(改行)反あらふ也さて過つは水に蜜を甘くは(改行)へてい  
かにも火ぬるく煎する也是もおれ(改行)「(こまで十六丁裏)ぬ程なるへし  
さて一枚つゝならへて(改行)鳥子のうへにてくたかる程にあふ(改行)る  
也いかにも火ぬるくうつみてこけぬ(改行)やうなるへし

説8 蜜 根本湯せんにて三日三夜練也さ(改行)れは火をうつみて一時二時もねる也  
泡を(改行)とりへらは柳也練て泡のすくなきを用(改行)(以降の紙面に二  
行分の空きあり)「(こまで十七丁表)



説6 ○薫物方ニ奥ト書テアルハ本方ノ外ニカナ 47

ウスニテ調合スルヲ云也ソレハイツレノ方ニテモ 48

本方ノ半分ナリ假令沈ニ兩ハ一兩丁 49 50

二分一朱ハ一分半ナトニベ調合する事也

説7 ○大一ザイト云ハ五兩合小一ザイト云ハ三兩合也

説8 ○占唐ト云香具入方アリ占唐ハ近年

日本ヘハ不渡物也代ニ澤瀉ヲ用澤瀉 51

オモタカノ子也若草ト云薫物ナトニ入物也 52

調合ノ當座ニハ匂ヒ宜カラサルヤウナレトモ

次第二ヨキ香出来スル也若草殊ニカウ 53

ハシキ物也轉法輪家ノ方也焼失云々

説9 ○梅花 新枕 富士ナト殊ニ秘方也

梅花ニハ梅干ノ実ヲワリテ中ノ 54

仁ヲトリ出シ水ニ漬テ數日ヲ經テトリア 55

ケ舐テ見テシワハキ氣ノナキ内トリ出シ 56

陰乾ニベキサミ粉ニベ半朱入レル也事 57

「(十七丁表)

「(十七丁裏)

47 「カナ」の下 〔東〕ここに「ウス」あり、次行は「ニテ」から。

48 「ニテモ」の下 〔東〕ここに「本方ノ」あり、次行は「半分」から。

49 假令 〔東〕翻刻に「或人云」。〔陽〕により改める。

50 「丁」の下 〔東〕ここに「二分一朱ハ一分半」あり、次行は「ナトニ」から。

51 「澤瀉」の下 〔東〕「ハ」あり。

52 云 〔東〕云

53 「カウ」の下 〔東〕「ハシキ」あり、次行は「物也」から。

54 「中ノ」の下 〔東〕「仁ヲトリ」あり、次行は「出シ」から。

55 「トリア」の下 〔東〕「ケ舐（ルビ「ネフリ」）テ」あり、次行は「見テ」から。

56 「出シ」の下 〔東〕「陰乾ニベ」あり、次行は「キサミ」から。

57 「事」の下 〔東〕「外ノ口傳也」あり、次葉の冒頭行は「可秘」から。

外ノ口傳也可秘々々

58 新枕富士ナトニハ生脳入也勿論焼

テ用也殊外マシリニクキ物也依之 59

代ニ楠木ノジンナル處ヲキサミフルイテ用也

60 木キネニテツク數ハ一兩合ハ千二百三

カリ二兩合ハ二千二百三兩合ハ三千 61

五六百四兩合ハ四千アマリ五兩合ハ五千

アマリ也蜜スクナクカタク覺ルハカズ多ク 62

「(十八丁表)

ツキタルヨシ蜜過テシルク覺ルハ數スクナクツク也 63

説10 ○木キネニテツク時カナウスニアタリテナル 64

ヲ嫌也カナケ出テ薫物カナクサクナルト也 65

真中ヲツクヘキ也是モ蜜ノ加減ニ 66 67

ヨリカタキハツヨクシルキハ餘ツヨカラヌヤウ

ニヤウニツキヘキ也

68 (二行分アキ)

「(十八丁裏)

58 〔東〕行頭に「〇」あり。

59 「依之」の下 〔東〕「代ニ」あり、次行は「楠木」から。

60 〔東〕行頭に「〇」あり。

61 「三千」の下 〔東〕「五六」あり、次行は「百」から。

62 〔覺〕東翻刻に「煎」。〔陽〕により改める。

63 〔覺〕東翻刻に「煎」。〔陽〕により改める。

64 「ナル」の下 〔東〕「ヲ嫌」あり、次行は「也」から。

65 「也」の下 〔東〕「真中ヲ」あり、次行は「ツク」から。

66 真 〔東〕真

67 「加減ニ」の下 〔東〕「ヨリカタキハツヨク」あり、次行は「シルキハ」から。

68 説10以降の紙面 〔東〕に三行分の空きあり。

説11 69 沈ハ水ニウカヘテミルニ浮ハ木アサクテ悪也

沈ム内ニテ匂ノヨキヲ用也色々ノ匂ヒアル物也

何ノ匂ニモ不似沈ノ香ニテヨキヲ薫物ニハ 70 71

用也伽羅タチハ悪也マナハンダチヨキ也 72・73 74 75

ほしハ別而沈スクレネハ宜シカラス 76 77 78

ヨキ沈ハ近年カツテ不見也

説12 ○薰陸ハ色黄ニスキトフルヲヨシトス

説13 ○白檀是モ色黄ナルヘシ

説14 79 麝香ハイツハル物多シ色ハ赤ヲヨシトス 80

サレトモ此比ハ朱ヲマシフル由アレハ是モ 81

ウタカハシ所詮其香<sup>カ</sup>の異物ニ似スカウ 82

ハシキヲ擇用也 83

説15 ○貝香ハフルキヲ用

説16 ○丁子ハ竹箸ニテ押テミルニシルアル

ヲ用也

84

「(十九丁表)

「(十九丁裏)

69 〔東〕行頭に「○」あり。

70 香 〔東〕右傍書(ルビ)「カ」あり。

71 「ニハ」の下 〔東〕「用也」あり、次行は「伽羅」から。

72 タチ 〔東〕翻刻に「ダケ」。〔陽〕により「ダチ」に改める。

73 タ 〔東〕「ダ」として濁点あり。

74 ダチ 〔東〕翻刻に「ダケ」。〔陽〕により改める。

75 「也」の下 〔東〕「ほしハ別」あり、次行は「テ」から。

76 而 〔東〕テ

77 宜シカラス 〔東〕匂ヒ宜シカラス

78 「宜シカラス」の下 〔東〕「ヨキ沈ハ近年」あり、次行は「カツテ」から。

79 〔東〕行頭に「○」あり。

80 「ヨシトス」の下 〔東〕「サレ」あり、次行は「トモ」から。

81 「是モ」の下 〔東〕「ウタカハシ所」あり、次行は「詮」から。

82 「カウ」の下 〔東〕「ハシキヲ擇用也」あり、次行は「○貝香」から。

83 擇 〔東〕翻刻に「採」。〔陽〕により改める。

84 説16以降の紙面 〔東〕に二行分の空きあり。

85 二十丁表から二十二丁表までの白紙  
の無い次の記述あり。末尾「補闕方」は陽の方46(東の方48)の薫物の名称。

落葉方  
ラクエウノ

方46 沈九兩 丁四兩 甲一兩二分 麝二分

香附子三分 白一分三朱 薰一分 蘓合二兩

菊花方  
キクハノ

方47 沈四兩 丁子二兩 輕 甲一兩二分

沈よりはかるく丁子よりはおもく

薰一分 輕 麝二分 重 甘松一分 重  
丁子よりは輕 自麝香而輕

補闕方  
ホクエツノホウ

(東)  
「二十一丁表」

「(二十丁表)」

「(二十丁裏)」

(白紙)

「(二十一丁表)

方46 沉大四兩 丁大二兩 甲大二兩 金<sup>コン</sup>大一分 86  
甘大一兩

拾遺方

方47 沉四兩 丁二兩 甘松二分 麝金一分 代<sup>シロ</sup>麝香 87  
甲一兩

右四方 新院御所傳古筆 88  
一卷之内

89  
(一行分アキ)

「(二十一丁裏)

86 「金(ルビ「コン」)大一分」の下 東 「甘大一兩」あり。

87 「麝金一分代(ルビ「シロ」)麝香」の下 東 「甲一兩」あり。

88 「新院」前の闕字 東 に無し。

89 方47 識語以降の紙面 東 に四行分の空きあり。

90 (朱点) 黒方

方48 沉四兩 丁二兩 白一兩二分 貝一兩二分

薰一兩二分 麝一分二朱 本 尊悟筆

92 (朱点)

遅桜 一兩合

方49 沉一兩 重 丁一分一朱 貝一分三朱 白一朱々中

薰一分中 甘一朱 麝一朱々中

95 (朱点)

仙人 一兩合

方50 沉一兩 丁二分 貝一分 白一朱

或一

薰一朱 甘二朱 麝二朱

合したひ候敷

96 後奈良院以震筆令書寫者也

慶長十五年十月廿七日 智仁 御自筆

97 (朱点)

梅花 二兩合

方51 沉二兩 丁一兩 小 貝一分 甘一朱 薰二朱 小

麝二朱 本 智仁親王御筆

99

「(二十二丁裏)

「(二十二丁表)

90 朱点 [東] 翻刻に墨色は明記せず。

91 尊悟 [東] 翻刻に「●●」として表記。  
92 朱点 [東] 翻刻に墨色は明記せず。 [陽] により改める。

93 一朱々中 [東] 一朱中

94 一朱々中 [東] 一朱中

95 朱点 [東] に無し。

96 「後奈良院」右肩 [東] 「本云」あり。

97 朱点 [東] 翻刻に墨色は明記せず。

98 「智仁親王」前の闕字 [東] 翻刻に表示せず。 [陽] により改める。

99 方51以降の紙面 [東] 方52の銘(黒方)から処方一行目(末尾「薰一兩一分」)まで二十二丁裏に記載。

100 (朱点) 黒方 勅方 四兩  
方52 沉<sup>上五兩</sup> 白一兩 貝三分 丁二兩 薫<sup>一分</sup>  
102 麿<sup>一分二朱</sup> 103 二兩合  
104 (朱点)  
方53 沉<sup>上二兩一分一朱</sup> 丁三分三朱 白二分一朱 貝<sup>一分</sup> 105  
薫三分二朱 麿一分 古本正親町院震筆 本智仁親王御筆  
107 (朱点) ころはう 108 三兩合  
方54 一 ちん三兩一分三朱 四 くんろく一兩 五 丁一兩一分 二 白三分  
「(二十三丁裏)」

三 109 かい二分一朱 六 さい二分二朱  
110 (朱点) 三兩 ころ のち  
方55 一 ちん一兩三分 五 丁一分一朱 二 白一分二朱  
113 三 かい一分朱中 六 さい三朱 四 くん一分三朱  
115 (朱点) ころはう 114 二兩合  
方56 ちん二兩二分 白二分 かい一分二朱 丁三分 一朱  
くん二分三朱 さい一分  
「(二十三丁裏)」

100 朱点 東翻刻に墨色は明記せず。  
101 上五兩(改行) 下五兩一分 東 四兩  
102 「麿一分二朱」から「ころはう(改行)三兩合」までの七行 東 二十三丁表に記載。  
挿紙あり、マイクロフィルムは挿紙をここに重ね置いたまま撮影された為、これらの記述は画像中に不鮮明。  
103 一分二朱 東 一兩二朱  
104 朱点 東翻刻に墨色は明記せず。  
105 貝二分 東 マイクロフィルムに不鮮明の為「・・・」として記載。  
106 古本正親町院震筆(改行) 本智仁親王御筆 東 マイクロフィルム不鮮明の為「智仁親王御筆」以外は「●」として表記。  
107 朱点 東翻刻に墨色は明記せず。  
108 ころはう 東翻刻に「ころはう」。陽により改める。

109 方54一行目以降の紙面 東 方55(東の方57)末尾(さい三朱)まで二十三丁表に記載。  
110 朱点 東翻刻に墨色は明記せず。  
111 一分一朱 東 二分一朱  
112 方55以降の紙面 東はここまで二十三丁表(注110)。続く二十三丁裏と二十四丁表の間に挿紙三葉が伝来し、第一葉(挿紙A)には陽に方61から73として記載の薫物「梅花」方十四点が記載される。挿紙第二・三葉については注114を参照されたい。  
113 東 注113に記載の挿紙第二葉(挿紙B)及び第三葉(挿紙C)の記述は陽の現状に伝来しない。第二葉(挿紙B)及び第三葉(挿紙C)における記述内容は次の通り。

ちくさ 一合 ほし 五合 遅櫻 一合  
若一合 落葉 菊花 楠闕  
拾遺 已上二合  
(挿紙B)

挿紙C方1 沈五兩 木五分 浅木五朱  
薫麿已上同 甘少 (挿紙C)  
114 ころはう 東翻刻に「ころはう」。陽により改める。  
115 朱点 東翻刻に墨色は明記せず。

116 (朱点) のち

方57 ちん一兩一分二朱 丁一分二朱 白一分 117

かい三朱 さ二朱 くん一分二朱

元和元年十月七日女院御所 118

御相傳御方可秘者也 智仁 本御自筆

119 右朱點之分ハ八条殿方也

120 「(二十四丁裏)」

黒方 四兩合 勅方何の勅方不知歟

方58 沈<sub>上五兩</sub> 白一兩 貝三分 丁二兩 薫一分 121 122 123 麿一分二朱

同 二兩合 同

方59 沈<sub>上二兩一分二朱</sub> 丁三分三朱 白<sub>二分</sub> 貝<sub>二分</sub> 123

薫三分二朱 麿一分

「(二十四丁裏)」

116 朱点 [東] 翻刻に墨色は明記せず。

117 「白一分」の下 [東] ここに「くん一分二朱」あり。

118 「女院御所」の下 [東] ここに「御相傳御方」あり。

119 「右朱點之分ハ」云々 [東] 朱筆によることを明記せず。

120 方58の前の紙面 [東] 二十四丁表の一行目から二十四丁裏の四行目までの紙面に次の黒方方四点を記載。

新上東門院御相傳之御方

黒方 三兩合

方60 沈三兩一分三朱 白三分 貝二分一朱 薫一兩

丁一兩一分 麿一分二朱

後 三兩合 ◎

方61 沈一兩三分 白一分二朱 貝一分朱中 薫一分三朱

丁二分一朱 麿三朱

同 二兩合 同御方

方62 沈二兩二分 白二分 貝一分二朱 薫二分三朱 「(二十四丁裏)」

丁三分一朱 麿一分

後 二兩合

方63 沈一兩一分二朱 白一分 貝三朱 薫一分二朱

丁一分二朱 麿二朱

(以下の紙面：陽翻刻「黒方」方58・59の同文を記載) 「(二十四丁裏)」

(右の四点の処方の通番は[東]翻刻による。)

121 薫一分 [東] 薫二兩一分

122 「薫一分」の下 [東] ここに「麿一分二朱」あり。

123 「貝二分」の下 [東] ここに「薫三分二朱 麿一分」あり。



同 相傳不知也

方 6 0 沉五兩三朱 白一兩一朱<sup>124</sup> 貝三分一朱<sup>125</sup>

薰一兩一分

丁一兩三分一朱 麝二分一朱 三朱

(四行分アキ)<sup>126</sup>

「(二十五丁表)

(白紙)<sup>127</sup>

「(二十五丁裏)

1 2 4 白一兩一朱 東 白一兩一朱

1 2 5 「貝三分一朱」の下 東 ここに「薰一兩一分三朱丁一兩三分一朱」あり。

1 2 6 方 6 0 以降の紙面 東に六行分の空きあり。

1 2 7 二十五丁裏から二十六丁裏までの白紙 東なし。

(白紙)

(白紙)

「二十六丁裏」

「二十六丁表」

新上東門院御方

方61 沉一兩一分 丁一分 白一分 貝一分 薑二朱

梅花

甘三朱 薑三朱 麝三朱 桂心朱中

勸三方 寛文六三廿四始調合

方62 同 沉四兩 丁二兩<sub>小</sub> 貝二分 甘二朱 麝三朱

方63 同 沉四兩 丁二兩<sub>小</sub> 貝三分<sub>大</sub> 甘二分<sub>小</sub> 薑一分<sub>小</sub> 麝一分

方64 同 沉五兩 丁二兩三分 貝一兩一分 甘一分 薑三分 麝一分

方65 同<sub>伏五方</sub> 沉四兩 丁二兩 貝二分 甘二朱 麝二朱

方66 又 沉四兩 丁二兩 甘二分 貝三分 薑一分 麝一分

方67 又 沉四兩 丁一兩 貝三分 甘三分 薑一分 麝一分

「(二十七丁表)

方68 又 沉貝 丁 白 薑 甘 麝 各等分

方69 又 沉四兩 丁二兩 甲二分 甘二朱 麝二朱 先帝方

方70 同<sub>仁方</sub> 沈五兩 丁二兩三分 貝五兩 甘一分 薑三分 麝一分 130

方71 同<sub>東方</sub> 沉四兩 詹唐三分三朱 貝一兩三分 甘三朱 白一分 一朱 131

方72 同<sub>同方</sub> 沈二兩一分 丁一兩一分 貝三分 麝四朱 133 半

甘四朱

「(二十七丁裏)

128 方61から方73 東 二十三丁裏と二十四丁表の間に伝来する挿紙三葉の内の一葉(挿紙A)に記載。

129 始 東 翻刻に「作」。陽により改める。

130 「薑三分」の下 東 ここに「麝一分」あり。

131 「白一分」の下 東 ここに「一朱半」あり。

132 方71の「白(白檀)」以降 東 改行して「丁二兩一分 薑三朱 麝一兩」あり。

133 「麝四朱」の下 東 ここに「甘四朱」あり。

方73 同<sup>四辻方</sup> 沉二兩 白二分 貝二分 丁二兩  
甘一分 麝一分 134

(六行分アキ)

(白紙)

「(二十八丁表)

「(二十八丁裏)

134 「丁二兩」の下 東ここに「甘一分 麝一分」あり。

右一帖以 後水尾震筆

新院自令寫御秘本也 基熙

薰御相傳之後頻望申之

間致免書寫於燈下卒爾書

之秘函底者也

貞享元年仲冬吉辰 左僕射基熙

「二十九丁表」

（白紙）

「二十九丁裏」

135 書写者識語および以降の白紙 東 なし。

(白紙)

(白紙)

「二十六丁裏」

「二十六丁表」

---

└  
(裏表紙)

└  
(裏表紙内)

【参考】拙稿「東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」掲載釈文の正誤一覧

・ 正誤一覧の概要

平成二十三年六月発行『杏雨』第十四号に掲載された拙稿「東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」には、東山御文庫に伝来する「薫物調合秘方」の釈文を掲載した。釈文は原本ではなく白黒で撮影されたマイクロフィルム及び白黒印刷による紙焼写真に基づき作成したが、これらの複製資料には、撮影状態に由来する難読箇所が散見した。この度、陽明文庫に伝来する諸本との校合により、これらの難読箇所の多くを解説することができた。また、稿者の不手際による誤読箇所も複数確認するに至った。

以下の紙面では、本稿に掲載する校異の参考として、右記の難読箇所及び誤読箇所の補遺、訂正を一覧として行う。なお、これらの補遺、訂正の内容については、本稿における校異においても明記しており、併せて参照されたい。

・ 釈文中の正誤一覧(通番は11〜44頁校異のそれによる。**東**は釈文の略称。)

- 1 旧 **東**翻刻に「舊」としたが、正しくは略体字「旧」を使用。
- 2 品 **東**翻刻に難読箇所として「●」と表記。正しくは「品」。
- 1 1 近衛殿御方 **東**翻刻に「近衛殿方」。正しくは「近衛殿御方」。
- 1 4 詹(ルビ「セン」) **東**に「詹」、ルビなし。正しくは「詹」、ルビなし。
- 1 5 秘密也 **東**翻刻に「秘是」。正しくは「秘密也」。
- 1 6 此時 **東**翻刻に「比夜」。正しくは「此夜」。

1 8 之 **東**翻刻に「候」。正しくは「之」。

2 5 黄(ルビ「キ」) **東**翻刻に「●●ヘキ」。正しくは「黄(ルビ「キ」)」。

4 0 しつみたる **東**翻刻に「しろみたる」。正しくは「しつみたる」。

4 2 色 **東**翻刻に「過」。正しくは「色」。

4 3 過黄 **東**翻刻に「煎過」。正しくは「過黄」。

4 4 黄 **東**翻刻に「煎」。正しくは「黄」。

4 7 假令 **東**翻刻に「或人云」。正しくは「假令」。

6 2・6 3 覚 **東**翻刻に「煎」。正しくは「覚」。

7 2・7 4 ダチ **東**翻刻に「ダケ」。正しくは「ダチ」。

8 3 擇 **東**翻刻に「採」。正しくは「擇」。

9 0・9 2・9 5・9 6・9 7・1 0 0・1 0 4・1 0 7・1 1 0・1 1 5・1 1

6・1 1 9 朱点及び朱筆による識語 **東** 白黒撮影・印刷資料に薄い灰色

で表示される。陽明文庫本に同じく朱筆による可能性がうかがえる。

9 1 尊悟 **東**翻刻に「●●」。正しくは「尊悟」。

9 8 本(闕字) 智仁親王御筆 **東**翻刻に闕字なし。正しくは闕字あり。

1 0 1 上五兩  
下五兩一分 **東**翻刻に「四兩」。正しくは陽明文庫本に同じ。

1 0 6 古本正親町院震筆(改行)本(闕字) 智仁親王筆 **東**翻刻に撮影都合による難読箇所として表示。マイクロフィルムは薄様が本紙の上に置かれた状態で撮影されている為、陽明文庫本との校合には原本の閲覧又は再撮影を要する。

1 0 4・1 1 5 ころほう **東**翻刻に「くろほう」。正しくは「ころほう」。



## 附・『薫物調合秘方』 人名家名等解説及び索引

### 凡例

一、『薫物調合秘方』の諸本である公益財団法人陽明文庫所蔵「焼物之方」(写本、一冊、和装袋綴、中本、請求記号…九四九五三)及び東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」(写本、一冊、和装袋綴、中本、函号…一一三—四—一—一、マイクロフィルム版請求記号…Z2908)にあらわれる人物の呼称と家名及びその他団体、施設名、及びそれらを含む複合名詞について解説した。ただし、解説末尾に示した人名家名等の掲出箇所については、解題8頁掲載の【表1】に示した東山御文庫本の方及び説の番号及び各箇所における表現を優先して示した。

一、人名や家名の内、次の拙著及び拙稿において解説したものについては、既出の内容を適宜加筆修正して掲載した。

・『薫集類抄の研究…附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年十二月

・『徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』翻刻』、『薫物書の研究』、創刊号、薫物書研究会、平成二十六年四月

・『京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』翻刻…附・『薫物秘蔵抄』人名家名等解説』、『薫物書の研究』、第二号、薫物書研究会、平成二十七年四月

・『京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「江戸下向雑々覚」翻刻と脚注…附・「江戸下向雑々覚」人名家名等解説及び索引』、『薫物書の研究』、第三号、薫物書研究会、平成二十八年十月

・「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』影印と翻刻…附・『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」、『薫物書の研究』、第四号、薫物書研究会、平成三十年三月

一、解説は、書中の人称や呼称を標目として行い、人物の場合は氏名、生没年、享年(数え年)、家系、略歴、号、その他の動静、薫物との関わり並びに『薫物調合秘方』陽明文庫本翻刻中の掲出先及び掲出時の呼称について記した。家名等の場合はその沿革と翻刻中の掲出先及び掲出時の呼称について記した。これらの名称が薫物の処方及び調合法の由緒に係る記述等として記載される場合は、それらの処方及び調合法の載録書名及び通番を列挙するとともに、各処方及び調合法の他書における同類文の情報についても併記した。なお、各標目に関連する事項が本誌掲載の解題及び本解説に記載される場合は、次のように当該箇所の記載頁数を示して参考に供した。

(例) 解説中のある人物について『薫物調合秘方』人名家名等解説及び索引の別の頁に関連する解説が記載される場合

…轉法輪三条實香(人名家名等解説及び索引64頁「實香公」)は、…

一、解説は、氏名など呼称の旧仮名遣いによる五十音順に行った。

一、仮名遣いの「ん」及び「む」は「ん」に統一した。

一、標目となる呼称には、原則として掲載元の本文における初出のそれを使用したが、一般に通用する呼称と異なる場合は、一般の呼称も標目に加え、該当する書中の呼称を示した。

(例) 轉法輪三条實香 ↓ 實香公

一、標目の読みは、既存の辞書類において確定された通例及び類例を採集して示した。標記には、歴史的仮名遣いによる音訓に平仮名を、現代仮名遣いによる音訓に片仮名を用いた。

一、人物の履歴は『公卿補任』、『尊卑分脈』、『本朝皇胤紹運録』、『歴代編年集成』、『皇年代私記』、『諸家伝』、『系図纂要』、『徳川諸家系譜』並びに『寛政重修諸家譜』の記述に依った。履歴及び伝承及び考察結果の出典伝本や典籍により説の分かれる場合等に、必要に応じて併記した。

一、解説中に処方及び調合法の同類文の載録先を記載する場合は、薫物書の書名及び所蔵先を併記した。テキストを引用した薫物書の写本の所蔵情報及び活字本の有無及び活字本の詳細は次の通りである。

・ 薫集類抄、写本、上下二巻、国立国会図書館所蔵、請求記号：Z11-N2。活字本…有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。

・ 薫方之書、写本、一点（袋共十点、内文書六葉）、後西天皇宸翰、宮内庁書陵部所蔵、請求記号：宸一四二〇。活字本…無。

・ 香之書（掛香之方）、写本、一卷、名古屋市蓬左文庫所蔵、請求記号：162-14。活字本…有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。

・ 香秘書、鎌倉時代写本、一卷、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、請求記号：研 1469。活字本…有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。

・ 衆香類集、写本、折本一帖、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所旧蓬左文庫所蔵、請求記号：旧蓬左 36-15。活字本…無。

・ 薫物合様、写本、一卷、寛文六年権大納言公規、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵、請求記号：菊卷 109。活字本…無。

・ 薫物故書、写本、一冊、専修大学図書館菊亭文庫所蔵、請求記号：第2函 122（マイクロ請求記号：4-1110）。活字本…有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。

・ 薫物調合秘方、写本、一冊、宮内庁東山御文庫所蔵、請求記号（函号）：1134-1111。活字本…有（拙稿「東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」解説と釈文―杏雨書屋所蔵「香秘書」享受史一考―」、『杏雨』第十四号、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋、平成二十三年六月）

・ 焼物調合法、写本、一卷、名古屋市蓬左文庫所蔵、請求記号：162-95。活字本…有（拙著『薫集類抄の研究』附・薫物資料集成』、三弥井書店、平成二十四年）。

・ 薫物（ノコト）、写本、一冊、高松宮本、請求記号：38。活字本…無。たきものゝほう、写本、一冊、高松宮本、請求記号：22。活字本…無。

・ 薫物之方、写本、折本一帖、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所旧蓬左文庫所蔵、請求記号：旧蓬左 36-17。活字本…有（拙稿「徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」翻刻」、『薫物書の研究』創刊号、薫物書研究会、平成二十六年四月）。

・ 薫物之方、写本、一冊、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、旧乾々斎文庫旧蔵、請求記号：乾々 2172。活字本…無。

・ 薫物秘蔵抄、写本、今出川公規自筆、一卷、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵、請求記号：菊卷 110。活字本…有（拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」翻刻」附・「薫物秘蔵抄」人名家名解説」、『薫物書の研究』第二号、薫物書研究会、平成二十七年四月）。

・ 萬方、写本、一冊、専修大学図書館菊亭文庫所蔵、請求記号：菊亭文庫二函第一一八号。活字本…有（拙稿「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『萬方』及び『香具撰様調様』影印と翻刻」附・『萬方』及び『香具撰様調様』人

名家名等解説及び索引』、『薫物書の研究』、第四号、薫物書研究会、平成三十年三月）。

- ・ 香具撰様調様、写本、一冊、専修大学図書館菊亭文庫所蔵、請求記号…菊亭文庫二函第一一九号。活字本…有（拙稿「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』影印と翻刻…附・『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」、『薫物書の研究』、第四号、薫物書研究会、平成三十年三月）。

- ・ [無題・薫物書一]、写本、一冊、公益財団法人上田流和風堂所蔵、請求記号：246。活字本：無。

- ・ [無題・薫物書二]、写本、一冊、公益財団法人上田流和風堂所蔵、請求記号：247。活字本：無。

一、標目とした人名家名等の掲出箇所については、解題8頁掲載の【表1】に示した東山御文庫本の方及び説の番号及び各箇所における表現を収集して標目の文言に傍線を付し、解説の末尾に次のように記した。

（例）標目「正親町院」の場合

方・説 黒方方2（正親町院御方）、黒方方52・53（古本正親町院震筆（改

行）本智仁親王御筆）

あ行

## 正親町院

おきまぢんの

第一〇六代正親町天皇。正親町院の薫物については既出の拙稿において小考を加えたことがある(注二)。以下の本項では、『薫物調合秘方』における正親町院関係箇所について、既出の拙稿における考察に適宜加筆修正する形で解説する。

正親町院は永正一四(一五一一)年五月二九日誕生。後奈良天皇第一皇子。母参議万里小路賢房女贈皇太后吉徳門院榮子。諱方仁(みちひと)。天文二(一五三三)年十二月九日に十七歳で親王となる。弘治三(一五五七)年九月九日父帝崩御、十月二十七日踐祚。三年後の永禄三(一五六〇)年正月二十七日に即位。天正十四(一五八六)年七月二十四日誠仁親王(号陽光院)薨去により、同年十一月七日皇孫和仁に親王宣下して讓位。文禄二(一五九三)年正月五日に仙洞にて七十七歳で崩御した。

正親町天皇は和漢の学問、教養を幅広く習得して奨励したほか、寵臣を召し出して立花や炷香等も嗜んでいる。右大臣三条西公條から『帝範』や『職源抄』『源氏物語』等の進講と、古今傳授や『伊勢物語』の傳授を受けた。皇子誠仁親王に対しては、四辻公遠に命じて琴を始めとした音曲の稽古を授けた。公遠はまた立花の名手であり、御前に召されて度々實作に及んでいる。

薫物については、父帝が轉法輪三条實香(人名家名等解説及び索引64頁「實香公」とその子息公頼から薫物の傳授を受けたことがあり、永禄三(一五六〇)年、同五(一五八二)年ならびに同八(一五八五)年には、父帝の調合した「薫物」の下賜に与っている(『後奈良院宸記』等)。即位して後は、公家の寵臣や武家の有力者に対して、自ら調合した「薫物」や「匂袋」の下賜を頻繁に行ったことが、『御湯殿上日記』等の記述から知られる。

先行研究によると、正親町天皇が「薫物」と「匂袋」の調合や贈答に及んだとする記事は、『御湯殿上日記』だけで六十八件を数え、「匂袋」の一種と推定される「掛け袋」の下賜三十三件を合すると百一件にのぼる。この件数は、後奈良朝における「薫物」及び「匂袋」の下賜や調合、贈答に関する記事が、『御湯殿上日記』に十五件、『後奈良院宸記』に三件確認されることに比して各段に多い(注三)。

薫物書の傳承によれば、正親町院は薫物を調合、贈答するのみならず、調合の為の処方を考案ないし所持してそれを相傳したこともあったと云う。例えば、専修大学図書館菊亭文庫所蔵の秘傳書『万方』には、正親町院の処方と傳わる薫物方が三記載録される。いずれも薫物「黒

方」の処方であり、内二点は同一の処方であった。これらの来歴及び内容を検討したところ、正親町院については、父帝のように轉法輪三条家(人名家名等解説及び索引75頁)の合香家から直接薫物の秘方秘説を授けたとする史實や傳承は傳わらないが、轉法輪三条實香による薫物相傳を受けた父帝から薫物の下賜に度々与っていた他、皇族の近親者で院の信任に与っていた仁和寺宮門跡任助入道親王による薫陶により薫物を習得していた可能性が考えられた(注三)。

『薫物調合秘方』にも正親町院ゆかりの品と傳わる薫物方が三記載録されており、やはり黒方方であるが、処方の内容及び来歴は、『万方』等に傳來したそれらとは異なる。本書に傳わる正親町院ゆかりの処方と同類文は次の通りである。

1 同(黒方)方2(正親町院御方)…【同類文】①『衆香類聚』黒方方61、②『衆香類聚』黒方方75(勅)

2 黒方方52(勅方/四両合)／古本正親町院宸筆(改行)本 智仁親王筆(方53識語)／右朱点之分八条殿方也(方59識語)…【同類文】『薫物調合秘方』黒方方58(四両合/勅方、何之勅方不知也)

3 二両合(黒方)方53(古本正親町院宸筆(改行)本 智仁親王筆/右朱点之分八条殿方也(方59識語))…【同類文】『薫物調合秘方』黒方方59(二両合/同(黒方))

右の三点の処方の内、第一の方は「正親町院御方」として傳來する。同類文は、管見に、徳川林政史研究所に収蔵される旧蓬左文庫所蔵『衆香類聚』に載録の黒方方二点であり、うち一点は由緒を伴わないが、もう一点は「勅」、天皇考案の処方として傳來する。

第二、第三の処方は同じ由緒を伴う二点一組の品と考えられる。第二の処方は冒頭に「勅方」、「四両」とあり、天皇考案の四両合の薫物方であることが明記される。また、本方を含む処方の内、前後に配置されて銘等の右肩に朱筆で釘型の約物が記入されたものについては、後文に「右朱点之分八条殿方也」とあることから、全て「八条殿方」、陽光院皇子で正親町天皇御養子の八条宮智仁親王(人名家名等解説及び索引76頁)考案ないし所持した薫物方として傳來したことが明記される。正親町院ゆかりの処方であることは方の末尾までに併記されない。ただし、続く第三の処方には、「古本正親町院宸筆(改行)本 智仁親王筆」とある。これによれば、「古本」は正親町天皇宸筆であり、「本」は智仁親王の御自筆であると云う。「古本」と「本」にはいずれも黒方方53が載録されていたのであり、「薫物調合秘方」が直接依拠したのは、智仁親王御自筆とされる「本」であったと解釈できる。

第二の処方である黒方方52は、前述の通り「古本正親町院宸筆(改行)本 智仁親王筆」と

の由緒を伴う第三の処方の黒方方53と前後して記載される。銘の「黒方」は方52の側に記載されて「四兩」とあり、続く方53には銘は無く「二兩合」としか記載されないことから、これらの処方は目方の比率を変えた二点一組の処方として傳來した可能性が伺える。前述の通り、本方は「八条殿」こと智仁親王方としても傳來しており、「古本正親町院震筆（改行）本 智仁親王筆」との傳承とは内容上の重なりもみられる。調査の現状においては、続文の末尾に記載された由緒「古本正親町院震筆（改行）本 智仁親王筆」は、本方にも及ぶものとして記載されたものと見なしておきたい。

『薫物調合秘方』における以上の傳承が正しければ、同書に傳來する正親町院ゆかりの処方三点の内二点は、正親町院宸翰とされる薫物書に類纂されて實の孫で養子でもある八条宮智仁親王に伝えられ、智仁親王の自筆により筆写され、智仁親王の処方として傳來し、本書の依拠資料の一つとされたことが伺える。

本書の諸本の内、東山御文庫所蔵の一本は後水尾院（人名家名等解説及び索引61頁）御書「薫物方」として傳來した可能性がある他、陽明文庫所蔵の一本の跋文には、同本が後水尾院宸筆の一本に連なる写本であり、「新院」こと後西院（人名家名等解説及び索引66頁）の「御秘本」を底本として近衛基熙（人名家名等解説及び索引84頁）に筆写された旨が明記される（解題参照）。一方で、本書の依拠資料とされる正親町院宸翰や智仁親王自筆の薫物書については所在と全容が不明であり、昭和初期の禁裏書庫を対象とした研究成果<sup>〔金〕</sup>においても報告が無いことから、この研究成果が発表された昭和初期の皇室においては収蔵されていなかった可能性がある。後水尾院が父帝後陽成院（人名家名等解説及び索引62頁）の弟皇子にあたる智仁親王自筆とされる薫物方を参照、書写した可能性及び経緯については、正親町院宸翰、及び智仁親王自筆と傳わる依拠資料の発見ないし復元とともに、今後の課題として究明したい考えである。

方・説 黒方方2（正親町院御方）、黒方方52・53（古本正親町院震筆（改行）本智仁親王御筆）

**御室 おむろ** 「御室御所」こと仁和寺、同寺の門跡の略称、及び同寺の所在する地域の地名。本書では薫物方を考案ないし所持した合香家の略称として記載されることから、御室仁和寺ないし同寺の門跡の呼称と見なせる。なお、「仁」の略称による合香家については、本稿「仁」の項における解説（人名家名等解説及び索引79頁）を参照されたい。

『薫物調合秘方』に載録される「御室」ゆかりの処方五点、及び他書に見られる同類文は、次の通りである。なお、傍線は、各方の来歴として併記された記述の内、稿者が特に注目すべきと考えた語句に対して行っている。

- 1 荷葉方25（御室方）寛文五々十八調合…【同類文】①高松宮本『たきものゝほう』荷葉方11（夏）しやうれん葉、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』荷葉方6（処方の由緒等ナシ）、③本書・荷葉方31（左記の2）（勸方）私同御室方、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』荷葉方46（大和トジ）、⑤同上・蓮葉方130（宿紙ノ表紙薫方）四辻流也／後白川右府新作、⑥上田流和風堂所蔵（無題・薫物書01）荷葉方3（夏用之）、⑦上田流和風堂所蔵（無題・薫物書02）荷葉方3（夏用之）
- 2 同（荷葉）方31（勸方）私同御室方…【同類文】①高松宮本『たきものゝほう』荷葉方11（夏）しやうれん葉、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』荷葉方6（処方の由緒等ナシ）、③本書・荷葉方25（右記の1）（御室方）寛文五々十八調合、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』荷葉方46（大和トジ）、⑤同上・蓮葉方130（宿紙ノ表紙薫方）四辻流也／後白川右府新作、⑥上田流和風堂所蔵（無題・薫物書01）荷葉方3（夏用之）、⑦上田流和風堂所蔵（無題・薫物書02）荷葉方3（夏用之）
- 3 同（荷葉）方32（同（勸方）私同御室方）…【同類文】①高松宮本『たきものゝほう』荷葉方12（処方の由緒ナシ）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』荷葉方47（墨流半切）
- 4 同（菊花）方42（御室方）相傳品…【同類文】①宮内庁書陵部所蔵後西天皇宸翰『薫方之書』菊花方6（処方の由緒等ナシ）。ただし本書は後西天皇宸翰と、②徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』菊花方123（処方の由緒等ナシ）、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』菊花方72（大和トジ）
- 5 同（仙人）方44（御室方）…【同類文】①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』山人方48（処方の由緒ナシ）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』仙人方87（大和トジ）、③上田流和風堂所蔵（無題・薫物書01）山人方24（処方の由緒等ナシ）、④上田流和風堂所蔵（無題・薫物書02）山人方24（処方の由緒等ナシ）、⑤同書・仙人方31（日院御方）、⑥同書・山人方40（氏郷方）、⑦同書・仙人方61（一名富士／従 後陽成院秀次関白殿御相傳）

右の1及び2の処方は同一書中に見られる同類文であり、他書の同類文も共通する。同類文

の数が3点と比較的少ない4の処方を含めて、同類文が他書に複数確認できる。これらの同類文の載録先の内、類纂、書寫の時期を推定できるものは、いずれも江戸時代前期頃の写本と見られるのであって、傳來先は皇室、皇族から公家、地方を拠点とする武家までと多様である。

薰物「荷葉」は平安時代から我が国で調合された、伝統的な種類の薰物の一つであるが、同様に歴史の長い「黒方」、「侍従」、「梅花」等比べて、処方の点数の少ない点に特徴がある。例えば、同じ自然の草花によそえて考案されたと傳わる「梅花」について、管見に、平安時代以降の類纂ないし書写と傳わる薰物諸書において百八十九点の処方を確認しているのに対して、「荷葉」については六十二点にとどまる。

『薰集類抄』記載の傳承によれば、薰物の中でも歴史が長くすぐれた種類として珍重されたと思われるのは「黒方」、「侍従」の二種類であるが、「梅花」もまた平安時代前期から和人独自の処方の考案された種類であり、「黒方」程ではないにしても、特に香りの良い品として評価されている。王朝物語作品『源氏物語』梅枝巻では女主人公の紫上が調合して本領を發揮した種類であり、中世以降の物語注釈書においては「黒方」、「侍従」、「薰衣香」に並んで詳細な勘物が行われた。薰物「梅花」は薰物を専門的に学び傳える人々だけでなく、物語の読者の間でもよく知られた種類であったと考えられる。

これに対して、薰物「荷葉」については最も古い処方でも平安時代中期の合香家にゆかりの品とされるのであり、わが国で処方が考案ないし珍重された時期は「梅花」よりもやや下る可能性がある。『源氏物語』梅枝巻では花散里に調合されて、控えめな女性的美徳を見事に体現して見せたが、読者の反響もまた控えめであった為か、古注釈書において「梅花」ほど詳細に検討されることは無かった。今日確認できる「荷葉」の処方数が「梅花」のそれに対して三分の一度にとどまっていることから、「荷葉」の人氣が「梅花」のそれに遠く及ばないものであったことが伺える。

以上で述べたように、「荷葉」は比較的普及していない種類の薰物であり、処方点数も多いとは言えない。『薰物調合秘方』載録の処方と同じような内容の処方が、同時代の類纂ないし書写と見られる諸書を中心に傳來し、共有されているところには、まずもって、優れた「荷葉」方の希少性が影響していると考えるべきであろう。一方で、『薰集類抄』等の古い時代の諸書に載録される著名な「荷葉」方ではなく、江戸時代前期までに考案されたと見られる新しい時代の「荷葉」方が共有されていることから、これらの諸書が類纂される段階において依拠資料を共有していた、或いは依拠資料と新たな類纂という直接的な関係にあった可能性を伺うべ

きかと考える。

考察が前後したが、ここで1から4の四点の「荷葉」方と同類文の、来歴にまつわる傳承について検討しておきたい。

1の「荷葉」方25は、書中に「御室方 寛文五々十八調合」とある。御室こと御室仁和寺またはその門跡ゆかりの品として傳來した品であり、寛文五年五月十八日にいずこかに置いて、何者かにより調合されたとの意味に解せる。本書には、1の方の他にも同じ期日に調合された旨の記載された複数種類の薰物方が載録される(本稿8頁・表1)。調合の目的や当事者については書中に明記されず、事實としての検証も含めて引き続き調査に取り組みたい考えである。同類文は前掲の①から⑦の七点を確認しており、内③は同じ『薰物調合秘方』に載録される2の処方である。これらの同類文の内、①、②、⑥、⑦の四点は来歴にまつわる記述を伴わない。

③に云う「勸方 私同御室方」とは、本方が「勸」と略される家にゆかりの処方であること、及び本方の書写者の「私」注として「御室方」に同じ処方である旨を記述したものと解せる(人名家名等解説及び索引53頁「勸」)。④に云う「大和トジ」は本方の載録先であり『薰物秘蔵抄』の依拠資料の一つである薰物書が、いわゆる大和綴じの装訂によるものであったことに由来する仮の呼称と考えられた。④の依拠資料の来歴は併記されず、調査の現状において処方の内容からも特定は困難である。⑤は銘を「蓮葉」と云い、漢語で蓮の葉を意味する「荷葉」と語義は同じであるが、「四辻流」こと四辻ゆかりの品であり「後白川右府」こと三条公冬(「新作」とあるとも傳わることから、室町時代前期の三条家において「蓮葉」の銘により新たに工夫、考案された新作薰物の一種であり、後に四辻家に傳來して「宿紙ノ表紙」の装訂による薰物書に載録されたと考えられた。⑤の同類文として、1の方等のように室町時代後期以降の由緒を伴う「荷葉」方が傳來する背景として、⑤の「蓮葉」方が古い時代の「荷葉」方を基として工夫された、或いは、新作として考案されながら、銘の語義が同じ「荷葉」方としても傳來するようになった可能性を検討すべきかと考える。

2の「荷葉」方31については1の同類文③として述べた通りであり、「勸」と略される家にゆかりの処方であって、本方の書写者である「私」により「御室方」、おそらくは1の処方と同じものである旨が注記される。

3の「荷葉」方32は、書中の前文にあたる2の処方と同じ種類、同じ来歴の処方として傳來する。方31の目方の比率を変えて別に行われた処方であり、方31とは一組の品として写し傳えられたであろう。同類文は二点確認できており、一つは①高松宮本『たきものゝほう』載

録の「荷葉」方12、もう一つは②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』載録「荷葉」方47である。①は由緒に係る記述を伴わないが、②には依拠資料が「墨流半切」こと表紙に墨流の施された料紙を用いた半紙本であった旨が記される。ここで注目すべきは、1・2と3との同類文のうち、『たきものゝほう』と『薫物秘蔵抄』のそれらはいずれも同じ順序で前後する処方として傳來している点である。このことは、『たきものゝほう』『薫物秘蔵抄』『薫物調合秘方』の三書が、『薫物秘蔵抄』について「大和トジ」や「墨流半切」の呼称による散逸薫物書に依拠すると傳わる点も含めて、同一ないし極めてよく似た内容構成による薫物書を源泉として共有した可能性を示唆しており、今後の調査において検証、究明したい課題の一つである。

4の「菊花」方42は「御室方 相傳品」と傳わる処方であり、「御室」こと御室仁和寺ゆかりの品と考えられる他に、処方の書写者から「品」と略称される人物に対して相傳された処方である旨が記載されたと解釈できる。本書の来歴に鑑みて、「品」は後水尾院（人名家名等解説及び索引61頁）皇女で近衛基熙（人名家名等解説及び索引84頁）室の品宮常子内親王の略称として行われた可能性がある（人名家名等解説及び索引65頁「品」）。相傳の主については不明であるが、本書の諸本は後水尾院御書及び御水尾院宸翰として傳來することから、後水尾院その人である可能性を第一に検討する必要がある。ただし、品宮及び夫の基熙の目次によると、は後水尾院皇子で品宮の兄にあたる後西院（人名家名等解説及び索引66頁「新院」）から、薫物「梅花」と新作薫物「富士」及び「新枕」という三種の薫物の処方を唯授一人の御秘方として相傳されている。4の方の同類文①は後西院宸翰として禁中に傳來した『薫方之書』にも傳わることから、後水尾院の蒐集した「菊花」方が、後水尾院から直接にでなく後西院を経由して品宮に相傳された可能性もまた検討を要するかと考える。

5の新作薫物「仙人」方44は「御室方」として傳わる処方である。1から4の御室仁和寺ゆかりの品とされる処方の内、来歴の併記されるものは、いずれも皇室又は公家に傳來したとされる処方であったが、5については、七点確認できる同類文の来歴によれば、武家を中心とする家々に傳來した可能性がある。同類文の内、①は尾張徳川家の蓬左文庫に傳來した『薫物之方』に、「山人」の表記で載録される。「山人」は「仙人」の異表記による同義語であり、平安時代の和歌や物語においては「やまうど」又は「やまがつ」と訓まれる。②の「仙人」方は、公家の菊亭家で類纂されたと見られる『薫物秘蔵抄』に依拠資料「大和トジ」として載録される。③から⑦の五点の同類文は、豊臣秀吉恩顧の武將で江戸時代には浅野藩に家老として仕え

た上田宗箇を祖とする茶道上田宗箇流宗家に傳來した薫物書に記載される。③、④、⑥の三点は、①に同じく「山人」の表記によるもので、⑥については「氏郷方」と併記される。⑤及び⑦の二点は、②に同じく「仙人」の表記によるもので、⑤には「日院御方」と併記される。⑦については「一名富士」として新作薫物「富士」方との異説が紹介された後に、「従 後陽成院秀次関白殿御相傳」との由緒が併記される。

⑤の「日院」が人名であるとすれば、中山法華經寺八世で文龜元（一五〇一）年に遷化した同名の高僧があり、本方との関連性の有無について調査検討を要する。⑥の「氏郷」についても調査の現状において特定は困難であるが、戦国武將蒲生氏郷の処方として傳來した可能性を検討する必要があるかと考える。⑦の処方の由緒は、安土桃山時代の為政者である後陽成院（人名家名等解説及び索引62頁）から関白豊臣秀次に相傳された旨を記述するものと解釈できる。『薫物調合秘方』に「御室」ゆかりの品として載録される五点の薫物方の内、1から3の「荷葉」方と4の「菊花」方は、江戸時代前期を中心とする時期に、合香に長じた皇族や公家に蒐集、相傳されたと傳わる品々であり、中には室町時代の公家の合香家による新作と傳わる品も含まれていた。室町時代から江戸時代前期にかけて、高位の貴人に珍重されたことが伺える。5の「仙人」方は安土桃山時に皇室から武家に傳來しており、江戸時代には合香家の公家の他に徳川氏にも蒐集された可能性が伺えた。

「御室」が仁和寺宮門跡の略称であるとして、具体的には誰に比定するのか。江戸時代前期の公家の菊亭家で類纂されたと見られる薫物書『万方』等には、正親町院が「御室御所」こと仁和寺宮門跡から相傳したと傳わる薫物「黒方」方が傳來している他、粉末状の香具を蜜等の液に解き混ぜ、四角く薄い小片状に刻んだ沈を浸して用いたと云う新作薫物「干（保志）」の処方（方74）の由緒として「御室」と記されており、仁和寺において考案ないし所持された処方として傳來したことが知られる。特に前者の黒方方を傳授された「御室御所」については、正親町院と薫物を介して近い関係にあったと考えられること等に鑑みて、伏見宮貞敦親王第二皇子で、合香家轉法輪三条實香（人名家名等解説及び索引64頁「實香公」）女を實母とする、後柏原院（人名家名等解説及び索引57頁）猶子任助入道親王に比定する。千方などを所持したとされる「御室」についても、室町時代から江戸時代にかけて、任助にゆかりの品として傳來した可能性を検討する必要がある。任助の関歴については既出の拙稿において解説しており参照されたい（註五）。

一方で、稿者の最近の調査では、豊臣家御恩顧の武家の子孫に傳來した秘傳書の江戸時代写

本において、「御室御所守理親王」が常に調合したと傳わる薫物「春日野」の次の処方も確認している。

春日野 龍涎香也御室御所守理親王常御調合

沈香 二兩  
十匁也 甘松 二匁  
五分 丁香 二匁  
五分 薰陸 五分

麝香 一匁 白檀 二匁 麝香金 一匁 甲香 五分

右合粉ニ車前子ヲ煎（虫損）

龍涎香ノ如クニカタニ入金鉚ニテタシタル（虫損）

（武雄市歴史資料館所蔵「香調合法」、一冊、武雄鍋島歴史資料、請求記号…前編五—2  
—14。右は十六丁表・裏面に記載）

右の処方の銘は「春日野」と云い、室町時代以降に考案されたと見られる新作薫物の一種である。右の記述の内容から、中国宋代に類纂された香書に載録されて、宋代以前の中国において発祥したと見られる薫香「龍涎香」の処方を元に工夫された可能性が伺える。「春日野」は、室町時代の類纂と傳わる他書において、秋の田畑の景観によそえた「稻妻」と一對の品としても傳来する。いずれも焰硝を配合する点に特徴があり、「春日野」は春日野の狼煙よろしく通常の薫物よりもよく煙の立つように、「稻妻」は火花を放つように仕上げたことが分かっている。また、右の処方には焰硝が記載されていない。また、この処方の同類文は、宋代の香書も含めた諸書において、管見に未確認である。金箔を処方して仕上げたと傳わることから、香りだけでなく仕上がり時の外見にも工夫を凝らした品という印象を受ける。他書に傳わる「春日野」の処方に対して異なる点が散見し、考案ないし所持した人物の独自の趣向を反映する可能性を伺わせる。

「御室」ゆかりの処方は、室町時代から江戸時代前期の長い期間にわたり、多様な支配層において珍重、愛好された可能性がある。「御室」と称された合香家の人物の特定については、「御室」と呼ばれた合香家が複数名存在した可能性も視野に入れながら、各方の来歴についても今後の調査において引き続き究明したい考えである。

方・説 荷葉方 25（御室方 寛文五々十八調合）、同（荷葉）方 31（勸方 私同御室方）、

同（荷葉）方 32（同（私同御室方））、同（菊花）方 42（御室方 相傳品）、同（仙人）

方 44（御室方）

か行

勸 かん 『薫物調合秘方』載録の薫物「荷葉」方 31、32、「侍従」方 38、「菊花」方 41、及び新作薫物「新枕」方 45の冒頭に記載された、これらの処方の由緒に関わる語。「勸方」又は「勸」として記載される。「侍従」方 38には「當家如此 勸」とあり、ここでの「當家」は「勸」家であるとの意味に解せることから、「勸」とは右の薫物五種類の処方八点の処方を考案ないし傳えた合香家名の略称と考えられる（人名家名等解説及び索引 53頁）。

東山御文庫所蔵の傳本を考察した既出の拙稿では、本書に合香家として名前の見える新上東門院晴子（人名家名等解説及び索引 69頁）の生家である勸修寺家の略称と推定した<sup>〔註七〕</sup>。現在までの調査において、その實証的な検証を可能にする史實や傳承の発見には至っていない。以下の解説では、「勸」にゆかりの品々と傳わる左記の薫物方八点（左記の1〜8）の来歴について分析しながら、「勸」の諸方の来歴について改めて検討する。

1 荷葉方 31（勸方 私同御室方）…【同類文】①高松宮本『たきものゝほう』荷葉方 11（夏しやうれん葉）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』荷葉方 6（処方の由緒ナシ）、③本書・荷葉方 25（御室方／寛文五々十八調合）、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』荷葉方 46（大和トジ）、⑤同上・蓮葉方 130（宿紙ノ表紙薫方 四辻流也／後白川右府新作）、⑥上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書 01〕荷葉方 3（夏用之）、⑦上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書 02〕荷葉方 3（夏用之）

2 同（荷葉）方 32（同（勸方））…【同類文】①高松宮本『たきものゝほう』荷葉方 12（処方の由緒ナシ）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』荷葉方 47（墨流半切）

3 侍従方 38（冬用之 當家如此 勸）…【同類文】①杏雨書屋所蔵『香秘書』侍従方 2（八条の式部卿宮の方を故小一条院にあはせらるゝ）、②『薫物故書』侍従方 38（同方（四條大納言））、③高松宮本『たきものゝほう』侍従方 17（紅葉をかたとる）、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』侍従方 54（墨流半切）

4 同（菊花）方 41（同（伏方 寛文五々十八調合）／麝二分 勸方同之但麝一分ト云々）…【同類文】①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』菊花方 64（勸筆巻物）、②同上・千種方 83（大本／三条家秘本）

5 新枕方 45（勸内 轉法輪方也）…【同類文】①徳川林政史研究所『薫物之方』新枕方 49（処方の由緒ナシ）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』新枕方 8（処方の由緒ナシ）、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』新枕方 82（大和トジ）、④同上・野風方 135（処方の由緒ナシ）、⑤専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』野風方 105



(処方の由緒ナシ)、⑥宮内庁書陵部所蔵『薫物黒方秘方』野風方11(大内／杉美作家方)、⑦上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書01〕野風方10(処方の由緒ナシ)、⑧上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書02〕野風方10(処方の由緒ナシ)

6 梅花方62(勸) 三方 寛文六三廿四始調合…〔同類文〕①『薫集類抄』侍従方48(大和常生)、②杏雨書屋所蔵『香秘書』補闕方31(右六方は藏人所小舎人大和常生之秘方也、件常生延喜聖代與公忠朝臣同時相並奉合之役)、③『類聚雜要抄』補闕方16(右六方者、

是藏人所小舎人大和常生之秘方也、云々)、④『薫物故事』侍従方32(常生)、⑤同上・梅花方47(先帝)、⑥本書・梅花方65(伏／五方)、⑦本書・梅花方69(伏／五方／先帝方)、⑧高松宮本『たきものゝほう』梅花方7(梅の花を入事口傳 春もちゐ候)、⑨京都大学附属図書館蔵『薫物秘藏抄』梅花方2(大本／三条家秘本)、⑩同上・梅花7(勸筆巻物)、⑪同上・梅花10(勸筆巻物／右三色三家秘方也、云々)、⑫同上・梅花114(処方の由緒ナシ)

7 梅花方63(勸) 三方 寛文六三廿四始調合…〔同類文〕①高松宮本『たきものゝほう』梅花方8(処方の由緒ナシ)、②本書・梅花方66(伏／五方)、③京都大学附属図書館蔵『薫物秘藏抄』梅花方3(半切／墨流表紙)

8 梅花方64(勸) 三方 寛文六三廿四始調合…〔同類文〕(なし)

1の薫物「荷葉」方31の冒頭には、処方の由緒に関する記述として「勸方 私同御室方」とある。「私同御室方」は「私に御室方に同じ」と訓むか。東山御文庫と陽明文庫とに傳來する写本に異同は見られない。「御室方 寛文五々十八調合」の由緒を伴い傳來する荷葉方25(同類文③)と同じ処方であることについて、本方の依拠資料の筆者ないし本書の類纂者が私的な気づきとして注した記述と考えられる。同類文の中には、新作薫物「蓮葉」方(同類文⑤)も含まれており、室町時代に三条家で考案された新作「蓮葉」の処方であり、四辻家に傳來した由が記される。本方は、伝統的な種類の薫物であり「蓮葉」の同義語である「荷葉」方をもとに室町時代の三条家当主が工夫を施し、「蓮葉」という新たな銘を付けて行われたのであろうが、室町時代中期から江戸時代にかけて、皇族や公家、武家の有力者の手元に傳來する中で、次第に新作としての傳承が失われ、元の「荷葉」の銘により普及したと考えられる(人名家名等解説及び索引50頁「御室」)。

2の「荷葉」方32には冒頭に「勸方」とあり、東山御文庫所蔵の一本にも同じである。同類文は二点確認でき、いずれも処方の由緒に係る事項は併記されないが、同類文②には「墨流半

切」とあり、墨流を施した料紙による表紙を伴う半紙本装訂の薫物書を依拠資料とする旨が記される。

3の「侍従」方38には、本方が冬に用いる種類の薫物であり、「當家」(人名家名等解説及び索引73頁)こと処方の筆者の家には冬に用いる方として、或いは処方の通りの目方で調合するよう傳わることが併記される。記述の内容は東山御文庫所蔵の一本にも同じである。この由緒の末尾に記載された「勸」とは、本方が「當家」の他に「勸」家に傳來する処方であること、又は、「當家」が「勸」家であることを意味して書き添えられたものと解釈できるが、現時点においてどちらかに解釈に決することは困難であり、今後の調査の課題としている。

本方については他書に四点の同類文が確認でき、同類文①は南北朝期の書写と鑑定される『香秘書』に、平安時代中期の合香家である「八条の式部卿」こと仁明天皇皇子本康親王の御所蔵品として載録されたものであり、後に「故小一条院」こと一条天皇皇子小一条院敦明親王がご調合になった処方であるとの傳承が併記される。同類文②は合香家三条家で室町時代に類纂されたと傳わる薫物書『薫物故事』に、「四条大納言」こと嵯峨天皇皇子の源定にゆかりの品として載録される。同類文③には来歴が併記されない一方で「紅葉をかたとる」と記載され、本方の完成品の意匠ないし季節感に関すると思しき説が併記されるが、詳細は不明である。同類文④には「墨流半切」とあり、墨流を施した料紙による表紙を伴う半紙本装訂の薫物書を依拠資料とする旨が記される。

4の「菊花」方41には、本方の由緒が直前の処方に「同じ、すなわち「伏方 寛文五々十八調合」と記載されるものであるとともに、「麝二分 勸方同之但麝一分云々」とも記載される。記述の内容は東山御文庫所蔵の一本に同じである。由緒の前半によれば、本方は「伏」と略される合香家(人名家名等解説及び索引82頁)にゆかりの品であり、寛文五年五月十八日に調合された処方の一つであるとされる(本稿8頁・表1)。由緒の後半には、本方は、「勸方」と称される別の「菊花」方と比較して「同之」、同じ処方であるが、「勸方」側の異文として、香具「麝(香)」の目方は「二分」ではなく「一分」とあることを書き添えている。「勸方」と称される「菊花」方は本書の諸本に載録されない。本書の原本類纂の段階において、本方と同一の処方と見なされて載録は割愛されたが、処方の内容の小異が見られた為、異同の内容のみ引き写されたかと考える。

本方には二点の同類文が確認できており、同類文①には「勸筆巻物」こと天皇自筆の卷子本装訂による薫物書に載録されたことが、同類文②には「大本」及び「三条家秘本」として、大

本の装訂による、合香家の三条家の秘本として傳來した薫物書に載録されたことが、それぞれ併記される。

5の「新枕」方45は新作薫物の処方であり、処方の冒頭に「勸内 轉法輪方也」との記述を伴う。記述の内容は東山御文庫所蔵の一本に同じである。「勸内」とは、2や4の方のように「勸方」の由緒を伴い傳來する薫物方の内の一つであることを意味して記述されたものと解釈しておきたい。「轉法輪方也」とは、轉法輪三条家（人名家名等解説及び索引64頁）において考案ないし傳來したことの知られる処方であるとの意味に解せる。

本方の同類文は同時代の類纂と見られる他書にも傳來するが、そこでは特定の家にゆかりの品である旨は併記されない。なお、薫物諸書には、新作薫物「新枕」については、合香家三条家にゆかりの品との傳承を伴う処方が散見する他、八条殿智仁親王父皇子の陽光院誠仁親王にゆかりの品と傳わる諸方も傳來する（金人）ことから、「新枕」の発祥に関しては、合香家三条家又は皇室において新たに考案された可能性を検討すべきかと考える。

本方については八点の同類文を確認しているが、それらの銘は「新枕」だけでなく新作「野風」としても傳わる。同類文の内①から③の三点は「新枕」方として傳來し、來歴については併記されない。残る④から⑧の同類文五点は、いずれも「野風」方として諸書に載録される。それらの大半は、「新枕」方として傳來する同類文と同じく、具体的な來歴を併記されずに傳來するが、合香家三条家において室町時代に類纂された薫物書の傳本に載録される同類文⑥については、処方の冒頭に「大内」及び「杉美作家方」との由緒を伴う。室町時代後期の轉法輪三条家当主公教については、周防国に下向して、守護の大内氏に薫物の秘方を相傳したとの傳承が知られている（金人）。同類文⑥についても「大内」氏に関わる品として傳來したとすれば、「杉美作家」については大内家に仕えた杉氏の一流に該当する可能性を検討すべきかと考える。

6の「梅花」方62には、処方の冒頭に「勸 三方 寛文六三廿四始調査」と記載され、続下方63及び64を含む「三」つの処方はいずれも「勸」家にゆかりの品であり、寛文六年三月二十四日に調査を開始せられた旨が記される。記述の内容は東山御文庫所蔵の一本に同じである。他書に傳來する本方の同類文は十二点にのぼり、「勸」家ゆかりの処方の中では最も普及した品と言える。

同類文の内比較的古い時代の薫物書等に載録される①から⑤の五点の内、①から④の四点には平安時代中期の合香家として知られる小舎人大和常生ゆかりの品である旨が、室町時代中期の類纂と傳わる⑤には「先帝」として前時代の天皇にゆかりの品である旨が記載される。「先

帝」の呼称は、『薫物調査秘方』中の同類文⑦の冒頭にも「伏／五方／先帝方」として記載される。⑦の記述の内容は、本方が「伏」（人名家名等解説及び索引82頁）と略された合香家にゆかりの五点の処方の一つであり、「先帝」なる前時代の天皇にゆかりの品でもあることを記したものと解釈できる。「伏」の記述は『薫物調査秘方』中の同類文⑥にも記載されている。⑥と⑦は、前者は香具「甲香」を「貝」と、後者は「甲」と記し傳える点において異なるものであり、香具の種類や目方は一致している。「貝（香）」の表記は、管見に室町時代以降の類纂ないし書写と傳わる薫物諸書によく行われていることから、「先帝」ゆかりの⑦の方のほうが比較的古代のテキストを傳えていると言えそうである。その他の同類文の内、江戸時代前期の菊亭家における類纂と見られる薫物諸書に載録された⑨及び⑩には、これらの処方が合香家三条家にゆかりの品である由が、⑩及び⑪には、これらの処方が「勅筆巻物」こと天皇自筆の卷子本装訂による薫物書に載録された由が併記される。

7の「梅花」方63は6の処方の続文であり、「勸」家にゆかりとされる三点の処方の内の第二の品として記載される。記述の内容は東山御文庫所蔵の一本に同じである。同類文は三点確認できており、同類文①は6の方の同類文⑧の、同類文②は6の方の同類文⑥の、同類文③は6の方の同類文⑨の、それぞれ続文として各書に記載される。同類文③には冒頭に「半切／墨流表紙」と併記され、依拠資料が半紙本であり、表紙に墨流の料紙を使用したものであったことが記載される。

8の「梅花」方64は6、7に続く「勸」家ゆかりの第三の処方として載録される。同類文は管見に確認できておらず、今後の調査の中で探索及び有無の検証を試みたい考えである。

以上で述べてきたように、1と2の「荷葉」方二点、及び6と7の「梅花」方の同類文の内、『たきものゝほう』と『薫物秘蔵抄』の同類文は、本書の1と2、6と7の掲出順序と同様に前後する処方として載録されていた。このことから、良く似た薫物書に依拠する薫物書同士であった可能性が伺えるのであり、その詳細は本解説50頁「御室」の項においても述べた通りである。

また、3と5の処方はいずれも古い時代の合香家にさかのぼる歴史ある品と考えられた。3は平安時代中期の合香家大和常生又は「先帝」とされる前時代の天皇にゆかりの品である由が諸書に繼承されており、珍重すべき処方として來歴ともども大切に繼承されたことをうかがわせる。5は平安時代中期の合香家である仁明皇子本康親王、及びその叔父である嵯峨源氏にゆかりの品として傳來していた。『薫集類抄』等の比較的早い時代の類纂には載録されない処方であり、來

歴の内容については検証を要するが、古代の高貴な合香家にゆかりの品として、江戸時代前期の皇室において珍重されたと考えられる。

6の「梅花」方の来歴からは、平安時代後期の勅命による類纂に載録された有名な薫物方が、公家の合香家による蒐集活動を経て江戸時代前期の皇室に傳來していた可能性を伺うことができた。三条家は四条朝以来の歴代当主が薫物の故實を蒐集して習い傳え、天皇、上皇から將軍、守護に至るまで、その時々有力者らに合香方を傳授したとされる家柄である。室町時代後期の天皇、公卿らによる日記には、轉法輪三条實香（人名家名等解説及び索引64頁「實香公」とその子息公頼が禁裏に召し出され、後奈良天皇（人名家名等解説及び索引58頁「後奈良院」）への薫物方の傳授を拝命したことが記載される<sup>〔注10〕</sup>。室町時代以降の上層社会には、三条家の薫物の秘方や秘本とされる品々が広く傳播し、共有されていた可能性があり、そのことは、6の「梅花」方62の普及ぶりからも推察できるかと考える。

以上で確認してきた通り、「勸」の諸方の同類文として、平安時代の合香家にゆかりとされる古い時代の処方から、室町時代以降の皇族や合香家らにゆかりの処方までを確認することができた。前者は薫物諸書に限らず『源氏物語』古注釈書、有職故實書等にも載録されて幅広く普及しており、源泉を推定するのは困難と言えるが、後者の内、特に南北朝期以来の合香家として知られる三条家に関わる諸方については、「勸」が勸修寺家の略称であると仮定した場合、室町時代の三条家で類纂されたと傳わる『薫物故書』の載録方や、轉法輪三条家の処方と傳わる薫物方が勸修寺家にも傳來した可能性は、検討に値するかと考える。

勸修寺家と轉法輪三条家の同族である三条西家とは、室町時代中期に婚姻による縁戚関係にあった。当時の三条西家当主である實隆は、若狭守護栗屋元隆の助力により青荳座本所の経営安堵を果たしているが、この元隆もまた勸修寺家の縁戚である。元隆は勸修寺尚頭女を妾に迎えて女子に恵まれ、この女子を尚頭孫の晴右室として嫁がせていた。元隆女は晴右との間に勸修寺家嗣子晴豊と陽光院后新上東門院晴子とをもうけた人物である<sup>〔注11〕</sup>。『薫物調合秘方』には、新上東門院が皇子の後陽成天皇（人名家名等解説及び索引62頁）から相傳したと傳わる薫物方や、同じく皇子の智仁親王に傳えたとされる薫物方が複數載録されるなど、当時の皇族を代表する合香家の一人であった可能性がかわせる傳承が記載される（人名家名等解説及び索引69頁「新上東門院」）。室町時代の勸修寺家が、若狭守護栗屋氏との縁戚関係を媒介として、合香家として著名な三条家、轉法輪三条家と薫物の秘方秘説を共有するに至った可能性については、今後の調査研究により検証、究明したい考えである。

方・説 荷葉方31（勸方 私同御室方）、同（荷葉）方32（同（勸方）、侍従方38（冬用之 當家如此 勸）、同（菊花）方41（伏方 寛文五々十八調合／麝二分 勸方同之 但麝一分ト云々）、新枕方45（勸内 轉法輪方也）、梅花方62・63・64（勸 三方 寛文六三廿四始調合）

#### 旧院

きゅういん

「黒方」方1の銘の下に記載された由緒の中に見える、本方の元の持ち主。記述は「此方旧院御口ツカラ御相傳也依之常二令調合秘方也」、此の方、旧院御口づから御相傳也。これによりて常に調合せしむる方也、と読める。管見に知り得た他書において、本方の同類文は確認できていない。

書中で最も新しい年号は、靈元朝の寛文六（一六六六）年である。本書の二本の写本について、東山御文庫所蔵の一本は後水尾天皇（人名家名等解説及び索引61頁「後水尾」）御撰として傳來した可能性があり、陽明文庫所蔵の一本は後水尾天皇震筆に連なる由が傳わる。以上のことから、本書の原本は靈元朝までに後水尾院により類纂ないし書写された可能性が考えられるのであり、後水尾院御撰との説に依拠する場合、「旧院」は後陽成天皇（人名家名等解説及び索引62頁）に比定する<sup>〔注12〕</sup>。ただし、本書の「仙人」方5及び「黒方」方12には、この天皇の諡号である「後陽成院」の呼称を明記して処方の由緒が記される。ここでの「旧院」については、同類文の探索により引き続き検討したい考えである。

方・説 黒方方1（旧院御口ツカラ御相傳也）

#### 九条家

くじょういへんくうけ

「ほし合様」こと新作薫物「ほし」の調合方19の銘の下に記載された、本方の元の所有者。五摂家の一つで藤原兼實を祖とする九条家を意味するのであろう。「ほし」は保志、干などと表記されるもので、沈や白檀などの香木を細かく刻み篩って和合する従来の薫物とは異なり、香木を小片に刻んだ状態で別の調合した香具入りの液に漬け込み、香具の芳香を香木片に染ませて完成品とする種類である。「ほし」方は室町時代以降の類纂ないし書写と傳わる薫物諸書に記載されることから、本方についても、室町時代以降の九条家において考案ないし所持された品であったと考えられる。

「ほし」方19の同類文は、管見に次の一点を確認している。

1 ほし合様方19…【同類文】①専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』千方76（醍醐）

処方の内容は、『万方』に記載されるその他の「干」方ともやや類型的であるが、完全に一

致するのは右の同類文のみである。調査の現状において、右の同類文に併記される「醍醐」の意味するところは不明である。

九条家ゆかりの品と傳わる薫物方は管見に乏しく、本方の他には、茶道上田宗箇流の拠点である上田流和風堂に収蔵される無銘の薫物書（無題・薫物書）02に、「九条殿傳」と併記される薫物「黒方」方29を確認するのみである。この方の同類文は他書に確認できておらず、『薫物調合秘方』の「ほし」方19ともども九条家との関わりの詳細は不明であり、今後の調査で明らかにしたいと考えている。

#### 方・説 ほし（保志）合様方19（九条家方）

**後柏原院** こかしはらん  
ゴカシワライン 「侍従」方3の銘の下に記載された、本方の依拠資料の書写者の呼称。

本文には「秘方巻物内也此巻物／後柏原院／震筆／焼失可／惜々々」とあり、依拠資料の装訂、筆者、後の来歴について詳しく記載される。それによれば、本方は「秘方巻物」、薫物の秘方を類纂した卷子本装訂の薫物書に載録され、同書は後柏原天皇の震筆であつたが、残念ながら焼失したと云う。焼失の時期や経緯については明記されないが、江戸時代前期までに数回生じた禁裏炎上に伴い焼失した、奥向きの御蔵書の一つであつた可能性を検討すべきかと考える。

「後柏原院」は第百四代後柏原天皇（寛正五（一四六四）—大永六（一五二六））。後土御門天皇第一皇子、母は贈内大臣庭田長賢女三品准三宮贈皇太后朝子。同母弟に第二皇子尊敦親王（青蓮院尊傳入道親王）がある。明応九（一五〇〇）年九月二十八日の父帝崩御により翌月十月二十五日に践祚。翌文亀元（一五〇一）年三月二十九日の朝議において即位の禮の開催を議し、その為の料を献上せよとの勅命が足利幕府に対して下された。幕府は諸国から料を徴収せんとした（注三）が長く履行されず、即位の禮は永正十八（一五二一）年三月二十二日まで延引されることとなる。天皇は大永六年四月七日に崩御、御年六十三。後柏原院と追号せられた。

度重なる政変と争乱、深刻化する困窮の中にあつて、天皇は仏事の開催や仏像、写経の奉納等による供養にいそむかたわら、『文選』や『論語』等の漢籍の学問から御製の和歌集の制作や和歌御会の開催、書画の宸書の制作に度々取り組むとともに、四辻季経より筆の秘曲傳授を、豊原統秋より笙の灌頂を受ける等、諸学諸藝に自ら精進してこれを奨励した（注四）。公卿らの中には、洛外の所領地に下向して朝廷に参候しない者も少なくなつたが、三条西實隆のように洛中に留まり天皇に近侍して政務と文化藝術活動を補佐し、位階の昇進から暮らしの料の下賜に至るまで、細やかな恩寵に与る公卿もあつた（注五）。これらの文化藝術活動の内、特

に和歌や連歌、書画の催しには、足利幕府の歴代將軍と大内氏や細川氏等の等の有力守護もしばしば参画していた（注六）。

後柏原天皇の香、薫物に関する動静については、当時の史實に三件ほど確認している。第一に、永正二（一五〇五）年三月二十六日に宮中で開催された香会、第二に、翌六年二月二十六日から十月十二日にかけて交わされた薫物と香具の贈答、第三に、香具から調査された医薬の下賜である。

第一の香会は、『實隆公記』には「十炷香」と、『二水記』には「御香」として記録されるもので、当日の晩に天皇と實隆、「左衛門督」こと前権中納言正二位冷泉為広らの公卿が参集して、宮中の「御三間」こと奥向きの部屋で開催されている。香会の後に一献あり、夜にかけ長く酒席が催されたとのことである（『實隆公記』永正二年三月二十六日条による）。

第二の薫物と香具の贈答は、『實隆公記』永正六年二月二十七日条、及び同年十月十二日条に記載される。それによれば、「自禁裏薫貝<sup>十</sup>、被裏薄様、被納手箱蓋入宮、内々可遣義興朝臣之勅定也」、禁裏より薫物十貝が、薄様の紙に包まれ、手箱の蓋に納めて宮に入れられて用意され、内々に義興朝臣こと大内義興に遣わされるべしとの勅定が、同年二月二十六日に下されていた。義興は二十七日に外出の予定であつた為、薫物は翌二十八日の早朝に遣わされた。十月十二日に至り、義興は過日の薫物拝領の御礼として「沈ノカフ」を禁裏に進上し、禁裏より義興に女房奉書が遣わされている。

第三の動静は香具を原料とした医薬の下賜である。『實隆公記』永正六年六月二十六日条によると、禁裏より實隆に「蘇合香圓一貝」が下されている。蘇合香圓は心痛や霍乱に効果のある良薬であり、安息香や薫陸、龍腦、沈香、麝香等の貴重な香薬の数々を和合して丸薬状に仕上げ、服用されたと云う（宋・陳師文等撰『太平惠民和剂局方』等による）。

以上の動静の内、第二、第三の薫物、医薬の下賜について、史實には御製の品である旨が併記されない。後柏原天皇が御手づから調合なさつた品とは考え難いが、前者については包装・収納が丁寧に施されて贈答されており、後者については良薬として重宝されたことから、禁裏において蒐集され、珍重された品々であつたことは間違い無さろう。

管見に、「侍従」方3については次の五点の同類文を確認している。

- 1 侍従方3…【同類文】①『薫集類抄』侍従方40（八条宮、不傳男子、承和仰事、滋野直子、云々）、②『薫集類抄』侍従方56（堀川右大臣）、③「焼物調合法」侍従方10（堀河右大臣）、④『薫物故事』侍従方46（処方の由緒ナシ）、⑤京都大学附属図書館菊亭文庫

所蔵『薫物秘藏抄』侍従方53（勅筆巻物／右一方堀川右大臣 二条関白治暦四年四月六日）

薫物諸書の内、合香家三条家で類纂されたと傳わる秘傳書等に記載された傳承によれば、後柏原天皇の父帝後土御門天皇は、当時の轉法輪三条家（人名家名等解説及び索引75頁）当主龍翔院公教を師範として合香方を相傳したとされる（註二七）。傳承の内容が確かであれば、父帝から後柏原天皇に対して薫物の相傳が行われても不思議は無い。「後柏原院震筆」の巻物に載録されたと云う「侍従」方3の同類文は、平安時代に考案されたと傳わる著名な処方であるが、室町時代の三条家における類纂と傳わる『薫物故書』にも載録される他、江戸時代前期の類纂と傳わる『薫物秘藏抄』には依拠資料「勅筆巻物」とも併記され、皇室傳來の秘方として傳來していた。父帝の代までに皇室に傳來した薫物の秘方秘説が、「後柏原院震筆」の巻物に類纂されて江戸時代前期の皇室や公家に写し傳えられた可能性は、検討に値するかと考える。

情勢の不安定な後柏原朝の上層社会にあつて、文化藝術活動を契機としての公武間の協働や贈答が、朝廷の威信の保持や公武の協調関係の構築といった課題の解決に少なからぬ効果を發揮したであろうことは、従来の研究により明らかにされてきた通りである。小御所における香会の開催や足利幕府の有力守護に対する薫物の贈答といった香文化活動もまた、後柏原朝の洛中に束の間の平穩をもたらす一助となったと考えられよう。

方・説 侍従方3（後柏原院震筆）

**後奈良院** こうならん  
ゴライン 新作薫物方「遅桜」方49及び「仙人」方50の続文に記載された「震筆」の薫物書の書写。第百五代後奈良天皇（明応五（一四九六）—弘治三（一五五七））。本文には「後奈良院以震筆令書寫者也（改行）慶長十五年十月廿七日 智仁」とあり、末尾の「智仁」の右側行間には傍書として「御自筆」とも併記される。内容から、直前の二点の処方は、「後奈良院」こと後奈良天皇がさる「震筆」から書き写した薫物方であり、「智仁」はこれを慶長十五（一六一〇）年十月二十七日に書写した、と解釈できる。期日から、「智仁」は八条宮智仁親王（人名家名等解説及び索引76頁）に比定する。右傍書に「御自筆」とあることから、『薫物調合秘方』の依拠資料又はそれ以前の源泉資料は、本書の類纂又は書写の行われたとされる江戸時代前期の皇室及び縁類の公家において、智仁親王御自筆の書として傳來していた可能性が伺える。

後奈良天皇は第百四代後柏原天皇（人名家名等解説及び索引57頁）第一皇子。母は贈左大

臣勸修寺教秀女准三后藤子。諱和仁。明応五年十二月二十三日降誕。永正九（一五二二）年四月八日親王となり、同年四月二十六日に私邸の小御所において元服。同十八（一五二一）年八月二十三日に大永と改元。年四月二十七日二品に叙される。大永六（一五二六）年四月七日の父帝崩御により同月二十九日に踐祚、同夜に禁裏本殿へ移る。弘治三年九月五日崩御、御年六十二。諡号「後奈良院」は平城天皇の号「奈良帝」に由来する。

後奈良朝の禁裏と公家は、先帝の御代に引き続き、將軍職をめぐる内乱の激化に由来した困窮に瀕していた。即位の年から高僧を召しての御受戒や御生母、廷臣、宮女らによる寺社仏閣への代参が頻繁に行われており、護国を願う御心の程を伺わせる。先帝に同じく、後奈良天皇も、皇族や公卿、武家の有力者らへの和歌の贈答、御製の下賜等を頻繁に行っている他、古今傳授や歌集、漢書、仏典等の進講を寵臣らに命じる等、幕府との友好かつ互恵的な関係の維持に努めるとともに、学問文化の振興を牽引した（註二八）。こうした後奈良院の人物について、後世の史傳には、和歌を好み、翰木を嗜み、かつ詩を賦したと評される『続本朝通鑑』。一方で、後世に後奈良院宸筆と傳わる品の多く傳來することについて、天皇に茶を奉る際に、銀などの金品に「百人一首」や「伊勢物語」などと書いた札を付けておくと、後日参内した折にはそれらの宸筆に写本を下賜されたとの風説も傳わる『遺老物語』。風説の内容が事實であれば、天皇は禁裏の現状に対しての客觀的認識と、処世術としての經營の才とを備えていた可能性が伺える。

後奈良朝の奥向きにおける名香の贈答や薫物の調合、贈答といった活動については、『御湯殿上日記』及び『實隆公記』の記述に基づく詳細な報告と考察がなされている（註二九）。以下の本稿では、それらの内の主要な事跡と薫物諸書に傳わる当時の傳承について紹介しながら、後奈良朝の香文化活動の特徴について確認してみたい。

『御湯殿上日記』享祿元（一五二八）年間九月二十一日条、天文四（一五三五）年七月二十九日条、及び翌五年六月二十日条によれば、右の期間において、後奈良朝の禁庫より名香「らんしや（蘭奢）待」の下賜が二度行われ、禁裏に対して御礼金が献上されている。前者の下賜は「のと」の「しゅこ」に、後者の下賜は「濃州守護惠胤出家名也」に対するものとして記載され、いずれの人物も能登守護畠山義総に比定する。

複数の香具を粗く刻んで和合、収納し、重陽の節句に飾った「薬玉」の贈答も頻繁であったらしい。天文元（一五三二）年五月五日には皇子方仁（後の正親町天皇）へ「御薬玉」を授けた他、前述の通り、將軍足利義晴、義藤（義輝）父子に対しても長年に渡り下賜している。

前掲の先行研究では、蘭奢待は寛正六（一四六五）年以後の六十三年間、或いは延徳二（一四九〇）年以後の三十八年間に渡り禁庫において収蔵されたこと、その贈答は当時の皇室にとり貴重な収入源となったことが報告された。薬玉については、後奈良天皇による勅製の品であるかは明記されないが、禁庫に収蔵された香具を材料として制作されたと考えてしかるべきであろう。足利將軍への薬玉の贈答による経済的効果の有無については定かではないが、天皇が將軍の長寿を願う思いを御手づから形にして届けたとすれば、幕府との協調、互恵の関係の維持と強化に少なからず貢献したことは間違いない。

後奈良天皇は薬玉のように複数の香具を調査して制作する薬物の贈答にもしばしば取り組んでおり、皇室の親族や公家の寵臣、武家の有力者らを中心に行われた。例えば『御湯殿上日記』大永七（一五二七）年三月十日条には、「御手合わせ」こと天皇が手づから調査した薬物「黒方」及び「侍従」が、天皇の同母弟である青蓮院宮尊鎮法親王に対して贈られた由が記される。天文元（一五三二）年十月二十五日条によれば、阿波に下向する暇乞いに参上した「左衛門すけ」こと廷臣の五辻諸仲宛に「御てうかうの御たき物十かい」、天皇が手づから調査した薬物を、貝十口に入れ納めて下賜している。

右の事跡により、遅くとも大永七年三月までに、後奈良天皇が合香に要する知識と技能を備えていたであろうことが伺える。ただし、天皇が合香をより専門的に習得なさるのは、天文二年以降のことであった可能性がある。『後奈良院宸記』等の天文二年十月十九日条によれば、天皇は轉法輪三条實香（人名家名等解説及び索引 64 頁）・公頼父子を御所へお召しになり、御前で薬物を調査させるとともに、合香の秘方秘説を傳授させている。薬物書の傳承によれば、轉法輪三条家（人名家名等解説及び索引 75 頁）は白川右府以来朝廷に薬物の師範として奉仕した家柄であり、皇族から武家までの有力者に対して合香の秘方秘説を授けたり、家傳の合香方を類纂、書写したりといった活動に従事したと傳わる。公頼は父の後継として合香方の傳授に務めたと考えられるが、後奈良天皇への傳授の後年、地方に下向して争乱に巻き込まれ、不慮の死を遂げている。

室町時代後期から江戸時代前期までの史實と薬物諸書の傳承によれば、實香ゆかりの秘方秘説を始めとする轉法輪三条家の合香方と薬物の宗匠としての社会的役割は、直系の嗣子の逝去によりいったん繼承が断絶するも、後に三条西家等の同族から迎えた養子とその後裔により、江戸時代前期までに再興、繼承された可能性がある。一方で、轉法輪三条家から合香方を相傳していた皇族や公家の合香家らが、上層社会の薬物の宗匠の役を果たしていた可能性も伺うこ

とができた。例えば皇室においては、實香が逝去した永祿元（一五五八）年から二年後の同三年と五年、八年に、後奈良天皇は御製の薬物を皇子の方仁親王（後の正親町天皇）に下賜している（『後奈良院宸記』等）。後柏原天皇猶子で後奈良天皇と親交のあった伏見宮貞敦親王は、實香女香子を室として迎えており、生前の公頼から「手合薬物一具」を贈られた他、後奈良天皇に対して香具「甲香」を献上したこともあった。また、薬物書の傳承には、正親町天皇が「御室御所」から薬物「黒方」方を傳授なさったと傳わる。「御室御所」は前述の貞敦親王御子で後奈良天皇猶子の御室仁和寺宮門跡任助入道親王に比定する（註二〇）。

さて、管見に、『薬物調査秘方』において後奈良天皇震翰を臨写した智仁親王御自筆の薬物書に載録されたと傳わる薬物方二種類二点については、次の同類文を確認している。

1 遅桜方 49（一両合／本云 後奈良院以震筆令書写者也（改行）慶長十五年十月廿七日 智仁（御自筆）／右朱點之分ハ八条殿方也）…【同類文】①本書・をそさくら（遅桜）方 20（伏方／寛文五十五日作テ調査）

2 仙人方 50（一両合／合したひ候歟／本云 後奈良院以震筆令書写者也／慶長十五年十月廿七日 智仁（御自筆）／右朱點之分ハ八条殿方也）…【同類文】①徳川林政史研究所所蔵『薬物之方』仙人方 125（処方の由緒ナシ）、②本書・仙人方 43（伏方）、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薬物秘蔵抄』仙人方 86（大本／右妙莊嚴院御方）、④専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』仙人方 41（三条流）

1と2の処方はいずれも室町時代以降に考案されたと見られる新作薬物のそれであり、共に「一両合」こと沈一両を基準とした比率の目方で調査された処方と明記される。一組の処方、ないし三点以上の処方群の一部として傳來した可能性があることから、2の「仙人」方 50の末尾に記載された識語「本云 後奈良院以震筆令書写者也／慶長十五年十月廿七日 智仁（御自筆）」は、直前の「遅桜」方 49の来歴としても記載されたものと解釈しておきたい。

1の新作薬物「遅桜」は、薬物書の傳承に、著名な合香家である轉法輪三条家で調査された新作ではなく、駿河三条家の新作として傳わる薬物である（註二一）。本解説の冒頭において述べた通り、処方 49の由来については、本書の依拠資料と見られる「本」の中に、八条宮智仁親王が後奈良院の震筆を拝見しながら自筆で書写したものであり、書写は慶長十五（一六一〇）年十月二十七日であったと記載されたと云う。同類文たる同一の又は近似した処方としては、本書の「をそさくら（遅桜）」方 20のみを確認している。方 20は冒頭に「伏方」と併記され、「伏」の一字に略される合香家の考案ないし所持した品として傳來したことが分かる。また、「寛文

五十五日作テ調合」との識語から、寛文五（一六六五）年五月十日に本書の書写者ないし依拠資料の筆者により調合された由が伺える。

「伏」と略称される合香家の特定は困難であるが、いわゆるツレの処方と見られる2の「仙人」方50の同類文にも本書において「伏方」として載録された処方がある他、他書の同類文の内、菊亭家で類纂されたと見られる『薫物秘蔵抄』載録の「仙人」方86が、「妙莊嚴院」こと伏見宮貞敦親王の考案ないし所持した品として傳來することに鑑みて、伏見宮の略称であり、歴代当主で寛文五年以前に宮家を継承した人物の呼称と推定している（人名家名等解説及び索引82頁「伏」）。「伏方」を考案ないし所持した人物については、貞敦親王を意味する可能性も含めて、今後の調査研究において引き続き慎重に検討したい考えである。

2の新作薫物「仙人」の種類としての発祥と来歴については薫物諸書に言説が傳わっており、例えば、専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』載録の「仙人」方21には「三条流」及び「三光院説云是毛花花三三」ヨリ出タル也、云々」と併記され、本方が三条家に代々傳わる処方であることとともに、三光院こと三条西實枝（實世、實澄とも）の言説として、「仙人」が平安時代以来の薫物「菊花」から案出された種類である由を傳えている。高松宮本「薫物（ノコト）」載録の「仙人」方8には「四辻傳」、四辻家に傳來する品であると併記されるとともに、銘については「富士と号スル也」とあり、「仙人」を基にして新作「富士」が考案された由が知られる。

「仙人」方50の同類文たる同一の又は近似した処方としては、管見に上記の四点を確認している。同類文①は尾張徳川家蓬左文庫に傳來した『薫物之方』に載録される「仙人」方125で、処方固有の来歴は併記されない。同類文②は本方と同じ『薫物調合秘方』に載録される「仙人」方43で、1の方の同類文に同じく「伏」方と併記される。同類文③は、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』載録の「仙人」方86で、処方には依拠資料の装訂を示唆する「大本」の記述とともに、前述の通り、処方の由来として「右妙莊嚴院御方」と併記される。同類文④は同じ菊亭家旧蔵の専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』載録の「仙人」方41であり、前述のように処方の由緒について「三条流」と併記される。

「仙人」方50については、後奈良朝には後奈良天皇に蒐集されて震筆の薫物書に類纂された他、同時代の皇族で天皇と親交のあった妙莊嚴院こと伏見宮貞敦親王にも所持された由が傳わっていた。江戸時代の皇室には、前者の処方とともに、伏見宮家の処方と称する同類文も傳來していたことから、後奈良朝から江戸時代前期の後水尾院政期（人名家名等解説及び索引61

頁「後水尾」に至るまで、禁裏と伏見宮家においてそれぞれに継承されていた可能性がある。また、同類文には三条流の品と傳わる品も含まれていた。前述の通り、後奈良天皇は轉法輪三条實香と公頼の父子から薫物相傳を受け、貞敦親王は實香女香子を室とし、公頼から薫物を贈られていたことから、当時の禁裏と伏見宮家に共有された「仙人」方が轉法輪三条家に由来するものであった可能性は、検討に値する。

以上で述べたように、轉法輪三条家が専門的に蒐集、習得していた薫物の秘方秘説は、同家の直系が断絶した期間の皇室においては、實香から直々に薫物相傳を受けた後奈良天皇や、實香を外戚とした伏見宮貞敦親王・御室仁和寺任助入道親王父子らを中心的存在として蒐集、習得され、正親町朝への継承が果たされた可能性がある。両者の所持した新作薫物「仙人」方の源泉が、当時を代表する合香家轉法輪三条家に該当する可能性も含めて、後奈良朝とその前後の薫物文化とその系譜については、今後の調査研究により具体的に解明したい考えである。

方・説 遅桜方49・仙人方50（後奈良院以震筆令書寫者也（改行）慶長十五年十月廿七日 智仁（傍書「御自筆」）

**近衛殿** このまどの ラネンド 新作薫物「若草」方22に併記された「近衛殿御方 東方之内」との記述に見える家名又は人名。それによれば、本方は「近衛殿」ゆかりの薫物方として傳來した品であり、「東」（人名家名等解説及び索引80頁）の処方に含まれたと云う。

「近衛殿」は公家の近衛家又は同家の当主の呼称である。近衛家には室町時代から江戸時代にかけての歴代当主の自筆によるとされる香関係資料の蒐集、書写及び類纂が盛んに行われ、陽明文庫に収蔵されて今日に傳わる。その概要は同文庫制作の目録や近年の調査により報告されてきたが、各資料の書誌と内容については詳しく研究されて来なかった。稿者は近衛家の薫物について断片的に報告したことがあり（註三）、それによれば、室町時代の当主尚通が足利義輝から薫物を贈られたのを始めとして、近衛家については、公武の有力者との間で薫物を贈答したり、薫物方の調査や傳授を行ったといった活動の實施が確認される。江戸時代前期の当主である基熙（人名家名等解説及び索引84頁）とその室で後水尾天皇（人名家名等解説及び索引61頁）皇女の常子内親王（人名家名等解説及び索引65頁「品」）の代になると、当時の天皇、上皇、法皇らの御前に参上して薫物調合を手傳ったり、完成した御製の薫物を下賜されたり、ご所蔵の薫物方を唯授一人として下賜されたり、先帝からお傳えした薫物方とその口傳を当代の帝の御前で調合して秘方秘説を申し入れたりといった活動を、頻繁に行っている。関東



に下向する京都所司代への餞別の品として、茶道具一箱の他に、基熙祖父の應山信尋と基熙父の長山尚嗣等が調合したとされる薫物が、基熙から遣わされることもあった。基熙と常子内親王は、勅方の継承者として禁裏における合香活動と薫物文化の継承を支えするとともに、公武の上層社会における薫物文化の振興を牽引した可能性が伺える。

稿者は、平成三十年度から陽明文庫の薫物関係資料群を主な対象とした調査活動に着手している(註四)、近衛家における薫物の實相と歴史については、稿を改めて詳しく報告したい考えである。

新作薫物「若草」は室町時代中期に合香家三条家において新たに考案されたと傳わる種類である(註五)。三条家ゆかりの品とされる「若草」方とその同類文は複数の薫物書に載録されて傳わるが、『薫物調合秘方』に載録される「若草」方22の同類文は、他書に確認できていない。

本方は「若草」方23の脚部余白に記載される。東山御文庫所蔵の一本において、補筆の筆跡は本文のそれに近似した印象を与える。東山御文庫所蔵の一本は、陽明文庫所蔵の一本の跋文に云う同本の祖本「後水尾震筆」、又は「新院」所蔵の「御秘本」に該当する可能性がある(本稿解題)。以上の特徴と可能性から、本方は本書の類纂が一旦完了した後に補筆されたのであり、蒐集時期も當時を下限とする可能性を検討する必要がある。「東方之内」とされる来歴に関しては、既出の拙稿(註六)で「新上東門院」(人名家名等解説及び索引69頁)旧蔵の品を意味する語句と推定したことがあったが、本方の同類文が確認できないこと等から、検証には至っていない。今後の調査研究では、他書に同類文を探索して本方とそれらの来歴と比較検討することにより、「近衛殿」と「東」の時代と人物の特定を進めたい考えである。

方・説 若草方22(近衛殿御方 東方之内)

**後水尾** こみづのお／おみのお 陽明文庫所蔵「焼物之方」一冊(整理番号九四九五三)の祖本の傳承筆者。「後水尾」は第八代後水尾天皇(慶長元(一五九六)年—延宝八(一六八〇)年)の諡号である。跋文に「後水尾」として「院」の尊称を加えずに記されているのは、轉写の際の不慮の脱落によるかと考える。

後水尾天皇は第七代後陽成天皇(人名家名等解説及び索引62頁)第三皇子。母は関白太政大臣従一位准三宮近衛前久女中和門院近衛前子。幼名三宮。諱政仁。慶長元(一五九六)年六月四日降誕。同五(一六〇〇)年十二月二十一日に親王となり二品に叙され、同十五(一六一〇)年十二月二十三日元服。翌十六(一六一一)年四月十二日紫宸殿にて即位。徳川家康が参

内して花頭より即位の式を見物した。即位後の慶長十七(一六一二)年以前から元和三(一六一七)年八月頃にかけて、父帝との間にしばしば不和が生じており、幕府が調停に乗り出している。同年六月十八日、徳川秀忠女従三位和子(のちの東福門院)が入内。寛永四年頃から和子との間にもうけた女一宮興子内親王に讓位する意向を幕府に示すが容れられず、寛永六(一六二九)年十一月八日、俄かに讓位、出家して太政天皇となり、以後は上皇、法皇と称せられた。延宝八(一六八〇)年八月十九日に八十五歳で崩御。諡号「後水尾院」は清和天皇の別称「水尾院」に由来する。

幕府による禁裏と公家衆に対する統制と支配の強化された時代にあつて、上皇、法皇として長く院政を敷き、皇室の威信とそれを頂点とする社会的秩序の維持に功績を残した。後水尾朝の幕府の統制は学問藝道にも及んでおり、慶長二十(一六一五)年七月には「禁中并公家中諸法度」が歴代將軍と二条昭實の連名により制定され、「天子諸藝能之事、第一御学問也」等として、漢学と和歌を始めとする『禁秘抄』記載の諸学の修練が天皇に対して推奨された。五年後の元和元(一六二〇)年二月、天皇は公家衆十二、三人に対して諸藝御稽古の相手を命ぜられ、同月三日より御手習、御歌、御楽に漢籍、物語等の御読書、御連歌、そしてまた御手習という順に月次で稽古することを内々に定めている。諸藝の稽古はあらかじめ日付を定めた月次の催しとして企画され、同年二月から十月ごろまでは定期的な、翌年以降は断続的に、禁中の御学問所を会場として行われた(註七)。同五年正月には幕府が諸藝目録を定めて禁裏へ遣わし、近衛信尋(人名家名等解説及び索引60頁「近衛殿」)を筆頭とする公家衆に対して、月次で有職、和歌、儒学、楽・郢曲、連歌、詩文学、歌学、聯句、詩の順に稽古に励むよう命じた。以後は禁中や院御所等において右記を中心とする学問藝道が盛んに行われ、年中行事の開催に併せた能楽、猿楽、舞踊を主体とする宴席、禁裏内外での蹴鞠や競馬を主催している他、立花や茶の湯、香といった藝道も幅広く嗜んでいる。中でも立花の腕前は格別であつたらしく、江戸時代前期の傳承によると、諸学諸藝に通じる者でも立花は不得手という場合が一般的であるのに対して、後水尾院は立花においても上達なさつたと云う(註八)。御在位中の寛永元(一六二四)年七月七日には七夕和歌御会に併せて立花が催された他、五年後の寛永六(一六二九)年三月十五日には池坊某を召して立花御会を開催しており、御生母中和門院近衛前子もこれを鑑賞している。中和門院は元和七(一六二二)年二月二十八日に観花の御宴を献じた他、翌八年には天皇とともに禁裏の花を賞美している。後水尾天皇が中和門院との共通の趣味として花を愛好し、やがて立花を嗜むようになった可能性は、検討に値するかと考える。



後水尾天皇の香に関する動静としては、名香の贈答や御香会の開催、薫物の調合と贈答といった活動が、『御湯殿上日記』や公家衆の日記、幕府の官記等に記録されている。薫物に係る事項について、先行研究は、後水尾天皇宸翰と傳わる薫物書が、昭和初期の皇室に傳來していたこと、及びその概要について報告していた<sup>(註五)</sup>。近年の研究では、後水尾天皇在世期間中の禁裏や御所において名香や香具、薫物が盛んに調合、授受されたことが報告されるとともに、その政治的、社会的意義についても考察されている<sup>(註三〇)</sup>。また、近年発行された古典籍調査目録において、近衛家傳來の古文書古典籍を収蔵する陽明文庫に、後水尾天皇ゆかりの品と傳わる薫物方を記載した資料の多く収蔵されることも報告されていた<sup>(註三二)</sup>。

既出の拙稿<sup>(註三三)</sup>では、東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』に、近世から近代にかけての皇室において後水尾天皇宸翰ないし宸翰として傳來した諸本の存在することや、尾張徳川家に傳來した徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」の書誌を検討する中で、同書に筆頭の勅作として載録された薫物方が、後水尾天皇ゆかりの品と考えられることについて考察したことがあった。江戸時代前期の公家の菊亭（今出川）家に傳來した薫物書を対象とする調査では、当時の当主である菊亭公規の日記『公規卿記』等の記述をもとに、公規が、寛文五（一六六五）年に生家である徳大寺に傳來した薫物の貴重書一卷及び一冊を禁裏に献上しており、その返礼として、後水尾法皇及び後西院（人名家名等解説及び索引 66 頁「新院」）がそれぞれに宸筆を染めた両書の写本を下賜されたことを報告するとともに、こうして蒐集した諸書を源泉として、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘傳抄』等の薫物諸書を類纂した可能性のあることを報告した<sup>(註三三)</sup>。また、東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』等との比較により、菊亭家で江戸時代前期の当主により類纂されたと見られる専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』等に載録された六種類の匂袋方を考案ないし所持したと傳わる「法皇」が、後水尾法皇の可能性の高いことを指摘していた<sup>(註三四)</sup>。近年の研究では、後水尾天皇の父帝後陽成天皇以前の歴代天皇もまた合香活動と薫物贈答を頻繁に実施していることが報告されている。東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」には、皇族については後柏原天皇（人名家名等解説及び索引 57 頁）を筆頭とする歴代天皇や皇太后、親王らに、臣下については後奈良朝に天皇の薫物の師範を務めた轉法輪三条實香（人名家名等解説及び索引 64 頁）らの公卿にゆかりの品と傳わる薫物方が載録される。以上の状況から、前述の既出の拙稿においては、後水尾天皇の合香の知識と技能が、特に後柏原朝以降の皇室に傳來した薫物の秘方秘説を源泉としながら蓄積されるとともに、父帝と祖母の新上東門院（人名家名等解説及び索引 69 頁）、及び八条宮智仁親王（人名家名等解説及び索引 76 頁）ら皇

族の近親者から傳えた秘方秘説の写しや手ほどきにより養成され、皇子の後西院を経て近衛基熙（人名家名等解説及び索引 84 頁）や基熙に降嫁した皇女常子内親王（人名家名等解説及び索引 65 頁「品」）らに継承された可能性も指摘してきた。

ただし、天皇の薫物の合香活動の規模や詳細、来歴については、当時實施していた調査研究においてほとんど明らかにできていなかった他、父帝と後水尾天皇との確執が合香活動の協働や秘方秘説の相傳に影響したか否かについても不明である等、多くの課題を残していた。

陽明文庫に「焼物之方」の書名を付されて傳來する『薫物調合秘方』写本の跋文には、貞享元（一六八四）年、「左僕射基熙」こと近衛基熙が、「新院」（人名家名等解説及び索引 66 頁）から「後水尾院震筆」を拝借して筆写したとある。「後水尾」は後水尾天皇の諡号であり、貞享元年当時の「新院」は後西院に比定する。前述の先行研究に後水尾天皇御書の一つとして報告のあった薫物書「薫物方」は、内容に関する情報に『薫物調合秘方』諸本の現状に一致すること、後水尾天皇が傳承筆者であること、及び禁裏官庫に傳來したという来歴から、右の跋文に云う「後水尾震筆」、及び東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」に該当する可能性が考えられる（本稿解題）。

稿者が現在實施中の調査により、後水尾天皇の合香の實相をうかがわせる傳承の存在も明らかになりつつある。陽明文庫所蔵資料を対象とした調査では、前述の『万方』に載録された「法皇」ゆかりの匂袋方の大部分が、「後水尾院匂袋」の処方と明記されて傳來することを確認している他、江戸時代前期の書写と傳わる随想には、後水尾天皇が後陽成天皇の合香の秘方秘説を繼承し、皇子の後西院へと受け継がれていたとする逸話も記載される<sup>(註三五)</sup>。

幕府が禁裏と公家衆による諸学諸藝を力によつて促進した時代にあつて、薫物が諸藝として明確に位置付けられることはなかった。一方で、後水尾天皇は鎌倉時代以来の歴代天皇の中で、最も熱心かつ専門的に薫物方の蒐集と類纂、合香活動に取り組んだ天皇としての足跡を残した可能性がある。今後の調査研究では、引き続き陽明文庫に傳來する薫物諸書の整理と分析を實施して、後水尾天皇の合香家としての閱歴や、考案ないし所持したとされる合香方の全容及び来歴等について考察しながら、後水尾天皇の文化人としての薫物に対する意識や合香家としての評価について明らかにすることにより、この天皇の人物と時代について、薫物という側面から再考したい考えである。

方・説 跋文（右一本以 後水尾震筆（改行）新院自令寫御秘本也）

後陽成院 こうやうせいゐん 第百七代後陽成天皇（元龜二（一五七二）—元和三（一六一七）。『薫物調合秘方』には「後陽成院」から「新上東門院」（人名家名等解説及び索引69頁）が相傳したとされる新作薫物「仙人」方一点、「後陽成院」から処方の筆者または「准后」（人名家名等解説及び索引66頁）が相傳したと云う薫物「黒方」方一点が記載される他、同じ天皇の可能性のある「旧院」（人名家名等解説及び索引56頁）が「御口ツカラ御相傳」したと云う薫物「黒方」方一点も載録される。

後陽成天皇は正親町天皇第一皇子陽光院誠仁親王の第一王子として誕生。母は正二位贈左大臣勸修寺晴右女准三宮新上東門院晴子（人名家名等解説及び索引69頁）。元龜二年十二月十五日降誕、幼名茶地丸。諱は初め和仁と云い、即位後の慶長三（一五九八）年十二月二十三日に周仁と改めている。天正十二（一五八四）年正月十五日、祖父正親町天皇（人名家名等解説及び索引49頁）の養子となる。同十四（一五八六）年七月二十四日、父親王が急逝。同年九月十七日に親王宣下を受けて二品親王に叙された後、同月二十日に元服。同年十一月七日に正親町天皇に皇位を譲られて即位した。同年十二月十六日、近衛前久三女で豊臣秀吉養女とされた前子（のちの中和門院）が後宮に入内して女御となる。慶長十六（一五八八）年三月二十七日、皇儲政仁親王（のちの後水尾天皇、人名家名等解説及び索引61頁）に譲位して太上天皇となる。元和三年八月二十六日、四十七歳で崩御。後陽成院と追号された。

後陽成院朝には正親町朝に引き続き有力大名による武力紛争が絶えず、文禄、慶長の役と呼ばれる二度にわたる朝鮮出兵、関ヶ原の合戦や大阪夏の陣、冬の陣が立て続けに勃発する等、極めて不穏な時代であった。前子所生の政仁親王の元服や親王への譲位、いわゆる猪熊事件で断罪された宮女への処遇をめぐり、天皇は徳川家康の支持を得られず、親王との間に不和も生じたとされる。天皇は、禁裏と公家衆の困窮や豊臣家や徳川幕府による朝議への介入等に悩みながら、時々の武家の為政者との協調関係を強化して治安と経営の安定をはかるとともに、禁裏と公家衆の風紀の統制にも尽力した。

天皇は在位中から和歌や連歌、能楽、猿楽、囲碁などの御遊をはじめとした催しを盛んにし、慶長勅版本の製作と刊行を命じて学問藝道を振興した。公家衆による伊勢物語、源氏物語の進講を受ける一方で、詠歌大概や未来記、雨中吟御抄を講じたり、雅楽「蘇合香」の御許状を桜田秀正なる人物に授けたりなど、自らその継承、普及に取り組んだことでも知られる。

香については、『御湯殿上日記』等の記録によると、後陽成天皇は在位中に薫物、匂袋、懸袋等の贈答を頻繁に行っており、贈答の対象には豊臣秀吉や徳川家康を始めとする武家の有力

者が多数含まれる。これについて報告、考察した先行研究には、祖父で養父の正親町天皇や皇子の後水尾天皇らによる香、薫物の贈答の場合に同じく、禁裏の安泰を期する目的からの贈答であった可能性が指摘される（三三〇）。

既出の拙稿では、東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」に記載された傳承について考察し、後陽成天皇ゆかりの品と見られる薫物方三点の内、一点は天皇が後水尾天皇に口説により伝え、一点は母后新上東門院が天皇から相傳し、残る一点は「准后」なる高位の人物が天皇から相傳したと傳わることを報告した他、天皇の薫物が、祖父で養父の正親町天皇から傳わったものであり、前述の母后の他に、弟皇子の八条宮智仁親王（人名家名等解説及び索引76頁）、及び皇子の後水尾天皇に継承された可能性について検討したことがあった（三三七）。ただし、これら三点の処方の他書における載録状況から見た来歴の検証は、以降の調査の課題としていた。

管見に、『薫物調合秘方』において後陽成天皇の諡号が明記される薫物方二種類二点について、他書の載録方との比較により実施した同類文探索結果は次の通りである。

1 仙人方5（自後陽成院新上東門院御相傳方也）…【同類文】（なし）

2 同（黒方）方12（右准后御方從 後陽成院御相傳之方云々）…【同類文】（なし）

また、『薫物調合秘方』に後陽成天皇を意味して記載された可能性のある「旧院」ゆかりの処方については、次のような探索結果が得られた。

3 黒方方1（此方旧院御口ツカラ御相傳也依之常二令調合秘方也）…【同類文】（なし）

右に示した通り、皇室及び皇族の類縁に当たる公家に傳來した薫物書において後陽成天皇の所持した可能性がある薫物方については、調査の現状において、他家及び他書への傳來を確認することができなかった。このことは、これら三点の処方が秘方として極めて厳重に守秘された可能性を伺わせるが、その正否や来歴については、今後の調査において引き続き慎重に検討したい考えである。

以上で紹介した三点の処方とその来歴として併記された記述によれば、後陽成天皇は新作薫物「仙人」方と傳統的な薫物「黒方」方とを考案ないし所持した可能性がある。それぞれの来歴にまつわる記述の内容は、「仙人」方一点は公家出身の母后新上東門院に、「黒方」方二点は「准后」なる高位の皇族ないし公家と、「御口ツカラ」処方を習い傳えることを許された処方の書写者などにそれぞれ傳來したと解釈できる。本書が確かに後水尾天皇震筆であるとすれば、右の後陽成天皇ゆかりと傳わる右の三種類三点の薫物方を含む本書の秘方秘説が後水尾天皇により蒐集、類纂された可能性もまた、検討を要するかと考える。

稿者が現在実施している薫物関係資料の調査では、右の三種類三点の処方の他にも、後陽成天皇が考案ないし所持したと傳わる薫物方や、この天皇の合香家としての評価に係る傳承を確認している。例えば、江戸時代前期の公卿近衛基熙（人名家名等解説及び索引 84 頁）の自筆と傳わる文書には、安土桃山期から近世前期の歴代天皇及び関白太政大臣について、次のように記述される。

（前略）人のもてあそひのおほき中にたきものといふものこそむかしより傳はりてふかき教へも委しく残りけるちかき世には後陽○（右傍書「成」）院此道の上手におはしましたその御つたへ後水尾院後西院いまほりかはにまします太閤御口傳などにてくはしくつたへましますとか（下略）

（世の人が風流事としてたしなむことの多くある中で、薫物というものは、昔から傳來しており深い教へも詳しく残っている。近頃の世の中では、後陽成院が此の道の上手でいらして、その御傳へは後水尾院、後西院、また今の世には堀河にお住いの太閤が、口傳などにより詳しくお傳へになっていらつしやるなどと聞き及ぶ。）

（注三五所掲。陽明文庫所蔵「基熙公台翰」、香之事、一卷、整理番号・九四九五六。丸括弧内の口語訳は稿者による。）

跋文によれば、右の記述は「寶永六年のはる」、宝永六（一七〇九）年の春に行われたと云う。「後陽成院」、「後水尾院」、「後西院」はそれぞれ順に後陽成天皇、後水尾天皇、後西天皇（人名家名等解説及び索引 66 頁「新院」の諡号である。「いまほりかはにまします太閤」が宝永六年当時に堀川に居住した関白を意味すると仮定した場合、宝永年間に堀川御殿を新造、所有したことの知られる<sup>〔注三六〕</sup>前関白近衛基熙に比定する。

右の傳承の内容が確かであれば、後陽成天皇は江戸時代後期の上層社会において当代随一の合香家として知られたのであり、その秘方秘説は皇子の後水尾天皇から後西天皇へと繼承され、公家の近衛基熙へは非公式ながら口傳を伴う形式により後陽成天皇の秘方秘説が詳細に傳授されていたことになる。『基熙公記』や基熙室で後水尾天皇皇女の品宮常子内親王（人名家名等解説及び索引 65 頁「品」）の日記『无上法院御日記』には、後西天皇が近衛基熙に対して薫物方とその口傳を非公式に傳えたことや、常子内親王が後西天皇から薫物方の唯授一人の相傳に与っていたことなどが明記される<sup>〔注三七〕</sup>。基熙の嗣子である家熙が当主となっていた宝永年間の近衛家において、右の傳承が記録に値する薫物の〈歴史〉として珍重されていた蓋然性は極めて高いと言えよう。

今後の調査研究では、引き続き後陽成天皇ゆかりと傳わる薫物方及びそれらの同類文の探索と比較検討を実施することにより、後陽成天皇の合香家としての實相及びその源泉と後世への傳來について明らかにしたいと考えている。

方・説 仙人方 5（自後陽成院新上東門院御相傳方也）、黒方方 12（右准后御方從成院御相傳之方云々）

## さ行

**實香公** さねかう 『薫物調合秘方』「黒方」方 11 の依拠資料の書写者。「轉法輪家方」として傳來した本方を、自筆にて書写したと傳わることから、室町時代の公卿轉法輪三条實香（応仁二（一四六八）年—永祿元（一五五八）年）に比定する。

實香は応仁二年に龍翔院右大臣從一位公教一男として誕生。母は不明。文明二二（一四八〇）年叙爵。父公教は前年の四月に周防へ下向したまま戻らず、翌一三年五月には祖父の前左大臣入道實量とともに洛中の借家に居住。公教は同年二月に周防で出家していたが、實量と實香はそのことを知らなかったと云う（以上、『宣胤卿記』同一年五月一日条。同一年（一四八〇）年某月某日從五位下侍從。同年五月一二日正五位下。翌年七月二八日に少將を経ぬまま左中将に任じ、同一年（一四八四）年六月二〇日、一六歳で元服して從四位上に聴禁色の賞を賜う。同一年（一四八六）年一二月正四位下、翌長享元（一四八七）年七月二九日從三位に叙されて公卿に列した。左中将如元。同三（延徳元、一四八九）年七月八日權中納言に任じて、同年八月二〇日勅により帶剣を授かる。翌年一〇月二三日權大納言。同三（一四九一）年一二月一八日正三位。文龜元（一五〇一）年閏六月一日權中納言兼右大將。同年八月一八日從二位。同四（永正元、一五〇四）年三月一五日正二位。永正三（一五〇六）年一二月二五日右馬寮御監宣下。翌年四月九日任内大臣、同日大將如元。右大臣内大臣は官次により列せしむべき由宣下。同年五月七日、父の入道右府公教が前月（四月）八日に薨じた由を注進して服解。同一年（一五一三）年一一月九日轉左大將。同二（一五一一）年四月一六日任右大臣、左大將如元。同年一二月二六日從一位。翌年三月二九日辭大將。同一年（一五二七）年正月一日拝賀着陣、同日内弁一上事、伊長朝臣より鬼間にてこれを仰せ。元日内弁。翌年五月二八日轉左大臣。同一年（一五一九）年一〇月七日輕服、一〇月一〇日拝賀着陣。御即位日時并擬侍從定奉行。翌大永元（一五二二）年三月二二日御即位内弁并即位叙位執筆。同年七月一日左大臣を辭退。同三（一五二三）年閏三月一六日本座。天文四（一五三五）年八月二八日任太政大臣。同五（一

五三六）年二月二日聴輦車陣宣下。同月二三日拝賀、同日聴輦車。消息宣下。同年六月二五日太政大臣を辞退。同六（一五三七）年二月八日出家、六九歳。法名諦空。定法寺法務戒師。永禄元年二月二五日薨去、九一歳。『続史愚抄』に浄土寺と号した由が傳わる。

實香は天文二（一五三三）年十月十九日に子息公頼とともに後奈良天皇（人名家名等解説及び索引58頁「後奈良院」）に対して薫物の秘方を傳授する等、禁裏を頂点とした上層社会における薫物の師範の役割を果たしたと見られる人物である。實香の文人及び合香家としての略歴及び江戸時代前期類纂の他書に傳わるに實香ゆかりの薫物方については、既出の拙稿（注四〇）において詳述しており参照されたい。以下の本項では、『薫物調合秘方』に傳わる實香方の特徴と来歴について、東山御文庫所蔵の一本についての既出の拙稿において示した私見を補足しながら解説する。

管見に、『薫物調合秘方』において實香ゆかりの品と傳わる薫物方一種類一点について、他書の載録方との比較により實施した同類文探索結果は次の通りである。

- 1 黒方方11（轉法輪家方實香公以自筆書寫之）…【同類文】①高松宮本「たきものゝはう」黒方方6（処方の由緒ナシ）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方24（勅筆巻物）、③同上・烏方（黒方の異名）方113（家の方）、④専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』又方（黒方）方10（秘 勅作并三家）

①から④の同類文の内、依拠資料「勅筆巻物」と併記される②については、載録先の『薫物秘藏抄』を類纂、書写した人物と見られる江戸時代前期の公卿菊亭（今出川）公規が当時の禁裏に進上した家傳の薫物書二点のうち、傳承筆者轉法輪實香の卷子本一点を、後水尾法皇（人名家名等解説及び索引61頁）が自ら書写して公規に下賜した宸翰に該当する可能性の高いことが考えられた。③の由緒「家の方」とは、同書においては公家の四辻家の処方を意味し、同家において代々相傳された品の一つであった可能性がある（注四二）。④の「秘 勅作并三家」を「秘（方）、勅作ならびに三（条）家」として補いながら読めば、勅作であり三条家、おそらくは轉法輪三条家にもゆかりの秘方としても傳來した処方と解釈できるのであり、天皇家と轉法輪三条家の双方に傳來したとされる点において、②の来歴とも重なる。

『薫物調合秘方』原本が、確かに後水尾天皇震筆の類纂であると仮定した場合、「黒方」方11が、菊亭公規の進上した傳承筆者轉法輪實香の卷子本を依拠資料として写し取られた可能性は検討を要す。今後の調査研究では、本方を始めとする記述の来歴を可能な限り明らかにすることにより、『薫物調合秘方』の源泉と成立について解明したい考えである。

方・説 黒方方11（轉法輪家方實香公以自筆書寫之）

## 品 しな

『薫物調合秘方』載録の「黒方」方4及び「菊花」方42に併記された由緒の書写者からこれらを「相傳」された対象への呼称。管見に、右の薫物方二種類二点について、他書の載録方との比較により實施した同類文探索結果は次の通りである。

- 1 黒方方4（品ニ相傳之方）…【同類文】（ナシ）
- 2 菊花方42（御室方 相傳品）…【同類文】①宮内庁書陵部所蔵後西院宸翰『薫方之書』菊花方6（処方の由緒ナシ。本書は傳承筆者後西院）、②徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』菊花方123（処方の由緒ナシ）、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』菊花方72（大和トジ）

「品」に相傳された薫物方二種二点の内、「黒方」方4は管見と同類文を確認できていない。本書が確かに後水尾天皇（人名家名等解説及び索引61頁）御書であるとすれば、後水尾天皇の御世の皇室に傳來したという以外にの来歴は不明である。「菊花」方42は「御室方」とも傳わる処方である。「御室」（人名家名等解説及び索引50頁）は御室仁和寺又はその門跡の略称と考えられる。

江戸時代前期の菊亭（今出川）家で類纂された可能性のある薫物書には、「御室御所」が正親町天皇（人名家名等解説及び索引49頁）に薫物「黒方」方を相傳した由が記載される。既出の拙稿では、この「御室御所」が御室仁和寺宮門跡の任助入道親王等に該当する可能性を指摘した他、『薫物調合秘方』を始めとした同時代の諸書に「御室」と称される合香家について考察したこともあった（注四二）。任助入道親王は、妙莊嚴院伏見宮貞敦親王と轉法輪三条實香（人名家名等解説及び索引64頁）女香子との間に誕生して後奈良天皇猶子となった人物である。實父ゆかりの合香方は『薫物調合秘方』等の薫物諸書に載録されており、外祖父の實香は後奈良天皇の薫物の師範を拝命した著名な合香家である。『薫物調合秘方』の「御室方」が任助入道親王ゆかりの処方を意味するとすれば、「菊花」方42は、同じ宮門跡から他の薫物方を相傳したと見られる正親町天皇を介して皇室に傳來し、後水尾天皇の手許に集積、類纂された可能性は、検討に値する。

「菊花」方42の同類文①によれば、この処方は後水尾天皇皇子の後西院にも傳來し、手づから書写されるなど珍重された可能性がある。同類文②の載録先は後水尾朝以降の時代に類纂された可能性のある薫物書であり、尾張徳川氏に傳來した。同類文③は江戸時代前期の公家の菊

亭（今出川）家で類纂されたと考えられる薫物書に載録されており、「大和トジ」こと大和綴じ装訂の薫物書から写し取られた品と傳わる。「大和トジ」の詳細については調査中である（人名家名等解説及び索引50頁「御室」）。

陽明文庫に傳來する『薫物調合秘方』写本の跋文によれば、同本は後水尾天皇震翰を用いて書写された「新院」（人名家名等解説及び索引66頁）こと後西院宸筆の御秘本を、貞享元（一六八四）に近衛基熙（人名家名等解説及び索引84頁）が拝借して書写したものであると云う。

また、注四に示した先行研究によれば、本書には後水尾天皇御書として近代まで禁裏官庫に傳來した諸本も存在した可能性がある。現在の東山御文庫には本書の写本一本が収蔵されており、その現状には、陽明文庫所蔵の一本に脱落して傳わらない薫物方等が確認できる他、挿紙に記入された薫物方が陽明文庫所蔵の一本においては本文化して載録されることから、「後水尾震翰」やこの天皇の御書と見なされた諸本は、東山御文庫本に該当する可能性がある。以上の來歴に加えて、右の二種類二点の処方の由緒に諸本間の異同が確認できないことに鑑みて、「品ニ相傳」、「相傳品」とある記述の筆者については、基熙や後西天皇ではなく、後水尾天皇、或いは各処方の依拠資料の書写者であった可能性を検討すべきであろう。

江戸時代前後の皇室を中心とした上層社会に合香家「品」に該当しそうな人物として、後水尾天皇第十五皇女で品宮または級宮と称せられた常子内親王に注目すべきかと考える。品宮が近衛基熙に降嫁して以降に記した日次『无上法院殿御日記』及び基熙の日次『基熙公記』によると、品宮は父帝や後西天皇、靈元天皇ら近親の皇族方の御所に度々参上して薫物調合の手傳いをしている他、後西天皇から薫物方の唯授一人の傳授にも与っている（注四三）。基熙が後西天皇宸筆の「御秘本」を拝借して書写したとの跋文の内容には、蓋然性が認められる。

『薫物調合秘方』載録の「黒方」方4及び「菊花」方42の識語の筆者が、本書の類纂者ないし筆者と傳わる後水尾天皇自身であった場合、この天皇の日次等一人称による記述の中で、品宮を「品」と称することがあったか否かの問題も含めて、「品」相傳の二方の來歴については、今後の調査研究の課題の一つとして解明に取り組みたい考えである。

方・説 黒方方4（品）ニ相傳之方、同（菊花）方42（御室方 相傳品）

**准后** しゅごう ジュコウ 准三后の略。『薫物調合秘方』載録「黒方」方12を「後陽成院」（人名家名等解説及び索引62頁）から相傳して所持した人物の呼称として見える。男女の別は不明。本書には、同じ天皇から母後の新上東門院勅修寺晴子（人名家名等解説及び索引69頁）が相傳した

と云う薫物方「仙人」方5及び「黒方」方12も載録される。新上東門院は准三后に叙されたことから、既出の拙稿では、「黒方」方12を所持したと云う「准后」を新上東門院と見なしたうえで、本書の書誌の考察を行っていた（注四四）。

現在までの調査において、「黒方」方12の同類文は他の薫物書に確認できていない。「准后」の特定については、本方の來歴を明らかにする過程において、改めて慎重に考察したい考えである。

方・説 黒方方12（右准后御方從 後陽成院御相傳之方云々）

**新院** しんゐん シンイン

東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』載録の「落葉」方46から「拾遺」方49までの四種類四点の処方の依拠資料「古筆一卷」を「御所傳」なさったという上皇、及び陽明文庫所蔵の一本の巻末の跋文に残された貞享元（一六八四）年「左僕射基熙」（人名家名等解説及び索引84頁「基熙」）跋文に、「右一帖以後水尾震筆（改行）新院自令寫御秘本也」として、後水尾天皇（人名家名等解説及び索引61頁）の震筆とされる一本により自ら書写なさったと云う、陽明文庫所蔵の一本が依拠した傳本の書写者として傳わる上皇。跋文の内容が正しければ、新院の宸筆は陽明文庫所蔵の一本またはその原本の底本であったと解せる。なお、前者の四種類四点の薫物方については、陽明文庫所蔵の一本の現状において、前半の二種類二点の処方、及び三点目の「補闕」の銘が脱落して傳わる。

既出の拙稿では、東山御文庫所蔵の一本に確認できる最も新しい年次が「寛文六年」であること、本書の内容から、先行研究に云う後水尾天皇御書の薫物書に該当する可能性の伺えること等により、「古筆一卷」を「御所傳」なさった「新院」とは、寛文三年に讓位して新院と呼ばれた第百十一代後西天皇（寛永十四（一六三七）年—貞享二（一六八五）年）に比定する旨報告したことがあった。陽明文庫所蔵の一本における傳承筆者基熙の跋文に云う「新院」についても、後水尾天皇震筆を用いて書写したとされること、及び跋文の執筆年次から、貞享二年に崩御するまで新院と呼ばれた後西天皇に比定する。

ただし、現在までの稿者による調査研究において、「新院御所傳古筆一卷」に該当しそうな薫物書の所在については調査中であり、後西天皇ゆかりの品と傳わる薫物方の内、これらの四種類四点の処方に一致する同類文も確認できていない。「古筆一卷」を「御所傳」なさったと云う「新院」の人物が、陽明文庫所蔵の一本の跋文に云う「新院」と異なる可能性は否めないものであり、なお慎重に調査、検討を進める必要があるが、少なくとも、江戸時代前期の近衛家

において、『薫物調合秘方』に後水尾天皇震筆と後西院宸筆の御秘本とされる二点の写本の存在が知られていた可能性は高いと言えよう。

以下の本稿では、後西院の閏歴に合香家としての事跡を交えながら、『薫物調合秘方』の「新院」について解説してみたい。

後西天皇は後水尾天皇皇子として明正朝の寛永十四年十一月十七日に誕生。母は贈左大臣櫛笥隆致女で後水尾天皇後宮に典侍として参入した従三位准三后逢春門院櫛笥隆子。幼名秀宮。正保四年九月十五日、故彈正尹好仁親王の高松宮を相続、桃園宮と称した後に、同十一月二十七日に花町殿へ移り、花町宮と改称した。慶安元年七月十九日一品親王に叙されて良仁と改名。同四年十一月二十五日に後水尾院御所にて元服、式部卿に任ぜられた。承応三（一六五四）年十一月二十八日、花町殿に踐祚。花町殿は皇居としては狭小であつたことから土御門殿が内裏として造営され、明暦元年に落成。同年十一月十日に新宮に遷御して、翌二年正月二十三日に紫宸殿にて即位した。万治四（寛文元、一六六一）年正月十五日、内裏炎上。天皇は照高院道晃親王の白河第に遷幸した後、翌二月十八日に近衛基熙第に遷御してこれを仮皇居とした。翌寛文二年に内裏が再建されたが天皇は讓位を予定しており内裏には戻らず、同月二十六日に東宮識仁親王御所において讓位、太政天皇と号した。同三年正月十九日、幕府により二条閑白家の旧地において新院宮の造営が着工せられ、同四年に落成。新院は寛文十三（延宝元、一六七四）年五月八日と同三（一六七六）年十一月二十五日に発生した大火においても延焼に遭う等、度々災禍に悩まされている。貞享二年二月十五日に不予を發して二十二日に崩御。四十九歳。

「御睡眠」の如き臨終であられたと云う。同月二十九日、後西院と追号された。

後西天皇は四辻公理に箏の琴を学んだ他、父帝より古今傳授に与る等、諸学諸藝を修練。在位中には度々散楽を鑑賞し、讓位後には新院宮にてしばしば和歌会を主催する等、多様な藝道を愛好した。洛中、禁裏の炎上に度々遭遇するという不幸な経験を経て、禁裏と仙洞御所に収蔵する古文書古典籍の複本作成、及び皇族と公家衆に傳來する貴重な古書の蒐集に尽力して、禁裏御文庫（東山御文庫）の再興と充實に努めたことは、従来の研究により広く知られている。

薫物に係る後西天皇の事跡について、先行研究にはこの天皇の御書と傳わる皇室傳來の薫物書の書誌が報告される他、宮内庁書陵部には、傳承筆者後西天皇の薫物方の類纂『薫方之書』も収蔵される<sup>〔註四五〕</sup>。既出の拙稿では、品宮常子内親王（人名家名等解説及び索引65頁「品」）や近衛基熙（人名家名等解説及び索引85頁）、菊亭（今出川）公規の日次にそれぞれ記述のあることを報告してきた<sup>〔註四六〕</sup>。以下の解説では、品宮基熙夫妻と公規の日次に記録された後西

天皇の薫物の逸話について紹介しておきたい。

品宮の日次『无上法院殿御日記』寛文十三（延宝元）年五月七日条によると、当日は後水尾法皇と後西院が禁中へ御幸なさり、梶井宮の他に両傳奏、飛鳥井ら公家衆も伺候して、昼まで伊勢物語の御講釈が催された。昼餐後に両院は還幸なさり、品宮は後西院より「調合の御匂袋を拝領。基熙へは前日に拝領したと云う。品宮はしばしば院御所へ参上して院の合香活動の手傳いを行つており、例えば延宝九（一六八一）年四月四日には、品宮と基熙とが後西院御所へ参上して院の御匂袋御調合の手傳いを行つてゐる。後西院御所での御薫物調合の手傳いについては、延宝九年から天和三年までの三年間に最も頻繁に記述されており、天和三年二月六日には「ほし（干、保志）」の、三月六日、十四日、十八日、二十二日には「御たき物」の御調合の手傳いをしている。また、この間の二月二十四日と二十九日の二日間には、後西院から品宮への薫物の唯授一人の相傳も行われたと云う。相傳の子細は次の通りである。

品宮は、後西院が内々に「たき物」を調合なさるとうかがつており、その手傳いの為、二月二十四日に後西院御所へ参上した。すると、「勅さくの御方」、勅作の御薫物方を後西院から品宮へ御相傳くださるとのことであり、薫物方「三色」、三種類三点をご用意になり、御奥書を伴うそれらをお傳えになった。これらの処分は大切に秘蔵された品であり、相傳は唯授一人への御傳授として執り行われた、と云う。この日は三種類三点の内「梅花」の一点を御前で調合し、あらゆる事について細やかに詳しくお教えいただいたとのことで、残り二種類二点については四五日中に参上して調合せよと仰せになり、勅作の御薫物方のみこの日に引き渡されている。品宮の夫である基熙も御前に参上し、午後十時前後に夫妻で退出している。

次に品宮が後西院御所へ参上したのは五日後の二十九日のことであつた。まず院の御薫物御調合の手傳いをした他、品宮も先日の残りの御薫物方二種類二点を調合。薫物の種類は「ふじ（富士）」と「新枕」であり、いずれの御秘方についても残らず御相傳になった、と云う。当日は、朝仁親王（後の東山天皇）の立坊とその後宮における立后に際して上洛していた幕府の使者が参内し、後西院御所にも参上。品宮は春宮御所と中宮御所へも見物に参上した後、午後八時前後に退出した。両日の相傳は、『基熙公記』の同じ期日の条々にも記録される。

『基熙公記』には、基熙もまた、生前の後西院から薫衣香五種類の委細を聞き傳え、これらを残らず東山天皇に申し入れた旨記載される。品宮への御相傳から二十年後の元禄十五（一七〇二）年六月一日、天候不良により外出を控えていた基熙の許へ左中将隆實が御使として来訪し、かねてより仰せのあつた薫衣香調合の事を聞き召されて一両日中に参上すべき旨「下命が

あり、基熙は、明後日三日の御前十時前後の時刻に参上する旨ご返答した。一日条の続文には、薰衣香については、正式な傳授としてではないが口傳等があり、後西院から詳しく仰せられこれをお聞きしたこと、自身の他にお聞きした者は無いこと、この度禁裏に対して子細を申し入れよと仰せ下された御蔭で、後西院から習い傳えた口傳を公の用にあてることができ、何より喜ばしく存じていることが述べられている。

六月三日条によれば、巳の刻に両傳奏が来訪した後、巳の刻半に参内している。続文には、一日に天皇の仰せを蒙ってから基熙が薰衣香の処方五種類を書き記したこと、これらは銘を「山吹」、「八重一重」、「潤紅（じゅんかう）」、「ねみたれかみ（寝乱髪）」、「臺（うてな）」と云う五種類の薰衣香の処方であること、基熙が隨身をして香具等を持参したこと等が記述される。天皇はただちにこれらを一つずつご調合になり、後宮からも大典侍局と新大典侍局の兩人がしばしば御前で同席したと云う。基熙はこれらの薰衣香方の由来についてもご説明し、正式な傳授を経ずに収蔵していたこと等を言上仕ったところ、天皇のご関心に与り、後西院より傳え下された内容を一事も残さず申し入れ終えたとのことである。同日条の末尾には、元禄十五年現在、世間に調合の古實を知る者の無い中で、自身が思いがけず古實を傳えて時宜に叶ったことについて、数奇な巡り合わせとして振り返るとともに、これらの処方を珍重すべき品と評している。

江戸時代前期の公家の菊亭（今出川）家に傳來した薰物書を対象とする調査では、当時の当主である菊亭公規の日記『公規卿記』等の記述をもとに、公規が、寛文五（一六六五）年に生家である徳大寺に傳來した薰物の古書一卷及び一冊を禁裏に献上しており、その返礼として、後水尾法皇及び後西院（人名家名等解説及び索引66頁「新院」）それぞれによる古書の宸筆の写本を下賜されたと傳わることを報告した（註七）。古書の原本及び宸筆の写本の所在や来歴、内容については不明である。両上皇が禁裏官庫の炎上を機に注力した書籍蒐集の一環であり、東山御文庫の沿革に係る重要な事項であることから、引き続き調査研究を實施して解明したい考えである。

さて、管見に、東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』載録の「新院」ゆかりの薰物方四種類四点について、他書の載録方との比較により實施した同類文探索結果は次の通りである。

- 1 落葉方46（東山御文庫本における通番。陽明文庫本にナシ。由緒書…右四方 新院御所傳古筆一卷之内）…【同・類文】①『香秘書』落葉方40（処方の由緒ナシ）、②『類聚雜要抄』落葉方23（処方の由緒ナシ）、③・④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物

秘藏抄』落葉方73（大本）・落葉<sup>126</sup>（秋の末冬のはしめに用ゆ時雨する時もみちのちりかかるに心すこきかにやあらん）、⑤四天王寺国際大学図書館所蔵『薰集類抄』付随（無題・挿紙）菊花方1（処方の由緒ナシ）、⑦杏雨書屋所蔵乾々齋文庫旧蔵『薰物之方』落葉方28（中治傳／右黒庵傳受畢紹鷗へ三条殿ヨリ相傳ト云々）

- 2 菊花方47（東山御文庫本における通番。陽明文庫本にナシ。由緒書…右四方 新院御所傳古筆一卷之内）…【同類文】①・②『薰集類抄』菊花方58（不知誰人、清慎公、枇杷左大臣、亭子院前裁合、云々）・落葉方59（不知誰人）、③名古屋市蓬左文庫所蔵『焼物調合法』落葉方12（不知誰人）、④『香秘書』落葉方32（この方秘藏の方故 白河院下給方也 家々の説をもて抄しいたさるる方也 刑部卿平朝臣忠盛給之）、⑤・⑥四天王寺国際仏教大学図書館恩頼堂文庫所蔵『薰集類抄』付随（無題・挿紙）菊花方3（処方の由緒ナシ）・落葉方4（処方の由緒ナシ）

- 3 補闕方48（東山御文庫本における通番。陽明文庫本に銘ナシ、通番46。由緒書…右四方 新院御所傳古筆一卷之内）…【同類文】①『香秘書』補闕（侍従）方29（右六（ママ）方は藏人所小舎人大和常生之秘方也、件常生延喜聖代與公忠朝臣同時相並奉合之役）、②『類聚雜要抄』補闕（侍従）方14（右六（ママ）方者。是藏人所小舎人大和常生之秘方也、云々）、③『薰物故事』百和香（字・侍従）方<sup>104</sup>（又方）

- 4 拾遺方49（東山御文庫本における通番。陽明文庫本に通番47。由緒書…右四方 新院御所傳古筆一卷之内）…【同類文】①『香秘書』拾遺（侍従）方22（処方の由緒ナシ）「新院御所傳古筆一卷」の逸文と傳わるこれら四種類四点の処方は、管見に、杏雨書屋所蔵で南北朝期書写と鑑定される薰物書『香秘書』一卷一軸にまとまって傳來しており、他書の同類文に比べて本文が最も本書のそれに近い。この特徴から、既出の拙稿では、「新院御所傳古筆一卷」とされる散逸薰物書が、『香秘書』に近い内容の類纂であった可能性を指摘したことがあった。また、その他の同類文の載録が、鎌倉時代の書写者識語の傳わる「焼物調合法」や、南北朝期に三条家の当主により類纂されたと傳わる『薰物故書』、平安時代の皇族や公家の寝殿、調度を始めたとした生活文化を網羅した『類聚雜要抄』など、比較的早い時代の類纂に集中しているのも特徴的である。

前述の通り、後西天皇は皇族や公家の近親者とともに頻繁に薰物を調合しており、自身の所持する薰物方をこれらの親族に対して継承、開示する活動も行っていた他、父帝の主導による薰物の古書の蒐集、書写にも取り組んでいたことが分かっている。陽明文庫に傳來する『薰物



調合秘方』写本の跋文に、後西天皇が父帝の震筆の薫物書を継承して自ら書写に及び、これを公家の近親者に開示した由の記されることから、この天皇が晩年に至るまで、父帝の遺した薫物方の保存と継承に努めていた可能性を伺うことができよう。

『薫物調合秘方』本文に云う「新院」が跋文のそれと同様に後西天皇に比定するならば、「新院」ゆかりの四種類四点の薫物方の同類文の載録状況からうかがえた特徴は、後西天皇が讓位後に薫物の古書を蒐集したとする『公規卿記』の記述に対して矛盾しない。本文に云う「新院」が跋文の「新院」に一致するか否かの問題については、来歴等の調査を進めた上で慎重に検証したい考えである。

方・説（闕）方46・拾遺方47（右四方 新院御所傳古筆一卷之内）、跋文（右一帖以後水尾震筆（改行）新院自令寫御秘本也）

※東山御文庫本には、「右四方」に該当する処方として「落葉」方、「菊花」方、「補闕」方、「拾遺」方（通番は方46、49）の四種類四点の薫物方が記載される。陽明文庫本には、これらの内「落葉」方及び「菊花」方が傳來せず、方46については銘の「補闕」が脱落している。

## 新上東門院

しんしやうとうもんゐん  
シンシヨウトウモンイン

贈左大臣正二位勸修寺晴右女、母右京亮栗屋元隆女。晴子は正親町天皇（人名家名等解説及び索引49頁）皇子誠仁親王に仕えて第一御子と仁王（人名家名等解説及び索引62頁「後陽成院」）や第六皇子智仁（人名家名等解説及び索引76「智仁親王」）らの皇子皇女を授かり、阿茶局と称した。天正十四（一五八六）年七月二十四日に誠仁親王が早逝して陽光院と追号されると、同年九月十七日、正親町天皇が和仁王に親王宣下して皇嗣と定め、十一月七日に讓位。陽光院に太政天皇位が追贈され、晴子が准三宮に叙された後、慶長五（一六〇〇）年十二月二十九日には晴子に対して「新上東門院」の号が贈られている。元和四（一六一八）年七月二十四日、陽光院三十三回聖忌御法会を営む。元和六（一六二〇）年二月十八日崩御。享年については諸説あり、『義演准后日記』同日条や『泉涌寺諷誦類』「代々先皇法語集」には六十八と、『官公事抄』同日条や『孝亮宿祢日次記』二月十七日条には七十六と傳わる。『大日本史料』元和元（一六一五）年二月十八日条の類纂者は後者の説を「誤ナラシ」と注記しており、以後の研究や辞書類においても踏襲されて、天文二十二（一五五三）年誕生と見なした通説が行われる。

新上東門院御所においては歌舞伎踊などの舞踊や能楽、千反楽などの雅楽、観花宴といった

催しがしばしば執り行われる等、官庫の窮乏を感じさせない華やかな経営ぶりが伺える。慶長八（一六〇三）年三月二日には後陽成天皇主権による連歌御会が禁中において開催された後、新上東門院御所における観花御宴が夜を徹して催されたと云う。同年十一月十四日に禁中と新上東門院御所との間に新造の御文庫が完成して宴席が設けられ、後陽成天皇が御幸してこれを祝っている（巻四）。

右の動静からは、新上東門院は舞踊や能楽、雅楽等の藝道の鑑賞を愛好し、大規模な宴席も併せて主催するだけの資力にも恵まれたことが伺える。女院御所の御文庫の詳細や規模、変遷についても不明であるが、新上東門院の好みを反映した奥向きの書籍を中心として蒐集、収蔵された可能性を伺うべきであろう。新上東門院崩御の翌年にあたる元和七（一六二一）年二月十六日に高松宮好仁親王の主権により新上東門院追善連歌が催されたことに鑑みて、連歌は女院が所生の皇子らと共有した趣味の一つであった可能性が考えられるが、この女院の詠歌と傳わるものは、当時の連歌集等に載録されていない。

新上東門院の文化人として業績や實像が不明な中で、薫物については、当時の公卿の日次や皇室傳來の薫物書において、その活動の實態や知識の源泉、来歴に関する事項が比較的詳しく傳わる。例えば、慶長十四（一六〇九）年以降の日付による公家や武家の書状の原本や複本には、「女院御所」こと新上東門院御所より武家の有力者に対して薫物の贈られた由が記される。

この内、「勸修寺光豊公文案」によると、慶長十四年六月十八日に片桐且元・貞隆父子に対して「薫衣香」<sup>廿</sup>、おそらくは薄様紙に包まれる等して個包装された薫衣香二十包が、翌十五年十月三日に板倉勝重に対して「御薫物棗二」、片桐且元に対して「御薫物棗一」、おそらくは棗二壺と一壺とにそれぞれ収納されたであろう女院御製の薫物が、『駿府記』同十七（一六一二）年二月十二日には駿府の徳川家康に対して「薫物」が、それぞれ遣わされたと云う。毛利文書の同十九（一六一四）年正月二十八日付広橋大納言兼勝宛書状によると、毛利輝元から「女院さま」こと新上東門院に対して年頭に贈られた太刀、銀等の返礼として、「御たき物十かひ」、貝を加工した容器十個に入れた女院御製の薫物が、輝元宛として兼勝に託して届けられている。

以上の薫物の内、「御」と尊称された薫物の由来について、現時点では上述の通り、新上東門院が調合に主体的に関与した品として下賜されたものと解釈しておきたい。皇室から武家に対して薫物を贈答する際の意匠として、薫衣香なら薄様紙の包、練香状態の薫物であれば貝の容器に収めて贈るのが当時の通例である。板倉勝重、片桐且元の二名に対して茶道具の棗に入れて届けているのはいささか特徴的であり、両者が著名な茶人であることを考慮した意匠であ



った可能性を検討すべきかと考える。

『薰物調合秘方』東山御文庫本に新上東門院ゆかりの品として傳わる薰物方の載録されることについては、大日本史料の元和六（一六二〇）年二月十二日条に報告されている他、既出の拙稿で前文を翻刻して紹介したことがあった。前述の通り、既出の拙稿では、「新上東門院」（人名家名等解説及び索引69頁）の他に「女院御所」（人名家名等解説及び索引78頁）及び「東」（人名家名等解説及び索引82頁）の呼称により薰物方の載録された合香家についても、新上東門院勸修寺晴子の可能性のあるものとして報告した<sup>〔後九〕</sup>。以下の本解説においては、これらの内、「新上東門院」と明記される合香家にゆかりの薰物方に絞り、それらの種類と来歴、特徴について考察する。

陽明文庫本の現状に記載される「新上東門院」の薰物方は次の二種類二点である。処方の通番は、本稿掲載の翻刻に付したものである。

1 仙人方5（自後陽成院新上東門院御相傳方也）…【同類文】（なし）

2 梅花方61（新上東門院御方）…【同類文】（なし）

また、東山御文庫本における右の二点の処方を除く「新上東門院」の薰物方は、次の一種類四点である。処方の通番は、既出の拙稿における東山御文庫本の翻刻に付したものである。

3 黒方方60（三両合／新上東門院御相傳之御方）…【同類文】①東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』黒方（くろほう）方56（三両合／右朱点之分八条殿方也）※陽明文庫本の通番…方54

4 黒方方61（後／三両合／新上東門院御相傳之御方）…【同類文】①東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』黒方（くろ）方57（三両／のち／右朱点之分八条殿方也）※陽明文庫本の通番…方55

5 黒方方62（後／三両合／◎／新上東門院御相傳之御方）…【同類文】①東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』黒方（くろほう）方58（二両合／右朱点之分八条殿方也）※陽明文庫本の通番…方56

6 黒方方63（後／二両合／新上東門院御相傳之御方）…【同類文】①東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』黒方方59（のち／元和元年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也／本御自筆 智仁／右朱点之分八条殿方也）※陽明文庫本の通番…方57

右の六点の処方の内、1は室町時代以降に新たに考案されたと見られる新作薰物の一種であり、残る2から6は平安時代から行われた伝統的な種類の薰物である。各処方に付随の傳承に

よれば、1の「仙人」方は「後陽成院」（人名家名等解説及び索引62頁）から新上東門院が相傳なさった処方であり、2の「梅花」方は新上東門院が考案ないし所有した処方として、3から6は新上東門院が相傳なさった処方であると傳わる。2から6の五点については、処方の源泉について傳承に明示されていない。

管見に、1及び2については他書に同一又は近似した内容の処方を確認できていない。3から6の四点は陽明文庫本に載録されておらず、他書の同類文についても確認できていないが、これらについては東山御文庫本の直前の記述の中に、同類文と見なせる近似した処方四点を、連続して確認することができる。

3から6の同類文は、東山御文庫本にいずれも朱筆で記述されたものであり、後文に「八条殿方」、「八条殿」と呼ばれる人物が所有した薰物方と記される。本書の成立が跋文通り後水尾院政期（人名家名等解説及び索引61頁「後水尾」）を下限とするとすれば、合香家「八条殿」は八条宮智仁親王（人名家名等解説及び索引76頁）、又はその皇子で嗣子の智忠親王に比定する。智仁親王は新上東門院所生の陽光院皇子の一人であり、後陽成天皇の弟皇子にあたる人物である。本書には「智仁」及び「智仁親王」ゆかりの品と傳わる薰物方も複数載録されており、それらには3などと同様に朱点が付されることから、「八条殿方」の一部と解釈できる。一方で、智忠親王が考案ないし所持した品と明記されて傳來する薰物方は、管見に確認できていない。調査の現時点においては、智仁親王を合香家「八条殿」と見なすべきかと考える。

以上の傳承の内容が正しければ、新上東門院は新作薰物と伝統的な種類の薰物とを所持していたことになる。新作薰物「仙人」方は、自身のお生みした天皇から相傳していた。従来の調査では、薰物方が親族間で世代を逆行して授受されたとする傳承は確認できておらず、極めて珍しい事例と言える。伝統的な種類の薰物である「梅花」、「黒方」の処方の内、「黒方」方四点については、いずれも皇子の八条宮智仁親王の所有による薰物方に同類文を確認できたことから、新上東門院から皇子の八条宮に、何らかの形で繼承されたか、双方が源泉を同じくする薰物方をそれぞれ写し傳えていた可能性が考えられる。両者の母子という関係に鑑みて、母から子に繼承されたと考えるのが穏当である。繼承の方法や正統性は明記されないことから、これらの処方が教え授ける形式等により傳授されたものであったのか、それとも処方の写しを譲り受ける形で開示されたものであったのかという問題については、今後の調査において明らかにしたい考えである。

方・説 仙人方5（自後陽成院新上東門院御相傳方也）、梅花方61（新上東門院御方）

※東山御文庫本には、「新上東門院御相傳之御方」として載録される「黒方」方四点（通番は方60～63）も載録されるが、陽明文庫本には載録されない。

※「准后」、「女院御所」、「東」と称される人物の考案ないし所有と傳わる諸方については、それぞれの呼称についての解説を参照されたい。

せうしやう ショウショウ 『薰物調合秘方』載録の薰物「侍従」方35の冒頭に「せうしやうの方」とある記述の一部。「せうしやう」を「少将」と見なせば、本方を考案ないし所持した人物の呼称と解せる。「同」は前文により「東方」（人名家名等解説及び索引82頁「東」の略語として認められる。

管見に、本書と他書の載録方との比較により実施した同類文探索結果は次の通りである。

- 1 しゅう（侍従）の方35（せうしやうのしゅうの方 同（東方））…【同類文】①『薰集類抄』黒方方61（亦云薰衣香、云々／賀陽宮）、②『薰集類抄』黒方方62（亦云薰衣香、云々／滋宰相、小一条皇后、公任卿、小一条院、入道一品宮女房陸奥、参議師成）、③『薰集類抄』黒方方66（亦云薰衣香、云々／八条宮、至要方、滋野直子、云々）、④『薰集類抄』黒方方76（亦云薰衣香、云々／四条宮、云々）、⑤『薰集類抄』黒方方79（亦云薰衣香、云々／藤原保昌）、⑥『薰集類抄』黒方方82（亦云薰衣香、云々／二条閑白）、⑦名古屋市蓬左文庫所蔵「焼物調合法」黒方方15（四条宮）、⑧名古屋市蓬左文庫所蔵「焼物調合法」黒方方17（八条宮／或云至要方也延喜六年二月三日典侍滋野直子朝臣所献也）、⑨宮内庁書陵部所蔵『薰物方』黒方方4（平等院）、⑩宮内庁書陵部所蔵『薰物方』黒方方33（延喜六年二月三日滋内侍のすけのたてまつれるといふ）、⑪『類聚雜要抄』烏方（クロホウ）方6（皇后宮御方／但八条式部卿官方同之）、⑫『薰物故書』黒方方4（四条宮／保昌同之）、⑬『薰物故書』黒方方10（他家）、⑭高松宮本「たきものゝはう」黒方方3（処方の由緒ナシ）、⑮徳川林政史研究所『薰物之方』黒方方21（処方の由緒ナシ）、⑯徳川林政史研究所『薰物之方』黒方方29（ちよくやう光源院）、⑰徳川林政史研究所『薰物之方』黒方方42（勅方）、⑱徳川林政史研究所『薰物之方』黒方方67（処方の由緒ナシ）、⑲京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』菊花方17（白表紙半切／右二方同方／右 禁裏申入之委細以 勅筆口傳之義被傳之分）、⑳京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』黒方方32（半切墨流）、㉑京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』黒方方41（大和トジ半切）、㉒京都大学附属図書館

館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』くろ方（黒方）方100（半さい／公任卿方／寛文八年十一月十一日後徳大寺左府書借写之了秘方也）、㉓京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』又（黒方）方110（四季通用祝言之時も用之）、㉔杏雨書屋乾々斎文庫所蔵『薰物之方』黒方方1（後陽成院様勅方）

右の「侍従」方35については、平安時代後期の類纂と傳わる『薰集類抄』から江戸時代の類纂と見られる徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』までの薰物諸書において、二十四点の同類文を確認することができ、いずれも薰物「黒方」方として傳來する。これらは『薰集類抄』において滋野貞主、仁明皇子八条式部卿本康親王、滋野直子、花山院皇后四条宮藤原遵子、藤原公任、藤原保昌ら多数の合香家に所持されたと傳わる有名な処方である。室町時代の類纂と傳わる『薰物故書』以降の薰物諸書においては、こうした従来の傳承を伴う場合に加えて、「ちよくやう（勅様）」、室町時代以降の人物と見られる「光源院」、及び「後陽成院様」（人名家名等解説及び索引62頁）にゆかりの品としても傳來し始めるところに特徴が伺える。なお、同類文の内三点は、徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』において確認することができる。

東山御文庫所蔵の一本を翻刻、解題した既出の拙稿においては、書中に「東」の字を含む合香家として「新上東門院」（人名家名等解説及び索引69頁）のあらわれることに鑑みて、新上東門院勸修寺晴子の略称と推定していた（注10）。しかしながら、以上で述べてきた通り、十一點の処方の他書における傳來状況を確認したところ、内九点については尾張徳川家傳來の薰物書に載録されて傳わることが判明した。今後の調査研究においては、「東（あつま）」、「東国（江戸）」又は「東福門院」を略してそのように称した可能性を検討すべきかと考える（以上は人名家名等解説及び索引82頁「東」解説文による）。

右の同類文の来歴には、「せうしやう」の人物の推定を可能にするような記述を確認することができない。今後の調査研究において、「東」の検討作業に並行して、引き続き推定に取り組みたい考えである。

方・説 しゅう（侍従）の方35（せうしやうのしゅうの方 同（東方））

先帝 せんてい 『薰物調合秘方』梅花方69の冒頭には「伏／五方／先帝方」とあり、本方が「伏」（人名家名等解説及び索引82頁）と略された合香家にゆかりの五点の処方の一つであり、「先帝」なる前時代の天皇にゆかりの品でもあることを記した旨が記述される。

管見に、本書と他書の載録方との比較により実施した同類文探索結果は次の通りである。

1 梅花方 69 (伏／五方／先帝方) …【同類文】①『薰集類抄』侍従方 48 (大和常生)、②杏雨書屋所蔵『香秘書』補闕方 31 (右六方は藏人所小舎人大和常生之秘方也、件常生延喜聖代與公忠朝臣同時相並奉合之役)、③『類聚雜要抄』補闕方 16 (右六方者。是藏人所小舎人大和常生之秘方也、云々)、④『薰物故書』侍従方 32 (常生)、⑤同上・梅花方 47 (先帝)、⑥本書・梅花方 65 (伏／五方)、⑦本書・梅花方 62 (勸 三方 寛文六三廿四始調合)、⑧高松宮本『たきものゝほう』梅花方 7 (梅の花を入手口傳 春もちゐ候)、⑨京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』梅花方 2 (大本／三条家秘本)、⑩同上・梅花 7 (勸筆巻物)、⑪同上・梅花 10 (勸筆巻物／右三色三家秘方也、云々)、⑫同上・梅花 114 (処方の由緒ナシ)

同類文の内比較的古い時代の薰物書等に載録される①から⑤の五点の内、①から④の四点には、平安時代の醍醐朝の合香家として知られる小舎人大和常生ゆかりの品である旨が、室町時代中期の類纂と傳わる『薰物故書』載録の⑤には、本方に同じく「先帝」なる前時代の天皇にゆかりの品である旨が記載される。⑤の載録先や他の同類文の由緒には、「先帝」なる本方の所有者の推定につながるような記述は確認できていない。「伏」の記述は『薰物調合秘方』の同類文⑥にも記載される。本方と⑥とは、前者は香具「甲香」を「貝」と、後者は「甲」と記し傳える点において異なるものであり、香具の種類や目方は一致している。「貝(香)」の表記は、管見に室町時代以降の類纂ないし書写と傳わる薰物諸書によく行われていることから、「先帝」ゆかりの本方のほうが、比較的古体のテキストを傳えていると言えそうである。⑦の「梅花」方 62 には、処方の冒頭に「勸 三方 寛文六三廿四始調合」と記載され、続く方 63 及び 64 を含む「三」つの処方はいずれも「勸」家(人名家名等解説及び索引 53 頁「勸」)にゆかりの品であり、寛文六年三月二十四日に調合を開始せられた旨が記される。記述の内容は東山御文庫所蔵の一本に同じである。他書に傳來する本方の同類文は十二点にのぼり、「勸」家ゆかりの処方の中では最も普及した品と言える。その他の同類文の内、江戸時代前期の菊亭家における類纂と見られる薰物諸書に載録された⑨及び⑪には、これらの処方が合香家三条家(人名家名等解説及び索引 75 頁「轉法輪」)にゆかりの品である由が、⑩及び⑫には、これらの処方が「勸筆巻物」(人名家名等解説及び索引 74 頁「勸」)こと天皇自筆の卷子本装訂による薰物書に載録された由が併記される。

同類文の内、平安時代から室町時代までの間に類纂されたと傳わる比較的古い薰物書に載録される①から⑤については、平安時代の合香家大和常生、又は「先帝」とされる前時代の天皇

にゆかりに品である由が諸書に繼承されていた。⑥以降にはこうした古い傳承は記載されないが、禁裏及び合香家三条家、並びに室町時代以降に皇室の外戚として權勢を誇った勸修寺家において所持された品々としての由緒を伴い傳來していた。本方及びその同類文の現状からは、いずれも重要な処方として珍重され、來歴ともども大切に繼承された可能性を伺うことができる。

今後の調査研究では、同類文⑤を載録する『薰物故書』の依拠資料を探究する等して、「先帝」の推定に取り組みたい考えである。

方・説 梅花方 69 (先帝方)

## 尊悟

さんご

「黒方」方 48 の依拠資料「本」の筆者とされる人物。約物の内容及び後文から、「八条殿」こと八条宮智仁親王所有の薰物方の一つとして傳來し、本書に載録されていることが伺える。

歴史上「尊悟」と称した人物は二名あり、一人は第九十二代伏見天皇の第五皇子である後平等院宮尊悟入道親王、いま一人は伏見宮貞敦親王男で第百五代後奈良天皇猶子の梶井宮貞齋親王である。以下の解説では、これら二名の「尊悟」の略歴についてそれぞれ確認するとともに、「尊悟筆」の薰物書を依拠資料とする「黒方」方 48 の内容と來歴、特徴について確認する。

一人目の「尊悟」は伏見天皇第五皇子尊悟入道親王、諱吉永。母は伏見天皇に典侍として奉仕した從二位左中将源具氏女で、權大納言局と呼ばれた。延慶三(一三二〇)年六月二十八日立親王。正和二(一三三三)年三月二十八日に平等院入室。暦応二(一三三九)年六月十五日に二品に叙された後、延文元(一三五六)年十月一日に天王寺別当に補された。『華頂要略』には翌二年四月二十九日に四十八歳で薨去とあるのに対して、『三井統灯記』には同四年七月晦入寂、俗年五十八と傳わる。後平等院宮と号した。

二人目の「尊悟」は梶井宮應胤法親王、諱貞齋。中務卿伏見宮貞敦親王男、後奈良天皇猶子、母は太政大臣轉法輪三条實香(人名家名等解説及び索引 64 頁)女。永正十八(大永元、一五二〇)年九月生(『水記』。天文十(一五四一)年正月五日親王宣下。同十二年八月二十一日、三千院に入室、名を應胤と改む。同二十二(一五五三)年七月三十日、天台座主に補される。弘治三(一五五七)年九月三日二品に叙される。後に大原に隱遁して京都で還俗、名を尊悟と改めた他、蜻庵などと号した。慶長三(一五九八)年薨去、享年七十九。外祖父の實香は合香家として著名な人物であり、子息公頼とともに後奈良天皇の薰物の師範を拝命したことも知

られる。父親王も合香をよくしたことが、日次や江戸時代の薫物方の類纂の記述から伺える（人名家名等解説及び索引82頁「伏」）。同母弟に同じく後奈良院御猶子の厳島御室こと御室仁和寺宮門跡任助入道親王があり、この任助もまた合香家として活躍した可能性の伺える人物である（人名家名等解説及び索引50頁「御室」）。

調査の現状において、本書の「尊悟」を右の二名のいずれかに決する為の確実な根拠資料は確認できていないが、後者の「尊悟」は合香家の家系に生まれ育った人物であり、薫物書を自筆で書写ないし類纂するだけの教養と関心を備えていた可能性がある。

さて、管見に、『薫物調合秘方』載録の「尊悟」ゆかりの薫物方一種類一点について、他書の載録方との比較により実施した同類文探索結果は次の通りである。

- 1 黒方方48（本 尊悟筆／右朱點之分八条殿方也）…【同類文】①『薫集類抄』侍従方40（八条宮、不傳男子、承和仰事、滋野直子、云々）、②『薫集類抄』侍従方56（堀川右大臣）、③『焼物調合法』侍従方10（堀河右大臣）、④『薫物故事』侍従方46（処方の由緒ナシ）、⑤京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』侍従方53（勅筆巻物／右一方堀川右大臣 二条関白治暦四年四月六日）

「黒方」方48の同類文は五点確認できており、それらの内、同類文②、③、⑤の三点については、処方に併記される由緒から、②の『薫集類抄』の「侍従」方56及びその鎌倉時代と江戸時代の写しと認定できる。⑥の依拠資料「勅筆巻物」について、既出の拙稿では、『薫物秘藏抄』を自筆で類纂した可能性のある江戸時代前期の公卿今出川（菊亭）公規が、薫物の古書二点、一卷及び一冊と引き換えに後水尾法皇（人名家名等解説及び索引61頁）と後西院（人名家名等解説及び索引66頁「新院」）から下賜されたと云う宸翰二点の内の一つであった可能性について考察したことがあった（注五）。「勅筆巻物」の所在等については調査中である。①の『薫集類抄』「侍従」方40は、同書の②の方の参考とされたであろう、古い時代の著名な合香家にゆかりの処方の一つと考えられる。④は室町時代の三条家による類纂と傳わる秘傳書に載録された「侍従」方であり、①から③のいずれかを直接ないし間接的に写し傳えたものであったかと考える。

「黒方」方48は、本書においては「黒方」の銘により載録されるが、平安時代から江戸時代前期までの類纂と傳わる他書においては、「侍従」の銘により傳來する著名な処方であった。本方の依拠資料である「尊悟筆」の薫物書とは、こうした傳統的な処方を載録した秘傳書であった可能性がある。今後の調査研究では、「尊悟筆」の薫物書のその他の逸文を探究する等し

て、本方と本書の来歴の解明に向けて取り組みたい考えである。

方・説 黒方方48（本 尊悟筆／右朱點之分八条殿方也）

た行

## 當家

たういへ、たうけ  
トウイモ、トウケ

『薫物調合秘方』諸本の薫物「侍従」方38の特徴及び由緒を記した記述「冬用之 當家如此 勸（冬に之を用ゆ。當家かくの如し。勸。）」の中に見える呼称。他書との比較による同類文の有無及び概要は次の通りである。

- 1 侍従方38（冬用之 當家如此 勸）…【同類文】①杏雨書屋所蔵『香秘書』侍従方2（八条の式部卿宮の方を故小一条院にあはせらるゝ）、②『薫物故事』侍従方38（同方（四条大納言）、③高松宮本『たきものゝほう』侍従方17（紅葉をかたとる）、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』侍従方54（墨流半切）

右の「侍従」方38には、本方が冬に用いる種類の薫物であり、「當家」こと処方の筆者の家には冬に用いる方として、或いは処方のままの目方で調合するよう傳わるものが併記される。記述の内容は東山御文庫所蔵の一本においても同じである。この由緒の末尾に記載された「勸」とは、本方が「當家」の他に「勸」家（人名家名等解説及び索引53頁）に傳來する処方であること、又は、「當家」が「勸」家であることを意味して書き添えられたものと解釈できよう。ただし、本書における「當家」の用例が右の一例に限られることから、現時点においてどちらかの解釈に決することは困難であり、今後の調査の課題としておきたい。

なお、同時代に類纂された可能性のある他家の薫物書においても、「當家」の呼称を薫物方の由緒を記述する中で用いた例を確認することができる。例えば、江戸時代前期の今出川家に傳來した薫物の資料等をもとに同家において類纂された可能性の高い『万方』には、次の連続する三点の薫物方が「當家方」と称して載録される。

- ・『万方』薫衣香方57（當家方）…（同類文なし）
- ・『万方』薫衣香方58（當家方）…①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』薫衣香方100（由緒なし）
- ・『万方』薫衣香方59（當家方）…（同類文なし）

右の三点の薫物方の場合、他書に同類文が確認できない、或いは確認できても由緒について明記されないという状況であり、「當家」の特定には本書の侍従方38と同様に継続して同類文

の探究及び比較検討が不可欠であるが、調査の現状においては、『万方』に云う「當家」は類纂者と見られる人物の養家である今出川家を意味する語として解釈しておきたい(卷五)。

方・説 侍従方 38 (冬用之 當家如此 勅)

**勅** ちよく 天皇の命令又はそれを記述した書、又は天皇に関わる物事に添えて用いる語。『薫物調合秘方』本文には七点の処方の由緒として「勅作方」、「勅方」、「同(勅方)」と、また本文に

対校された「イ(異文)」なる処方一点の由緒として「勅」と記される。ただし、既出の拙稿において考察した同時代の他家の薫物書では、天皇だけでなく上皇や法皇の所有であったことを意味する語として「勅方」、「勅作」等と記述される場合もみられた(卷五)ことから、本書の「勅」についても同様の可能性を含めて検討を進める必要がある。

本書における「勅」八例の内、「黒方」方 52 冒頭文に記された一例については、処方の続文に本方を含む複数の処方が元は「正親町院震筆」(人名家名等解説及び索引 49 頁「正親町院」)の「古本」に載録された品であり、「智仁親王筆」の「本」と称する依拠資料に記載のあった「八条殿方」の一つである旨が記載される。残る七例については、「勅」の主体が本文中に明記されず、中には「何之勅方不知歟」として、筆者がいずれの天皇の考案ないし所持した品であるか知らずにいた可能性に言及する例も見られる。

管見に、本書と他書の載録方との比較により実施した同類文探索結果は次の通りである。

- 1 玉椿方 7 (勅作方也) …【同類文】①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』玉椿方 131 (後白川右府新さく)、②専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』玉椿方 33 (中)
- 2 千種方 8 (勅作方) …【同類文】①高松宮本「たきものゝほう」千種方 21 (処方の由緒ナシ)、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』千種方 10 (処方の由緒ナシ)、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』千種方 85 (大和トジ)、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』千種方 137 (れうしやういんしんさく)、⑤宮内庁書陵部所蔵『薫物黒方秘方』千種方 8 (号龍翔院/故入道右府新作方也)
- 3 花橘方 9 (勅作方) …【同類文】①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』花橘方 14 (処方の由緒ナシ)、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』盧橘方 80 (墨流表紙半切)、③専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』花橘方 45 (中)
- 4 野風方 10 (勅作方) …【同類文】①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』花橘方 15 (処方の由緒ナシ)、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』野風方 95 (処

方の由緒ナシ)

- 5 落葉方 24 (占唐一朱代(二)の傍書に「二イ勅」) …【同類文】①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』落葉方 9 (処方の由緒ナシ)、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』落葉方 76 (大和トジ)、③上田流和風堂所蔵(無題・薫物書 01) 落葉方 5 (処方の由緒ナシ)、④上田流和風堂所蔵(無題・薫物書 02) 落葉方 5 (処方の由緒ナシ)、⑤宮内庁書陵部所蔵『薫物黒方秘方』落葉方 10 (冬)

- 6 黒方方 52 (勅方/四両/古本正親町院震筆(改行) 本 智仁親王筆/右朱点之分八条殿方也) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 58 (四両合/勅方、何之勅方不知也)

- 7 黒方方 58 (勅方、何之勅方不知歟) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 52 (勅方/四両(二四両合)/古本正親町院震筆(改行) 本 智仁親王筆/右朱点之分八条殿方也)

- 8 同(黒方)方 59 (同(勅方)) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 53 (二両合/古本正親町院震筆(改行) 本 智仁親王筆/右朱点之分八条殿方也)

右の 1 から 8 の薫物方の内、1 から 4 の四種類四点は、室町時代以降に発祥、傳來したと見られる「玉椿」、「千種」、「花橘(盧橘)」、「野風」という新作薫物の処方、5 から 8 の二種類四点は、平安時代以来の歴史を持つと見られる「落葉」、「黒方」という薫物の処方である。1 から 4 は処方の冒頭に「勅作方也」又は「勅作方」と記載される。5 の処方は由緒や來歴に関する記述を伴わないが、香具「占唐」の目方について対校された「イ」こと異本ないし異文の処方について「勅」との記述が見え、この異本ないし異文の処方が「勅」すなわち天皇にゆかりの品として傳來していたことが伺える。6 から 8 はいずれも本書に載録される薫物「黒方」の処方であり、処方の冒頭に「勅方」と記載される。7 には「勅方」に続けて「何之勅方不知歟」とも記述され、勅方ではあるが、いずれの天皇の勅方であるかは知らないのではないか、という、書写者による依拠資料の筆者に対する推測が書き添えられる。また、6 から 8 の処方の後文には「古本正親町院震筆(改行) 本 智仁親王筆/右朱点之分八条殿方也」とも記載され、もとは正親町院震筆と傳わる古本に載録された処方であり、本書の依拠資料はその写本であるところの智仁親王筆本であること、また、右肩に朱点の打たれたこれら三点を始めとする十二点の薫物方が、「八条殿」の処方として傳來したことが記述される。「八条殿」は智仁親王の呼称として書かれたものであろう。詳しくは、本稿 76 頁「智仁親王」項を参照されたい。

以上の諸方と他書の同類文の來歴からは、本書の「勅」を特定し得る事項は確認できていない。ただし、同類文の内、1 の「玉椿」方の同類文の一部は室町時代に合香家三条家の当主で

あつた後白川右府三条公冬の、2の「千種」方の同類文の一部はその後裔である龍翔院三条公敦の新作としても傳來していた。薫物諸書の傳承には、同家の四条朝以降の歴代当主が代々皇室の薫物の師範を務めたと傳わる<sup>〔金五四〕</sup>。また、同類文の一部を載録した薫物書を書写したと傳わる正親町天皇の父帝である後奈良天皇について、史實には、右記の龍翔院三条公敦一男轉法輪三条實香とその子息である後龍翔院公頼の二人に命じて薫物方を傳受していることが知られる（人名家名等解説及び索引64頁「實香公」）。以上の史實や傳承に鑑みて、「勅」と冠される処方の内、特に1と2の二種類二点の薫物方については、合香家三条家に発して室町時代後期までに皇室に傳來し、御所において傳來を重ねる中で、三条家発祥の薫物方との由緒が次第に失われて、「勅方」などとしてのみ知られるようになった可能性が考えられる。今後の調査では、1から8の各方の來歴の究明に向けて、引き続き取り組みたい考えである。

方・説 玉椿方7（勅作方也）、千種方8（勅作方）、花橘方9（勅作方）、野風方10（勅作方）、落葉方24（占唐一朱代（二）の傍書に「二イ勅」）、黒方方52（勅方）、黒方方58（勅方何の勅方不知歟）、同（黒方）方59（同（勅方））

**轉法輪** てんぽうりん  
テンポウリン 仏の教えを説くとの意味の仏語。轉じて三条家の本流の家名に用いられた。『薫物調合秘方』には「轉法輪方」、「轉法輪家方」として記述され、後者の用例には続

文として「實香公以自筆書寫之（實香公が自筆をもちて之を書写す）」とあり、轉法輪三条實香（人名家名等解説及び索引64頁）の名前が見えることから、合香家として著名な轉法輪三条家の略称と考えられる。

『薫物調合秘方』において「轉法輪」家の薫物方として載録されるのは、次の二点の処方である。

- 1 黒方方11（轉法輪家方實香公以自筆書寫之）…【同類文】①高松宮本『たきものゝほう』黒方方6（処方の由緒ナシ）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』黒方方24（勅筆巻物）、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』烏方（黒方の異名）113（家の方）、③専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』黒方方10（秘 勅作并三家）
- 2 新枕方45（勅内 轉法輪方也）…【同類文】①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』新枕方49（処方の由緒ナシ）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』新枕方8（処方の由緒ナシ）、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』新枕方82（大和トジ）、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』野風方135（処方の由緒ナシ）、⑤専修

大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』野風方105（処方の由緒ナシ）、⑥宮内庁書陵部所蔵『薫物黒方秘方』野風方11（大内／杉美作家方）、⑦上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書01〕野風方10（処方の由緒ナシ）、⑧上田流和風堂所蔵〔無題・薫物書02〕野風方10（処方の由緒ナシ）

1 「黒方」方11の同類文①から④の内、依拠資料「勅筆巻物」と併記される②については、載録先の『薫物秘藏抄』を類纂、書写した人物と見られる江戸時代前期の公卿菊亭（今出川）公規が当時の禁裏に進上した家傳の薫物書二点のうち、傳承筆者轉法輪實香の卷子本一点は、後水尾法皇（人名家名等解説及び索引61頁）が自ら書写して公規に下賜した宸翰に該当する可能性の高いことが考えられた。③の由緒「家の方」とは、同書においては公家の四辻家の処方を意味し、同家において代々相傳された品の一つであつた可能性がある。④の「秘 勅作并三家」を「秘（方）、勅作ならびに三（条）家」として補いながら読めば、勅作であり三条家、おそらくは轉法輪三条家にもゆかりの秘方としても傳來した処方と解釈できるのであり、天皇家と轉法輪三条家の双方に傳來したとされる点において、②の來歴とも重なる。『薫物調合秘方』原本が、確かに後水尾天皇宸筆の類纂であると仮定した場合、「黒方」方11が、菊亭公規の進上した傳承筆者轉法輪實香の卷子本を依拠資料として写し取られた可能性は検討を要す（以上は人名家名等解説及び索引64「實香公」解説による）。

2の「新枕」方45は新作薫物の処方であり、処方の冒頭に「勅内 轉法輪方也」との記述を伴う。記述の内容は東山御文庫所蔵の一本に同じである。「勅内」とは、「勅方」の由緒を伴い傳來する薫物方の内の一つであることを意味して記述されたものと解釈しておきたい。本方の同類文は同時代の類纂と見られる他書にも傳來するが、ここでは特定の家にゆかりの品である旨は併記されない。なお、新作薫物「新枕」については、合香家三条家にゆかりの品との傳承を伴う処方が薫物諸書に散見することから、この薫物そのものが同家において新たに考案された可能性を検討すべきかと考える。

本方については八点の同類文を確認しているが、それらの銘は「新枕」だけでなく新作「野風」としても傳わる。同類文の内①から③の三点は「新枕」方として傳來し、來歴については併記されない。残る④から⑧の同類文五点は、いずれも「野風」方として諸書に載録される。それらの大半は、「新枕」方として傳來する同類文に同じく、具体的な來歴を併記されずに傳來するが、合香家三条家において室町時代に類纂された薫物書の傳本に載録される同類文⑥については、処方の冒頭に「大内」及び「杉美作家方」との由緒を伴う。室町時代後期の轉法輪



三条家当主公敦については、周防国に下向して、守護の大内氏に薫物の秘方を相傳したとの傳承が知られている。同類文⑥についても「大内」氏に関わる品として傳來したとすれば、「杉美作家」については大内家に仕えた杉氏の一流に該当する可能性を検討すべきかと考える。

勸修寺家と轉法輪三条家の同族である三条西家とは、室町時代中期に婚姻による縁戚関係にあった。当時の三条西家当主である實隆は、若狭守護栗屋元隆の助力により青荳座本所の経営安堵を果たしているが、この元隆もまた勸修寺家の縁戚である。元隆は勸修寺尚頭女を妾に迎えて女子に恵まれ、この女子を尚頭孫の晴右室として嫁がせていた。元隆女は晴右との間に勸修寺家嗣子晴豊と陽光院后新上東門院晴子（人名家名等解説及び索引 69 頁）とをもうけた人物である。『薫物調合秘方』には、新上東門院が皇子の後陽成天皇（人名家名等解説及び索引 62 頁）から相傳したと傳わる薫物方や、同じく皇子の智仁親王に傳えたとされる薫物方が複数載録されるなど、当時の皇族を代表する合香家の一人であった可能性をうかがわせる傳承が記載される（以上は人名家名等解説及び索引 53 頁「勸」解説による）。

「轉法輪」ゆかりの品と傳わる薫物方の来歴からは、轉法輪三条實香自筆と傳わるものが、江戸時代前期に皇室を経由していた可能性とともに、同じ処方が皇室、三条家双方にゆかりの品として菊亭家にも傳來していた可能性を跡付けることができた。また、室町時代の轉法輪三条家が、若狭守護栗屋氏を介して、皇室の外戚として権勢に与った勸修寺家に対して薫物の秘方秘説を開示するに至った可能性も伺えた。これらの可能性については、今後の調査研究により検証、究明したい考えである。

方・説 黒方方 11（轉法輪家方實香公以自筆書寫之、新枕方 45（勸内 轉法輪方也）、説 8（轉法輪家ノ方也焼失云々）

轉法輪家 てんぽうりんけ／てんぽうりんい  
テンボウ（恐）ウリンケ／テンボウ ウリンイ ↓ 轉法輪

方・説 黒方方 11（轉法輪家方實香公以自筆書寫之、説 8（轉法輪家ノ方也焼失云々）

智仁 としひと ↓ 智仁親王

方・説 黒方方 48・遅桜方 49・仙人方 50（後奈良院以震筆令書寫者也（改行）慶長十五年十月廿七日 智仁（傍書「御自筆」）／右朱點之分ハ八条殿方也）、黒方方 54・55・56・57（元和元年十月七日女院御所（改行）御相傳御方可秘者也 智仁（傍書「本御自筆」）／右朱點之分ハ八条殿方也）

智仁親王 としひとしんおう  
トシヒトシンノウ 陽光院誠仁親王第六親王、正親町天皇（人名家名等解説及び索引 49 頁）養子、関白豊臣秀吉猶子。生母贈左大臣勸修寺晴右女新上東門院晴子（人名家名等解説及び索引 69 頁）。幼名胡佐麻呂。同母兄に後陽成天皇（人名家名等解説及び索引 62 頁）、大覚寺義性

法親王、曼珠院良恕法親王、聖護院興意法親王がある。天正七（一五七九）年正月八日誕生、号六宮。同十四（一五八六）年七月二十四日、九歳の時に父親王が薨去。二年後の同十六年に後陽成天皇による豊臣秀吉の聚楽第行幸に供奉して以降は、関白豊臣秀吉から篤く庇護されており、同十七年には秀吉から黄金二百枚を贈られている。秀吉に男子が誕生したのに際して八条宮を創立。同十八（一五九〇）年には二月十九日に八条宮御殿の造営が着工、九月十五日に三千石の御料所を献ぜられた他、十一月三日には白銀五十枚が贈られた。八条宮御殿が同年十二月二十三日に落成すると、親王は生母晴子とともにこれに遷徙している。翌年正月二十六日、十二歳で親王宣下を蒙り智仁と改名、二十九日に元服して式部卿に任ぜられた。

慶長五（一六〇〇）年三月十九日から四月二十七日の間に長岡玄旨こと細川幽齋より古今和歌集講釈を聴聞。七月二十九日には幽齋から古今傳授箱、古今集證明状、及び和歌を贈られたことはよく知られている。同六（一六〇二）年三月十五日叙一品。翌月二十三日には古今傳授の礼として徳川家康に物を贈っている。同年七月に幽齋の丹後田辺城が西軍に包囲されると、幽齋は禁裏に『源氏抄』及び二十一代集を献上。智仁兄弟の後陽成天皇は勅使を遣わして東西両軍に講和を呼びかけ、九月十二日にこれを實現せしめた。後年、親王は家康、秀忠が二条城に入城するごとに賀詞言上を重ねる等、徳川氏との友好関係の維持に努めている。寛永二（一六二五）年十一月九日には参内して後水尾天皇（人名家名等解説及び索引 61 頁）に古今和歌集講釈を授けて古今傳授を實施。同五年には後水尾天皇皇子を猶子に迎えている。

後水尾天皇と八条宮家との結び付きは智仁薨去後にも強いものとして維持されたらしく、承応三（一六五四）年には智仁御子の智忠が後水尾天皇皇子穩仁親王を養子に迎えて嗣子とし、八条宮家を継がせている。智仁は寛永六（一六二九）年四月ごろから腫物が悪化する等病を発症して四月七日に五十一歳で薨去。号桂光院。生前は八条宮、八条殿等と称した。

『薫物調合秘方』には、「智仁親王」、「智仁」として、陽光院皇子の智仁親王と同名の合香家が所持ないし書写したと傳わる四種類十 points の薫物方が記載される。これらを含む四種類十二 points の処方の由緒を示す目的から、書中には処方の右肩に朱筆の約物が記入され、これらの処方の最後尾には朱筆により「右朱點之分ハ八条殿方也」と記述される。「八条殿」は、近世の八

条宮家の祖である智仁親王、又はその皇子で嗣子の智忠親王に該当する可能性がある。「八条殿」の人物の特定については調査研究の進展を待ち慎重に検討すべきかと考えるが、調査の現時点において、智仁についてはゆかりの品と傳わる薫物方が複数確認できているのに対して、智忠については未確認である。以下の解説では、「八条殿」を智仁親王であると仮定して、四種類十点の処方の来歴について検討する。

「智仁」、「智仁親王」、及び「八条殿」の考案ないし所持したとの来歴を伴う薫物方は、次の四種類十二点である。

- 1 黒方方 48 (本 尊悟筆／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】①『薫集類抄』侍従方 40 (八条宮、不傳男子、承和仰事、滋野直子、云々)、②『薫集類抄』侍従方 56 (堀川右大臣)、③「焼物調合法」侍従方 10 (堀河右大臣)、④『薫物故事』侍従方 46 (処方の由緒ナシ)、⑤京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』侍従方 53 (勅筆巻物／右一方堀川右大臣 二条関白治暦四年四月六日)
- 2 遅桜方 49 (二両合／本云 後奈良院以震筆令書写者也 (改行) 慶長十五年十月廿七日 智仁(御自筆)／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】①本書・をそくら(遅桜)方 20 (伏方／寛文五十五日作テ調合)
- 3 仙人方 50 (二両合／合したひ候歟／本云 後奈良院以震筆令書写者也／慶長十五年十月廿七日 智仁(御自筆)／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』仙人方<sup>125</sup> (処方の由緒ナシ)、②本書・仙人方 43 (伏方)、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』仙人方 86 (大本／右妙莊嚴院御方)、④専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』仙人方 41 (三条流)
- 4 梅花方 51 (本 智仁親王御筆／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】(なし)
- 5 黒方方 52 (勅方／四両 (二両合)／古本正親町院震筆 (改行) 本 智仁親王筆 (方 53 識語)／右朱點之分八条殿方也 (方 59 識語) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 58 (四両合／勅方、何之勅方不知也)
- 6 二両合 (黒方) 方 53 (古本正親町院宸筆 (改行) 本 智仁親王筆／右朱點之分八条殿方也 (方 59 識語) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 59 (二両合／同 (黒方) 方)
- 7 黒方方 54 (元和元年十月七日女院御所 (改行) 御相傳御方可秘者也 智仁(傍書「本御自筆」)／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 64 (四両合／勅方、何之勅方不知也)

- 8 黒方方 55 (元和元年十月七日女院御所 (改行) 御相傳御方可秘者也 智仁(傍書「本御自筆」)／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】①『薫物調合秘方』同 (黒方) 方 65 (二両合／同 (勅) )

- 9 黒方方 56 (元和元年十月七日女院御所 (改行) 御相傳御方可秘者也 智仁(傍書「本御自筆」)／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 60 (三両合／新上東門院御相傳之御方)

- 10 黒方方 57 (元和元年十月七日女院御所 (改行) 御相傳御方可秘者也 智仁(傍書「本御自筆」)／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 61 (後／三両合／◎／新上東門院御相傳之御方)

- 11 くらほう (黒方) 方 58 (二両合／元和元年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也／右朱點之分八条殿方也 (方 59 識語) …【同類文】①『薫物調合秘方』同 (黒方) 方 62 (二両合／同御方 (新上東門院御相傳之御方) )

- 12 黒方方 59 (のち／元和元年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也／本御自筆 智仁／右朱點之分八条殿方也) …【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 63 (後／二両合／(新上東門院御相傳之御方) )

1 の「黒方」方 48 の詳細については、本解説の「尊悟」項 (72 頁) に記述しており参照されたい。本方は本書において「黒方」の銘により載録されるが、平安時代から江戸時代前期までの類纂と傳わる他書においては、「侍従」の銘により傳來する著名な処方であることが判明している。本方の依拠資料である「尊悟筆」の薫物書とは、こうした伝統的な処方を載録した秘傳書であったと考えられる。

2 の「遅桜」方 49 と 3 の「仙人」方 50 については、本解説の「後奈良院」項 (58 頁) に記述している。1 と 2 の処方はいずれも室町時代以降に考案されたと見られる新作薫物のそれであり、共に「二両合」こと沈二両を基準とした比率の目方で調合された処方と明記される。

新作薫物「遅桜」は、薫物書の傳承に、著名な合香家である轉法輪三条家 (人名家名等解説及び索引 75 頁) で調合された新作ではなく、駿河三条家の新作として傳わる薫物である。本解説の冒頭において述べた通り、処方 49 の由来については、本書の依拠資料と見られる「本」の中に、八条宮智仁親王が後奈良院の震筆を拝見しながら自筆で書写したものであり、書写は慶長十五 (一六一〇) 年十月二十七日であったと記載されたと云う。同類文たる同一の又は近似した処方としては、本書の「をそくら (遅桜)」方 20 のみを確認している。方 20 は冒頭に



「伏方」と併記され、「伏」の一字に略される合香家の考案ないし所持した品として傳來したことが分かる。また、「寛文五十五日作テ調査」との識語から、寛文五（一六六五）年五月十日に本書の書写者ないし依拠資料の筆者により調査された由が伺える。「伏」は伏見宮の略称であり、歴代当主で寛文五年以前に宮家を継承した人物と推定した（人名家名等解説及び索引 82頁「伏」）。

3の「仙人」方50は、後奈良朝には後奈良天皇に蒐集されて震筆の薫物書に類纂された他、同時代の皇族で天皇と親交のあつた妙莊嚴院こと伏見宮貞敦親王にも所持されていたと傳わっていた。江戸時代の皇室には、前者の処方とともに、伏見宮家の処方と称する同類文も傳來していたことから、後奈良朝から江戸時代前期の後水尾院政期に至るまで、禁裏と伏見宮家においてそれぞれに継承されていた可能性がある。また、同類文には三条流と傳わる処方も含まれていた。前述の通り、後奈良天皇は轉法輪三条實香（人名家名等解説及び索引 64頁）と公頼の父子から薫物相傳を受け、貞敦親王は實香女香子を室とし、公頼から薫物を贈られていたことから、当時の禁裏と伏見宮家に共有された「仙人」方が轉法輪三条家に由来するものであつた可能性は、検討に値する。

4の「梅花」方51は、原拠について「本 智仁親王御筆」と記載される処方であり、管見に、本書の他への載録は確認できていない。傳承の内容が正しければ、智仁親王が自筆で類纂ないし書写した薫物書に載録された処方であり、これ以前の古い薫物書には載録されない、新規に考案ないし工夫された処方であつたと考えられる。

5の「黒方」方52及び6の「黒方」方53の詳細については、本解説の「正親町院」項（49頁）に記述しており参照されたい。いまその概要を改めて示すと、これらの処方は目方の比率を変えた二点一組の処方として傳來した可能性が伺えた。二方と同類文の來歴にまつわる傳承が正しければ、正親町院宸翰とされる薫物書に類纂されて實の孫で養子でもある八条宮智仁親王に傳えられ、智仁親王の自筆により筆写され、智仁親王の処方として傳來し、本書の依拠資料の一つとされたことが伺えた。

7から12の六點の処方はいずれも薫物「黒方」の処方である。12の「黒方」方59の末尾には、「元和元年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也」、「本御自筆 智仁」と記載される。1から6の処方に同じく、処方の冒頭に記載された銘又はそれに代わる語句の右肩に朱筆による約物が記載される。「黒方」方54から方58までの処方については、処方の続文として來歴が記載されない。以上のことから、これらの六點は、依拠資料「智仁」御自筆の「本」からまとめ

て抄出され、依拠資料の順序のままに配置せられた可能性がある。その場合、これら七點の処方は、いずれも元和元（一六一五）年十月七日に「女院御所」（人名家名等解説及び索引 78頁）が相傳なされた秘すべき御方であり、「智仁」こと智仁親王が自筆で類纂ないし書写した薫物書に載録された薫物方の一部であつたと解釈できる。

元和元年にこれらの処方を相傳なさつたと云う「女院御所」は、智仁親王生母で陽光院誠仁親王後の新上東門院晴子が該当するが、元和元年云々の記述がこの年以降に記された可能性に鑑みて、元和六（一六二〇）年に院号を賜り女院と称せられた後陽成天皇后中和門院近衛前子もまた候補として挙げられよう。新上東門院ゆかりの薫物方は、本書以外の薫物書にも載録される。中和門院ゆかりの薫物方については管見に未確認であるが、近衛家の薫物関係資料や江戸時代の公家、武家で類纂されたと傳わる薫物諸書には、中和門院父の前久を始めとする近衛家歴代当主らにゆかりの品と傳わる薫物方が多数傳來することが分かっている。相傳の主は明記されないが、智仁親王自身であつた可能性を検討すべきかと考える。

さて、以上の十二點の薫物方の來歴が正しければ、智仁親王は本書に名前の記載された合香家の内、最も多くの処方を所持したと傳わる人物であり、室町時代以降の皇族の近親者である正親町天皇、後奈良天皇の震筆などとして皇室に傳來した貴重な薫物書を書写して薫物方を蒐集したり、自身の所持する薫物方を高位の後妃に相傳したりといった活動に取り組んだ可能性がある。また、本書の原本が確かに後水尾天皇震筆の秘傳書であつた場合、天皇は智仁親王自筆と傳わる複数の薫物書を何らかの手段により蒐集ないし参照し、そこから多数の薫物方を写し取って本書に類纂したことになる。後水尾天皇は智仁親王を師として古今傳授を果たす等、智仁親王と極めて近しく親密に交わつたことが知られている。智仁親王が、薫物の道においても後水尾天皇の師範の役割を果たした可能性は、検討に値する。

今後の調査においては、「尊悟」や「女院御所」といった智仁親王の薫物方の來歴に係る人物の特定、及び智仁親王の薫物方が本書に載録された経緯の解明に、引き続き取り組みたい考である。

方・説 黒方方48（本 尊悟筆／右朱點之分八条殿方也）、遅桜方49（一両合／本云 後奈良院以震筆令書写者也（改行）慶長十五年十月廿七日 智仁（御自筆）／右朱點之分八八条殿方也）、仙人方50（二両合／合したひ候歟／本云 後奈良院以震筆令書写者也／慶長十五年十月廿七日 智仁（御自筆）／右朱點之分八八条殿方也）、梅花方51（本智仁親王御筆／右朱點之分八八条殿方也）、黒方方52・53（古本正親町院震筆（改行）

本智仁親王御筆／右朱點之分八条殿方也、黒方方 54・55・56・57（元和元年十月七日女院御所（改行）御相傳御方可秘者也 智仁（傍書「本御自筆」）／右朱點之分八条殿方也、くろほう（黒方）方 58（二両合／右朱點之分八条殿方也（方 59 識語））、黒方方 59（のち／元和元年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也／本御自筆 智仁／右朱點之分八条殿方也）

## な行

### 女院御所 ニョインゴシヨ

『薫物調合秘方』載録の薫物「黒方」の処方（方 54 から 59）六点を、元和元年十月七日に相傳なさつたと云う人物。「女院御所」ゆかりの品として傳わる薫物方、及び他書に傳わるそれらの同類文は、次の通りである。

1 黒方方 54（元和元年十月七日女院御所（改行）御相傳御方可秘者也 智仁（傍書「本御自筆」）／右朱點之分八条殿方也）…【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 64（四両合／勅方、何之勅方不知也）

2 黒方方 55（元和元年十月七日女院御所（改行）御相傳御方可秘者也 智仁（傍書「本御自筆」）／右朱點之分八条殿方也）…【同類文】①『薫物調合秘方』同（黒方）方 65（二両合／同（勅））

3 黒方方 56（元和元年十月七日女院御所（改行）御相傳御方可秘者也 智仁（傍書「本御自筆」）／右朱點之分八条殿方也）…【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 60（三両合／新上東門院御相傳之御方）

4 黒方方 57（元和元年十月七日女院御所（改行）御相傳御方可秘者也 智仁（傍書「本御自筆」）／右朱點之分八条殿方也）…【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 61（後／三両合／◎／新上東門院御相傳之御方）

5 くろほう（黒方）方 58（二両合／元和元年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也／右朱點之分八条殿方也（方 59 識語））…【同類文】①『薫物調合秘方』同（黒方）方 62（二両合／同御方（新上東門院御相傳之御方））

6 黒方方 59（のち／元和元年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也／本御自筆 智仁／右朱點之分八条殿方也）…【同類文】①『薫物調合秘方』黒方方 63（後／二両合／（新上東門院御相傳之御方））

六点の処方はいずれも薫物「黒方」の処方である。6 の「黒方」方 59 の末尾には、「元和元

年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也」、「本御自筆 智仁」と記載される。1 から 6 の処方に同じく、処方の冒頭に記載された銘又はそれに代わる語句の右肩に朱筆による約物が記載される。「黒方」方 54 から方 58 までの処方については、処方の続文として来歴が記載されない。以上のことから、これらの六点は、依拠資料「智仁」御自筆の「本」からまとめて抄出され、依拠資料の順序のままに配置せられた可能性はある。その場合、これら六点の処方は、いずれも元和元（一六一五）年十月七日に「女院御所」が相傳なさつた秘すべき御方であり、「智仁」こと八条殿智仁親王（人名家名等解説及び索引 76 頁）が自筆で類纂ないし書写した薫物書に載録された薫物方の一部であつたと解釈できる。

元和元年当時の「女院御所」には、智仁親王生母で陽光院誠仁親王後の新上東門院晴子（人名家名等解説及び索引 69 頁）が該当するが、元和元年云々の記述がこの年以降に記された可能性に鑑みて、元和六（一六二〇）年に院号を賜り女院と称せられた後陽成天皇（人名家名等解説及び索引 62 頁）后中和門院近衛前子もまた候補として挙げられよう。新上東門院ゆかりの薫物方は、本書以外の薫物書にも載録される。中和門院ゆかりの薫物方については管見に未確認であるが、近衛家の薫物関係資料や江戸時代の公家、武家で類纂されたと傳わる薫物諸書には、中和門院父の前久を始めとする近衛家歴代当主らにゆかりの品と傳わる薫物方が多数傳來することが分かっている。相傳の主は明記されないが、智仁親王自身であつた可能性を検討すべきかと考える。

方・説 黒方方 54・55・56・57・58・59（元和元年十月七日女院御所御相傳御方可秘者也／本御自筆 智仁／右朱點之分八条殿方也）

### 仁 にん

陽明文庫所蔵『薫物調合秘方』載録の薫物「梅花」方 70 の由緒として記載された語。この処方を考案ないし所持した人物又は家の略称と考えられる。東山御文庫所蔵の一本では、書中に挿入されて傳來する紙面（挿紙 A）において、冒頭から数えて第十番目の処方として記載されることから、この一本を翻刻掲載した既出の拙稿においては、本方の通番を「挿紙 A 方 10」としている。

他書に傳わる「梅花」方 70 の同類文は次の①から③の三点である。

1 「梅花」方 70（仁方）…【同類文】①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物方』梅花方 2（これは匂ひあさくとしてさかりにかうはしく候をほんと合候）、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』梅花方 5（大和トジ）、③専修大学図書館菊亭文庫所

蔵『万方』梅花方46（由緒ナシ）

右の三点の同類文は、いずれも江戸時代以来の菊亭（今出川）家に傳來したと見られる品々である。①の依拠資料「薫物方」は天正十七年二月十五日付けによる書写者識語を跋文として傳えるもので、室町時代の足利將軍家ゆかりの人物が考案したと傳わる薫物方を載録するなど、戦国時代以前の合香文化を伺う上で重視すべき資料と考えられる。「梅花」方2の冒頭には、本方の芳香の特徴ないし調合の目安としてであろう、「これは匂ひあさくとしてさかりにかうはしく候をほんと合候」、この処方はいのちの大変浅くて（梅の）盛りの時期を思わせる程に香ばしくある状態を手本として調合するのである、との一文が、銘「梅花」の下に記載される。②の同類文の依拠資料は江戸時代前期の菊亭家当主公規が類纂したと見られる薫物書の一つで、「大和トジ」の装訂により類纂者の手許に蒐集された可能性はある。③の同類文もまた菊亭公規の類纂と推定できる。処方の際には明記されないが、②と同じである可能性が考えられる。以上の分析から、調査の現状において、本方は皇室の他に限られた公家のみ知られており、遅くとも戦国時代前後の時期に考案ないし工夫されて後世に傳來した可能性を伺うべきかと考える。

上述の拙稿において、「仁」は「御室」の略称ともども、御室仁和寺又は同寺の宮門跡を意味する略称と推定していた。また、御室仁和寺宮門跡で合香家の家系に生まれた任助入道親王については、「仁」及び「御室」に該当する可能性が高いものと指摘していた。後述するが、『薫物調合秘方』以外の薫物諸書に載録される「仁」方の同類文には、右の推定の検証を可能にするような傳承等は確認できていない。また、稿者の最近の調査では、武雄鍋島家に傳來した薫物書において、任助と同時代に宮門跡として御室仁和寺を統べた「御室御所守理親王」が常に調合なさったと云う新作薫物「春日野」方一点を確認している（人名家名等解説及び索引50頁「御室」）。

「梅花」方70の發祥と傳來については、「仁」の略称による合香家も含めて、今後の調査において引き続き究明に取り組みたい考えである。

方・説 梅花方70（仁方）

は行

八条殿はちじょうどの → 智仁親王ちじんしんおう

方・説 黒方方48・遅桜方49・仙人方50・梅花方51・黒方方52・53・54・55・56・

57（右朱點之分ハ八条殿方也）

東ひんかしあつまつたう  
ヒンガシアツマノトウ

『薫物調合秘方』において「東方之内」及び「東（同）方」として記載のある、薫物「梅花」、「荷葉」、「侍従」及び新作薫物「若草」の処方計十一点を考案ないし所持したと傳わる人物等の略称。「東」ゆかりの品として傳わる薫物方、及び他書に傳わるそれらの同類文は、次の通りである。

- 1 若草方22（近衛殿御方 東方之内）…【同類文】（なし）
- 2 荷葉方26（東方）…【同類文】①徳川林政史研究所蔵『薫物之方』荷葉方122（処方の由緒ナシ）
- 3 荷葉方27（同（東）方）…【同類文】①徳川林政史研究所蔵『薫物之方』荷葉方25（処方の由緒ナシ）
- 4 荷葉方28（同（東方））…【同類文】①徳川林政史研究所蔵『薫物之方』荷葉方27（処方の由緒ナシ）
- 5 侍従方33（東方）…【同類文】①高松宮本『薫物ノコト』侍従方4（薫物…後水尾御方玉垣局書写）、②徳川林政史研究所蔵『薫物之方』侍従方7（是はこゝろより外にちらさぬ方也）
- 6 侍従方34（同（東方））…【同類文】①徳川林政史研究所蔵『薫物之方』侍従方10（処方の由緒ナシ）
- 7 侍従方35（せうしやうのしゝうの方 同（東方））…【同類文】①『薫集類抄』黒方方61（賀陽宮）、②『薫集類抄』黒方方62（滋宰相、小一条皇后、公任卿、小一条院、入道一品宮女房陸奥、参議師成）、③『薫集類抄』黒方方66（八条宮、至要方、滋野直子、云々）、④『薫集類抄』黒方方76（四条宮、云々）、⑤『薫集類抄』黒方方79（藤原保昌）、⑥『薫集類抄』黒方方82（二条関白）、⑦「焼物調合法」黒方方15（四条宮）、⑧「焼物調合法」黒方方17（八条宮…或云至要方也延喜六年二月三日典侍滋野直子朝臣所献也）、⑨宮内庁書陵部所蔵「薫物方」黒方方4（平等院）、⑩宮内庁書陵部所蔵「薫物方」黒方方33（延喜六年二月三日滋内侍のすけのたてまつれるといふ）、⑪『類聚雜要抄』鳥方（黒方）方6（皇后宮御方…但八条式部卿宮方同之）、⑫『薫物故書』黒方方4（四条宮…保昌同之）、⑬『薫物故書』黒方方10（他家）、⑭高松宮本「たきものゝほう」黒方方3（処方の由緒ナシ）、⑮徳川林政史研究所蔵『薫物之方』黒方方21（処方の由緒ナシ）、⑯徳川林政

史研究所所蔵『薫物之方』黒方方29（ちよくやう光源院）、⑰徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』黒方方42（勅方）、⑱徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』黒方方67（処方の由緒ナシ）、⑲京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』黒方方17（大本勅筆…八条式部卿官方承和秘方）、⑳京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』黒方方32（半切墨流）、㉑京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』黒方方41（大和トジ半切）、㉒京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』くろ方（黒方）半さい方100（公任卿方…寛文八年十一月十一日後徳大寺左府書借写之了秘方也）、㉓京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』又（黒方）方110（四季通用祝言之時も用之）、㉔杏雨書屋所蔵『薫物之方』黒方方1（後陽成院様勅方）

8 侍従の方36（同（東方））…【同類文】①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』侍従方124（処方の由緒ナシ）

9 侍従方37（同（東方））…【同類文】（なし）

10 梅花方71（東方）…【同類文】①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』梅花方9（処方の由緒ナシ）、②徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』梅花方121（処方の由緒ナシ）

11 梅花方72（同（東）方）…【同類文】①徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』黒方方41（処方の由緒ナシ）

1の新作薫物「若草」方22は、書中に由緒として「近衛殿御方 東方之内」と記される品である。「近衛殿」（人名家名等解説及び索引60頁）は公家の近衛家出身の貴人である。本方はこの人物の考案ないし所持した「御方」として傳來すると同時に、「東方之内」、すなわち「東方」として傳來する複数の薫物方の一つとしても傳來したことが理解できる。他書への載録については現時点では確認できず、探索中である。なお、本方は「東方」と傳わるものの内で唯一の新作であり、『薫物調合秘方』以前の薫物諸書に同類文を確認できないことから、江戸時代前期の特定の家において新規に考案され、以降は秘蔵の品として他家に開示されなかった可能性が伺える。

2から4は薫物「荷葉」方であり、『薫物調合秘方』においては処方の26番から28番として連続して記載される。由緒について、方26には「東方」と、方27・28には「同方」と併記されており、同じ由緒を伴う一連の処方として傳來したことが分かる。同類文は、三点ともに徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』において一点ずつ確認できるが、由緒についてはいずれも併記されていない。

5から9が薫物「侍従」方であり、『薫物調合秘方』においては処方の33番から37番として連続して記載される。由緒については2から4に同じく「東方」及び「同（東方）」と記載され、同じ由緒を伴う一連の処方として載録されるが、同類文の来歴は多様である。なお、同類文は五点ともに徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』において一点ずつ確認することができる。

5の「侍従」方33は高松宮本『薫物ノコト』及び前出の徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』にも載録される。前者の同類文には「後水尾御方玉垣局書写」と併記され、後水尾天皇（人名家名等解説及び索引61頁）の御方であり、依拠資料は玉垣局の書写による薫物方の記であった由が傳わる。玉垣局の人物は不明であるが、本方が確かに後水尾御方であるとすれば、靈元院後宮で大乗院門跡尊胤法親王生母の玉垣局などを人物の候補として検討すべきであろう。後者の同類文には「是はこゝろより外にちらさぬ方也」、これはこれを所有する者の心から外に散らさない処方である、と記載され、秘蔵すべき重要な処方である旨がしたためられる。

6と8の「侍従」方34・36は徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』のみに同類文各一点を確認することができる。いずれの同類文にも処方の由緒は併記されていない。

7の「侍従」方35については、平安時代後期の類纂と傳わる『薫集類抄』から江戸時代の類纂と見られる徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』までの薫物諸書において、二十四点の同類文を確認することができるが、いずれも薫物「黒方」方として傳來する。これらは『薫集類抄』において滋野貞主、仁明皇子八条式部卿本康親王、滋野直子、花山院皇后四条宮藤原遵子、藤原公任、藤原保昌ら多数の合香家に所持されたと傳わる有名な処方である。室町時代の類纂と傳わる『薫物故書』以降の薫物諸書においては、こうした従来の傳承を伴う場合に加えて、「ちよくやう（勅様）」、室町時代以降の人物と見られる「光源院」、及び「後陽成院様」（人名家名等解説及び索引62頁）にゆかりの品としても傳來し始めるところに特徴が伺える。なお、同類文の内三点は、徳川林政史研究所所蔵『薫物之方』において確認することができる。

9の「侍従」方37については、現時点で他書への載録を確認することができず、探索中である。

東山御文庫所蔵の一本を翻刻、解題した既出の拙稿においては、書中に「東」の字を含む合香家として「新上東門院」（人名家名等解説及び索引69頁）のあらわれることに鑑みて、新上東門院勧修寺晴子の略称と推定していた（註五）。しかしながら、以上で述べてきた通り、十一點の処方の他書における傳來状況を確認したところ、内九点については尾張徳川家傳來の薫物書に載録されて傳わる事が判明した。今後の調査研究においては、「東（あつま）」、「東国（江

戸」又は「東福門院」を略してのように称した可能性を検討すべきかと考える。

方・説 若草方 22 (近衛殿御方 東方之内)、同(荷葉) 方 26 (東方)、同(荷葉) 方 27 (同(東)方)、同(荷葉) 方 28 (同(東)方)、侍従方 33 (東方)、侍従方 34 (同(東)方)、しゅう(侍従)の方 35 (せうしやうのしゅうの方 同(東)方)、しゅう(侍従)の方 36 (同(東)方)、同(侍従)の方 37 (同(東)方)、梅花方 71 (東方)、梅花方 72 (同(東)方) \*以上、処方の通番は本稿掲載の陽明文庫本翻刻による。

## 伏 ふし／ふせ

『薰物調合秘方』において「伏方」及び「伏」として記載のある、薰物「梅花」、「荷葉」、「菊花」、「落葉」、及び新作薰物「をそさくら(遅桜)」、「千年菊」、「若草」、「仙人」の処方計十三点を考案ないし所持したと傳わる人物等の略称。「伏」ゆかりの品として傳わる薰物方、及び他書に傳わるそれらの同類文は、次の通りである。

- 1 をそさくら(遅桜) 方 20 (伏方／寛文五十五日作テ調合) …【同類文】①『薰物調合秘方』梅花方 51 (二両合／本 智仁親王御筆／右朱点之分八条殿方也)
- 2 千年菊方 21 (秘傳方也可秘々々／伏方／同日(寛文五十五日)調合) …【同類文】(なし)
- 3 若草方 23 (伏方／同日(寛文五十五日)調合此夜薰ヲ二分入之合損也但匂ヒ無別儀歟 …【同類文】①宮内庁書陵部所蔵後西天皇宸翰『薰方之書』若草方 5 (処方の由緒ナシ)、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』若草方 92 (中納言宗種卿秘方也、云々)、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』若草方 132 (同(後白川右府新さく)、④専修大学菊亭文庫所蔵『万方』若草方 24 (宗種方)、⑤陽明文庫所蔵『薰物調合要書』若草方 3 (処方の由緒ナシ)

- 4 落葉方 24 (伏方 寛文五々十八調合) …【同類文】①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物方』落葉方 9 (処方の由緒ナシ)、②京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』落葉方 76 (大和トジ)、③上田流和風堂所蔵〔無題・薰物書〇〇〕落葉方 5 (処方の由緒ナシ)、④上田流和風堂所蔵〔無題・薰物書〇〇〕落葉方 5 (処方の由緒ナシ)、⑤宮内庁書陵部所蔵『薰物黒方秘方』落葉方 10 (冬)

- 5 同(荷葉) 方 29 (伏方) …【同類文】(なし)

- 6 菊花方 40 (伏方 寛文五々十八調合) …【同類文】(なし)

- 7 同(菊花) 方 41 (同(伏方)／勅方同之但麿一分ト云々) …【同類文】①京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』菊花方 64 (勅筆卷物)、②京都大学附属図書館菊亭文

庫所蔵『薰物秘藏抄』千種方 83 (大本／三条家秘本)

- 8 仙人方 43 (伏方) …【同類文】①徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』仙人方 125 (処方の由緒ナシ)、②『薰物調合秘方』黒方 52 (勅方／四両(四両合)／古本正親町院震筆(改行)本 智仁親王筆／右朱点之分八条殿方也)、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』仙人方 86 (大本／右妙莊嚴院御方)、④京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『万方』仙人方 41 (三条流)

- 9 梅花方 65 (伏 五方) …【同類文】①『薰集類抄』侍従方 48 (八条宮、不傳男子、承和仰事、滋野直子、云々)、②『香秘書』又(補闕) 方 31 (右六(ママ)方は藏人所小舎人大和常生之秘方也、件常生延喜聖代與公忠朝臣同時相並奉合之役)、③『類聚雜要抄』又(補闕) 方 16 (右六(ママ)方者。是藏人所小舎人大和常生之秘方也、云々)、④『薰物故事』侍従方 32 (常生)、⑤『薰物故事』梅花方 47 (先帝)、⑥『薰物調合秘方』同(梅花)方 62 (勅 三方／寛文六三廿四作調合)、⑦『薰物調合秘方』又(梅花)方 69 (伏 五方／先帝方)、⑧高松宮本「たきものゝほう」梅花方 7 (梅の花を入事口傳 春もちあ候)、

- ⑨京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』梅花方 2 (大本／三条家秘本)、⑩京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』梅花方 7 (勅筆卷物)、⑪京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』梅花方 10 (勅筆卷物／右三色三家秘方也、云々)、⑫京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』梅花方 114 (処方の由緒ナシ)、⑬宮内庁書陵部所蔵『薰物黒方秘方』梅花方 2 (春)、⑭上田流和風堂所蔵〔無題・薰物書〇〇〕梅花方 2 (春用之)、⑮上田流和風堂所蔵〔無題・薰物書〇〇〕梅花方 2 (春用之)

- 10 梅花方 66 (伏 五方) …【同類文】①高松宮本「たきものゝほう」梅花方 8 (処方の由緒ナシ)、②『薰物調合秘方』梅花方 63 (勅／三方／寛文六三廿四作調合)、③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』梅花方 3 (半切／黒(墨)流表紙)

- 11 梅花方 67 (伏 五方) …【同類文】(なし)

- 12 梅花方 68 (伏 五方) …【同類文】(なし)

- 13 又(梅花) 方 69 (伏 五方／先帝方) …【同類文】①『薰集類抄』侍従方 48 (八条宮、

不傳男子、承和仰事、滋野直子、云々)、②『香秘書』又(補闕) 方 31 (八条宮、不傳男子、承和仰事、滋野直子、云々)、③『類聚雜要抄』又(補闕) 方 16 (右六(ママ)方者。是藏人所小舎人大和常生之秘方也、云々)、④『薰物故事』侍従方 32 (常生)、⑤『薰物故事』梅花方 47 (先帝)、⑥『薰物調合秘方』同(梅花) 方 62 (勅 三方／寛文六三廿四

作調合)、⑦『薰物調合秘方』同(梅花)方65(伏 五方)、⑧高松宮本「たきものゝほう」梅花方7(梅の花を人事口傳 春もちゐ候)、⑨京都大学附属図書館菊亭文庫所藏『薰物秘藏抄』梅花方2(大本／三条家秘本)、⑩京都大学附属図書館菊亭文庫所藏『薰物秘藏抄』梅花方7(勅筆卷物)、⑪京都大学附属図書館菊亭文庫所藏『薰物秘藏抄』梅花方10(勅筆卷物／右三色三家秘方也、云々)、⑫京都大学附属図書館菊亭文庫所藏『薰物秘藏抄』梅花方114(処方の由緒ナシ)、⑬宮内庁書陵部所藏『薰物黒方秘方』梅花方2(春)、⑭上田流和風堂所藏〔無題・薰物書〇〕梅花方2(春用之)、⑮上田流和風堂所藏〔無題・薰物書〇〕梅花方2(春用之)

\*以上、『薰物調合秘方』載録方の通番は、陽明文庫本を底本とした本稿掲載の翻刻における通番による。

以上に挙げた十三点の「伏」方は、処方の直前に置かれる銘の下等における記述の内容及び有無により、次の(一)から(四)として分類することができる。

(一) 寛文五(一六六五)年五月十日調合と傳わる処方三点(をそさくら(遅桜)方20、千年菊方21、若草方23)

(二) 寛文五年五月十八日調合の傳わる、或いはその可能性のある処方、計三点(落葉方24、菊花方40、同(菊花)方41)

(三) 「伏方」と云う他に詳細の併記されない処方二点(同(荷葉)方29、仙人方43)

(四) 冒頭に「伏 五方」と表記され連続して載録される処方五点(同(梅花)方65、又(梅花)方66、又(梅花)方67、又(梅花)方68、又(梅花)方69)

以下の解説では、右の(一)から(四)の順に、それぞれに分類した処方について考察する。

(一)に分類した処方三点は「寛文五十五日」、寛文五年五月十日に「作テ調合」又は「調合されたと傳わる品であり、種類はいずれも室町時代に新たに考案されたと考えられる、いわゆる新作薰物のそれである。三点目の「若草」方23には、処方の由緒及び調合の期日に加えて「此夜薰ヲ二分入之合損也但匂ヒ無別儀歟」とあり、それによると、寛文五年五月十日の夜に香具の内「薰(陸)」を、処方に一分とあるところ二倍の二分を入れてしまい、調合し損なってしまったこと、しかしながら、匂いには特に問題とすべき点の無いように思われたことが併記される。

それぞれの処方の、本書と他書における傳來の有無及び同類文の來歴を確認したところ、まず「遅桜」方20については、本書に「智仁親王御筆」及び「八条殿方」の由緒を伴い載録され

る薰物「梅花」方51のみと近似することが判明した。薰物の銘や時代性は異なるが、いずれも四季の内春によそえて考案、工夫されたと見られる種類である。また、同類文の「梅花」方は、種類としては古くから行われるが、処方は戦国時代の合香家が自筆で記したと傳わる品であり、管見に、現時点ではこれより古い同類文を確認できていない。以上のことから、「伏方」の一つと傳わる「遅桜」方24は、傳來の過程において「梅花」方51と何等かの影響関係にあった可能性を検討すべきかと考える。

(二)に分類した処方三点は、(一)の調合された八日後の「寛文五々十八」、寛文五年五月十八日に「調合」されたと記載されるか、そのように推定できる品々である。「落葉」方24及び「菊花」方40には銘と由緒「伏方」に続けてこの期日に調合された旨が明記される。「菊花」方40には銘と由緒について「同<sup>同</sup>」と記載されるのみであるが、前文の「菊花」方に「寛文五々十八調合」とあるところを「同」として省略したと解釈できることから、(二)に含めて分類した次第である。これら三点の処方については、(一)の「若草」方23の場合のように、調合時の特別な経験や気づきに関する記述は併記されないが、本文によれば、同じ期日に「御室方」として傳來する薰物「荷葉」方25も調合されたと云う(人名家名等解説及び索引50頁「御室」参照)。

この「御室方」も含めて、寛文五年五月十八日に調合されたと傳わる処方は、いずれも平安時代に遡る伝統的な種類の薰物ばかりである。このことは、この八日前に調合されたと云う(一)の三点が、いずれも新作薰物方であったことに対して特徴的である。傳承の内容が確かであれば、少なくとも二度、二日にわたり行われた薰物調合は、期日ごとに調合する種類の時代性を区別して行われた可能性があり、催しとしての企画や趣向の在り方を伺う上で暗示的な内容の傳承と言えるかもしれない。

(三)に分類した処方二点の内、薰物「荷葉」方29は他書に同類文の傳來しない品である。從來の処方をもとにして、目方の比率と細部に加減を加えながら、江戸時代前期までに考案された可能性を検討すべきかと考える。

残る新作薰物「仙人」方43は、公武に傳來した比較的規模の大きな類纂二点にも確認できる他、同じ『薰物調合秘方』においては「黒方」方として傳來する四兩合の勅方とも一致している。同類文①徳川林政史研究所所藏『薰物之方』載録の新作薰物「仙人」方125には処方の來歴が併記されない。同類文②『薰物調合秘方』載録の「黒方」方52は、「古本正親町院震筆(改行)本 智仁親王筆」との由緒を伴う他、銘の右肩に朱点の約物も記載されることから、書中

の後文に「右朱点之分八条殿方也」とされる処方群の一つであることが分かる（人名家名等解説及び索引49頁「正親町院」、同76頁「智仁親王」）。同類文③京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』の新作薫物「仙人」方86は、依拠資料を「大本」と云い、由緒については「妙莊殿院御方」と傳わる品である。同類文④は、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『万方』に新作薫物「仙人」方41として載録されるが、同書においては「三条流」こと合香家三条家に由来する品として併記される。

既出の拙稿においては、「妙莊殿院」が伏見宮貞敦親王に該当する可能性について考察したことがあった（註五五）。貞敦親王は、同類文②を自筆で書写、蒐集したと傳わる智仁親王や、同類文④の「三条流」にかかわる三条家の本流轉法輪家の縁者である。智仁親王とは同時代の皇族同土として親交のあったことが、史實上の動静に知られる。轉法輪三条家については、後奈良天皇への薫物方の傳授を拝命するなど、合香家として功績を遺した轉法輪三条實香の子女を室に迎えており、實香嗣子の公頼とは薫物の贈答も交わしていた。

（四）に分類した処方五点は、東山御文庫所蔵の一本には巻末近くの紙面に傳來する挿紙一葉に、複数の來歴を伴う処方群の一部として、連続して記載されるものである。種類はいずれも薫物「梅花」方であるが、「伏」方の内第一番目に記載される「梅花」方65、及び第五番目に記載される「梅花」方69は、後者が「先帝」ゆかりの品と併記されることを除いて、同じ香具と目方による処方である。また、その内容は、平安時代から室町時代までの類纂と傳わる薫物諸書に薫物「侍従」又はその異名とされる薫物「補闕」の処方の内容に一致することが分かっている。

「先帝」の語は、同類文の内「侍従」又は「補闕」の銘で傳來する古い時代の処方には見当たらず、同類文⑤『薫物故書』梅花方47のみに確認することができる。ただし、銘の異なる古い時代の処方内、①と②には「承和仰事」とあり、平安時代前期の天皇である仁明天皇の「不傳男子」なる御禁制を伴い傳來したことが併記されており、この天皇の考案ないし所持した品であることが知られている。「先帝」が仁明天皇に該当するか否かの問題については、本方の銘が「侍従」又は「補闕」から「梅花」に変化した経緯も含めて検討したい考えである。

ところで、既出の拙稿において、本書の「伏」については、「伏見殿」こと伏見宮の略称と推定した上で書誌に関する小考を加えたことがあった（註五七）。今そこでの報告を改めて引用すると、稿者の調査においては、「伏見殿」ゆかりの品と傳わる次の三点の新作薫物方を確認しており、処方の内容は、いずれも右の十三点に似ないことが分かっている。

1 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』仙人方118（伏見殿方）【同類文】…上田流和風堂所蔵（無題・薫物書）仙人方58（伏見殿）

2 専修大学図書館菊亭文庫所蔵『香具撰様調様』有明方1（伏見殿ヨリ相傳）【同類文】…専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』有明方116（伏見殿相傳）

3 杏雨書屋乾々斎文庫所蔵『薫物之方』千年菊方4（伏見殿方）【同類文】…（なし）

右の1から3はいずれも新作薫物の処方であり、室町時代以降に考案されたと見られる。1と3は「伏見殿方」と、2は「伏見殿ヨリ相傳」の方と傳わる。

以上の記述や条件から「伏見殿」を特定するのは困難である。ただし、『薫物秘蔵抄』には伏見宮第六代貞敦親王と思しき「妙莊殿院」ゆかりと傳わる処方が載録されとともに、右の三点の内二点については、銘を同じくする薫物方が、十三点の「伏」方にも含まれていた。江戸時代前期の皇室において、伏見宮家ゆかりの品との由緒を伴う薫物方が少なからず傳來し、当時を代表する合香家による名方として珍重された可能性は、検討に値する。

また、「伏」の人物又は家の特定を目指すにあたり、十三点の内「仙人」方及び「千年菊」方の二点については、「伏見殿」ゆかりの品と傳わる処方の異傳であった可能性も視野に入れて検討を加える必要がある。更に、傳來のいずれかの時点において、「仙人」方43は銘を「黒方」から、「梅花」方65・69は銘を「侍従」又は「補闕」から改めて継承されたのか、それとも偶然に、平安時代の著名な合香家にゆかりの品と傳わる「黒方」方、及び「侍従」又は「補闕」の処方と一致する目方により考案された品であったのか、或いは、こうした古い時代の秘方秘説には直接依拠しておらず、室町時代の類纂と傳わる薫物書に依拠しており、この依拠資料においては、銘が既に「仙人」及び「梅花」に改められていたのかという問題点も残る。前述の通り、「梅花」方65と「梅花」方69とは同一の処方でありながら、後者のみが「先帝」ゆかりの品である旨が併記される。この文言は平安後期に類纂されたと云う秘傳書のテキストには確認できない一方で、室町時代に類纂されたと云う秘傳書の同類文には確認できる。一方で、「侍従」又は「補闕」の銘で傳わる古い時代の同類文には、平安時代前期の仁明天皇が考案ないし所持したと傳わるものが含まれていた。

今後の調査研究においては、「伏」と略称される人物又は家の特定という課題も含めて、新出資料の調査による同類文の探索、及びそれらの來歴の分析及び解明を目指したい考えである。

方・説 をそさくら方20（伏方／寛文五十五日）調合、千年菊方21（秘傳方也可秘々々／伏方／同日（寛文五十五日）調合、若草方23（伏方／同日（寛文五十五日）調合此

夜薫ヲ二分人之合損也但匂ヒ無別儀歟、落葉方24(伏方 寛文五々十八調合)、同(荷葉 方29(伏方)、菊花方40(伏方 寛文五々十八調合)、同(菊花)方41(伏方)、仙人方43(伏方)、梅花方65・66・67・68・69(伏 五方) \*以上、載録方の通番は、陽明文庫所蔵の一本を底本とした本稿掲載の翻刻における通番による。

## ま行

### 基熙 もとひろ

関白太政大臣従一位近衛基熙。妙有真空院関白尚嗣男。母家女房。慶安元(一六四八)年三月六日誕生。承応三(一六五四)年十二月二十四日元服。同日正五位下に叙され、禁色・雑袍による昇殿の勅許を賜り、左少将に補された。翌四(明暦元、一六五五)年正月五日従四位上。同年十月一日左中将。同年六月二十五日、正四位上と下を越階して従三位に叙される。明暦二(一六五六)年十一月七日、中将に権中納言を兼ねる。万治元(一六五八)年閏十二月二十二日権大納言。翌二(一六五九)年正月五日正三位。同四(寛文元、一六六一)年正月五日従二位。寛文二(一六六二)年十二月二十四日正二位。翌三(一六六三)年正月十三日奏慶着陣。同四(一六六四)年十二月二十三日、後水尾天皇(人名家名等解説及び索引61頁)皇女常子内親王(人名家名等解説及び索引65頁「品」)降嫁。同五(一六六五)年六月一日内大臣。右近衛大将元の如し。同八(一六六八)年十二月二十八日、左近衛大将に轉任して内大臣にこれを兼ねる。同九(一六六九)年正月七日着陣。同年三月二十九日、翌十(一六七〇)年六月九日、九月二十四日、十月十六日、十一月四日、同十一(一六七二)年三月十一日、同十二(一六七二)年十月十八日に、後水尾法皇による基熙第への御幸が行われた。この間の同十一(一六七二)年五月二十五日には右大臣には任ぜられ、左近衛大将を兼任した。同年十二月二十一日奏慶。延宝元(一六七三)年五月八日には洛中で大火が発生。禁裏・仙洞ともに焼失し、靈元天皇は基熙第に遷御。十一日以後はこれを仮皇居とした。後水尾法皇による基熙第への御幸は同年十二月十日より再び頻繁となり、翌二(一六七四)年七月二十九日、同三(一六七五)年四月五日、同四(一六七六)年十二月二十一日、同五(一六七七)年十一月十一日、同六(一六七八)年四月二十八日、同年十一月十六日に行われた他、この間の同三(一六七五)年八月九日には皇女で基熙室の常子内親王第への御幸も賜っている。その一方で、同年九月十九日に右大臣に兼任していた左近衛大将を辞し、内大臣右近衛大将一条内房がこれを兼任。同五(一六七七)年十二月二十四日には左大臣に任ぜられた。延宝七(一六七九)年六月二十六日、徳川豊綱(後の江戸幕府第六代將軍家宣)が基熙女熙子を娶り、靈元天皇女一宮憲子内親

王が基熙男権大納言家熙の室に降嫁することが定められる。同年八月一日、後西上皇(人名家名等解説及び索引66頁「新院」)の勅により賀茂社に奉納する歌仙三十六枚の書作を拝命。同年十一月十八日、江戸に下向する熙子に対して、靈元天皇より机、三代集の写本、白銀等を、後水尾法皇より『源氏物語』『三十六人家集』等の写本を、後西上皇より『うつほ物語』の写本と白銀等を給う。熙子は同月二十六日に都を出立。翌八(一六八〇)年一月二十七日、熙子を娶った甲府城主徳川綱豊(後の家宣)が家臣を禁裏に遣わして物を献じている。貞享三(一六八六)年五月十一日従一位。元禄三(一六九〇)年一月十三日関白。同日氏長者。兵杖牛車による参内を許される。同年十二月二十六日、左大臣を辞す。同七(一六九四)年正月一日、関白基熙家拝礼の儀あり。同年九月二十一日以前には、病により職を辞せんと武家傳奏に謀るが、將軍綱吉に容れられず、これ以降の朝議を病によるとして欠席することがあったと云う。同十(一六九七)年十一月十日、東山天皇より密旨を賜り、議奏中御門資熙の罪科を数えてこれを弾劾し、罷免せしめんとするも、京都所司代松平信庸の反対により果たせず。同十五(一六七二)年八月二十六日、基熙室常子内親王が薨去。翌十六(一六七三)年正月十四日、関白を辞す。二十七年後の宝永三(一七〇六)年二月十八日、江戸幕府の招請により下向。基熙は、翌月十一日に將軍綱吉父子が自ら演じる猿楽を披露される等、將軍家の外戚として厚遇された。帰朝後の同六(一七〇九)年十月二十五日に太政大臣に任ぜられ、既に摂政に任じていた子息家熙とともに幼帝中御門天皇を補佐するも、同年十二月九日にこれを辞した。太政大臣の職には同七(一七一〇)年十二月二十五日に基熙男家熙が補されている。同七年三月二十五日賜杖。同月三十日、再度の江戸下向の為に都を出立し、四月十八日に將軍家宣に引見した。十月十九日、幕府の要請により朝廷から江戸滞留を許される。正徳元(一七一二)年四月二十五日、將軍より朝廷に対して再度の江戸滞留を要請。江戸滞在中の基熙は、將軍の外戚として幕府の厚遇に与っており、例えば毎年の年頭には將軍に對面して新年を賀している他、正徳元年六月十五日には、幕府の特令により江戸山王祭の行列が基熙の江戸屋敷の前を通過せしめられる等、貴賓としてもなされた。帰京の途に就くのは翌二(一七一三)年四月三日であり、六月二十七日には朝廷に参内した。

江戸滞在中の基熙と熙子との交流を始めとする動静及び帰路の情景、心情については、松浦静山筆『甲子夜話』に載録の基熙詠歌からも伺うことができる。基熙の江戸滞在中、家熙は正徳元年七月二十七日に太政大臣を、翌二年八月二十八日に摂政を辞している。それから約二カ月後の同二年十月十四日、熙子の夫君である將軍家宣が病により薨去。側室月光院所生の家継



が新將軍に任じた。翌三（一七二三）年五月三十日、基熙女で將軍家宣室熙子の妹である八十子に対して幕府より三百石が支給されている。

享保七（一七二二）年六月十五日薨髪、法名證岳。同年九月十四日に薨去。享年七十五。應圓満院と号した。朝廷は十八日より廢朝三日、法皇宮停樂三日の措置等によりこれを悼んだ。

既出の拙稿では、基熙が後西天皇ゆかりの薫物の秘方秘説を傳えており、これらを東山天皇に傳授したこと、正室の常子内親王は後西天皇の薫物の秘方秘説を唯授一人として相傳しており、法皇、上皇、天皇らの御所に参内して薫物の調合を手傳うなど、皇族出身の合香家として禁裏を頂点とする上層社会の信望を集めていた可能性のあること等を報告したことがあつた（注五人）。

「焼物之方」（和装袋綴、一冊、整理番号…九四九五三）の書名を与えられて陽明文庫に傳來する『薫物調合秘方』写本一本の跋文には、後水尾法皇震筆をもつて「新院」こと後西天皇が書写した「御秘本」をもとに、基熙が薫物を「御相傳」した後に懇望してその書写に及び、貞享元年に書写し終えた旨が傳わる。跋文の内容が正しければ、基熙は後西天皇から薫物を相傳したのであり、御秘本の持ち主たる後西天皇に懇望して書写に及んだと解釈するのが自然であらう。

『基熙公記』には、基熙が後西天皇の秘方秘説を傳えた経緯について、正統な傳授と呼べるような手続きにはよらなかった由が記されており、右の跋文に「御相傳」と明記されることは齟齬を生じている。『基熙公記』の記述に臣下としての謙退の心情を斟酌するならば、正統な傳授でありながら、家の記録として後世に傳わる日次において、それと明記するのを敢えて避けたと見なして良からうと考える。

陽明文庫には、室町時代に遡る近衛家歴代の当主によると傳わる薫物を含む香道関係の古文書古典籍が多数傳來する。これらの書誌の概要については、翠川文子氏が調査結果を目録として報告している。稿者が平成三〇年度に研究協力者三名と共同でこれらの文献を対象に實施した調査においては、右の目録の内容に、陽明文庫側が作成して従来館内において利用されてきた目録、及び資料の現状にやや異なる点の散見することを確認している。稿者らによる調査結果については、本稿を第一報として慎重に検討を重ねながら、漸次報告したい考えである。

方・説 挿入紙（梅花）方1（基熙私二書朱也）、跋文（右一帖以（闕字）後水尾震筆（改行）新院自令写御秘本也（闕）（改行）薫相傳之後頗望申之（改行）間致免書寫於燈下卒爾書（改行）之秘函底者也（改行）貞享元年仲冬吉辰 左僕射基熙）

## や行

### 四辻

よつし  
ヨツジ

↓ 四辻方

方・説 梅花方73（四辻方）

### 四辻方

よつし  
ヨツジ

「四辻」と称される人物により、又は家において考案ないし所持された薫物の処方。『薫物調合秘方』には、「梅花」方73に「四辻方」と併記される。「四辻」は鎌倉時代前期の太政大臣西園寺公経四男實藤を祖とする藤原北家閑院流室町家の号であらう。四辻家は室町時代に榮奉行を拝命した家柄であり、江戸時代以降も箏や和琴の演奏を家職とした以下の本項では、既出の拙稿において本書の「四辻方」と傳わる処方を含む「四辻家」ゆかりの処方について執筆した解説（注五）を再掲する。

続群書類従には『四辻家薫物書』の書名による傳書が収録される。『群書解題』岩橋小弥太氏解説によると、書名は奥書の記述に由来する仮のものであり、内容は、次の三種の傳書を合綴した可能性があると云う。

第一の書は、奥書に「四辻家代々相傳之双紙」と呼ばれた秘傳書に該当する。来歴については二点の識語が記されており、一点目には「予 数年根（懇）望之間雖黙。故亟相遠行之砌。蘊奥口傳等不殘令傳授給者也。」と、二点目は「小澤本」こと小澤芦菴の所蔵した傳本の識語として「当今へは先年愚老御前におきて調合させられ。条々申入了。（改行）右四辻家代々相傳双紙也。亟相遠行之砌。口傳等（解題に「無力」と）所殘令傳授畢。殊黒方者。（闕字）正親町院以御自筆之方奉写者也。」とあり、末尾に「于時文録（傍書「禄」）承暦仲秋日」「僧都實隆」と記される。第二の書は「天明五年首夏 平（花押）」「天明六年立秋 経亮」の書写者識語を伴う薫物「薫衣香」方六点の記を云い、第三の書は、「寛政三年六月」に小澤芦菴本と校合したとされる、「にほひ袋」や「わか草」等の新作薫物方を始めとした八点の処方の類纂を云う。

第一の書の一点目の識語の内容は、書き手である「予」が四辻家傳來の双紙を長年懇望し続けてきたところ、「故四辻亟相」が遠方へ赴くにあたつて、口傳を残らず傳授していただいたと云うものである。二点目の識語の書き手である「愚老」は、当代の帝の御前において本書の処方を調合するよう御下命を受けて、秘方秘説を口頭により申し入れ終えたとも記される。これ以後に第一の識語の同文が挟まれており、続けて、殊に薫物「黒方」は正親町天皇（人名家

名等解説及び索引49頁)の御自筆の方をもって写し奉った無類の重宝である等としてこれを讃え、「文録承(ママ) 曆仲秋日」に「僧都實隆」が書写した旨を記して終えられている。以上の識語の内容には、一部に重複の見られることから、「予」と「愚老」は同じ人物であり、いずれも「僧都實隆」の一人称として見える。

岩橋氏は前掲の解題において、「故四辻亜相」が四辻季遠に該当する可能性を指摘していた。

続群書類従の傍書が「文録」を文禄と校訂するところに従うならば、文禄四年に薨去した季遠子息公遠もまた検討の対象に加えるべきであろうが、いずれにしても根拠に乏しいことから、ここでは季遠の略歴と香との関わりについて確認するに留める。

四辻季遠は権大納言四辻實仲養子正二位権大納言公音男。母は實仲女。永正一〇(一五一一)年七月七日誕生。同一四(一五一七)年、五歳の時に従五位下に叙される。初名季規。大永八(享禄元、一五二八)年侍従、名を季遠と改む。天文二(一五三三)年四月一七日従四位下。同四(一五三五)年正月三日左權中將。同五(一五三六)年従四位上。同六(一五三七)年七月一三日参議、中將元の如し。二月二日正四位下。同七(一五三八)年三月八日土佐權守。四月一日直衣始。同八(一五三九)年正月五日従三位。同九(一五四〇)年二月一四日出仕を止められ、三月一二日勅免。同一(一五四二)年閏三月一〇日正三位。土佐權守秩滿。五月に日向国へ下向して一〇月に上洛。同一三(一五四四)年三月一九日權中納言、同日拝賀。同一四(一五四五)年正月五日従二位。同一八(一五四九)年正月五日正二位。同一九(一五五〇)年一〇月一二日權大納言。一二月二三日聽勅授、同日拝賀。弘治二(一五五六)年一月二六日輕服。同四(永禄元、一五五八)年甲州に在国し、翌年一〇月二七日甲州より上洛。同九(一五六〇)年六月には子息公遠と共に勢州に下向し、八月二七日に一緒に上洛している。天正三(一五七五)年正月二六日權大納言を辞す。八月二日薨去、六三歳。

季遠男公遠は女官得選を母として天文九(一五四〇)年某月某日に誕生している。季遠が同年二月一四日から約一月の間出仕を止められた理由として、女官との密通が露見したこと等が想像されるが、季遠はこれ以後も累進しており、弘治元(一五五五)年と同三(一五五七)年には後奈良院主催の百韻連歌に参加している。何等かの不手際により出仕停止の処遇に甘んじたが、院からの信望は損なわれず、寵臣の一人として近侍し続けたのであろう。

後奈良院は合香家三条實香(人名家名等解説及び索引64頁「實香公」)・公頼父子から天文二年(一五三三)に薫物の秘方を相傳している。合香活動にはそれ以前から熱心であったらしく、皇族や臣下の公家、武家に対して、自ら調合する等した薫物を度々授けていた。後奈良天

皇(人名家名等解説及び索引58頁)皇子の正親町天皇(人名家名等解説及び索引49頁)もまた合香への関心が高く、薫物を頻繁に調合しては、皇族の知友や公家、武家の寵臣にふるまっていた。季遠もそうした下賜に与った一人であり、『後奈良院宸記』や『御湯殿上日記』によれば、天文四(一五三五)年五月八日に後奈良院から薫物を頂戴した他、正親町院からも永禄四(一五六一)年閏三月九日と十一月六日に薫物を賜っており、後者については院が自ら調合した品であったと云う。

季遠が御前において薫物を調合したり、合香の秘方秘説を蒐集したりといった史實や傳承は未見である。ただし、「四辻」又は「四辻家」にゆかりの品とされる薫物方については、管見に次の五点を確認している。

- 1 高松宮本「薫物(ノコト)」載録「仙人(異傳仙人)」方7(薫物、四辻傳)
- 2 高松宮本「薫物(ノコト)」載録「仙人(富士ト号スル也)」方8(薫物、四辻傳)
- 3 東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」挿紙A記載「梅花」方13(四辻方)
- 4 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」載録「黒方」方108(宿紙表紙薫方、四辻流也)
- 5 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」載録「黒方」方112(家方、四辻家敷)

右の内4と5の処方は、『薫物秘藏抄』の依拠資料の一つで、この卷子本の末尾に貼り継がれた可能性のある薫物書「宿紙表紙薫方 四辻流」に載録される。また、これら二点の処方の同類文は、『四辻家薫物書』に合綴された第一の書「四辻家代々相傳之双紙」に確認することができる。

「宿紙表紙薫方 四辻流」には処方三二点と調合の説一点とが類纂されており、それらの内処方一点を除くほとんど全ての記述について、『四辻家薫物書』の内「四辻家代々相傳之双紙」に同類文を確認することができる。「四辻」及び「四辻家」が、いずれも藤原北家閑院流の同家を意味するものであったとすれば、遅くとも江戸時代前期には、四辻家ゆかりと傳わる薫物の秘方秘説やその類纂が皇室や公家に傳來しており、当時の上層社会において珍重されたことが考えられる。

『四辻家薫物書』の載録方の内、主要と見られる処方の特徴について紹介しておきたい。冒頭に合綴された「四辻家代々相傳之双紙」には、平安時代の類纂と傳わる『薫集類抄』等の薫物書や『河海抄』等の『源氏物語』古注釈書に記載された、歴史ある著名な薫物方の同類文が記載される。室町時代に薫物方の蒐集や類纂、新作薫物の考案等を行ったとされる三条家当主

にゆかりとされる処方と同類文も多く載録される。奥書の直前には、「当家たきものゝ方のことは。」云々として、和歌一首と薫物「黒方」の「勅方」とされる処方一点が記載される。和歌は三条家の類纂と傳わる秘傳書に龍翔院三条公敦が後土御門天皇に秘方秘説を傳授して拝領した御製として傳わる。「黒方」の「勅方」については、管見に他書への載録を確認できていない。

『四辻家薫物書』が、室町時代以降の三条家の類纂や秘方秘説を主要な源泉として成る秘傳書の傳本であることは、右の特徴に明らかであろう。皇室や公家に秘藏された薫物書の中には、四辻家にゆかりとされる薫物の秘方秘説が存在したとの傳承も傳わる。続群書類従本の解題において岩橋が「故四辻亜相」と推定した四辻季遠は、後奈良院が轉法輪三条實香（人名家名等解説及び索引64頁）と公頼の父子から薫物方を相傳した当夜も含めて院に近侍しており（『言繼卿記』天文二年一〇月一九日条）、この天皇と皇子の正親町院から薫物を下賜されたこともあった。主君の嗜好や関心に追従するのは近臣の務めであるから、季遠が後奈良院の愛好した薫物を学びの対象としたとして、不思議では無い。季遠を始めとした四辻家の人物に、三条家の秘方秘説を蒐集して独自の処方を考案するという、いわゆる合香家としての事跡を遺した者のあった可能性は、検討に値する。

方・説 梅花方73（四辻方）

わ行

私し／＼わたくし 荷葉方31の依拠資料の書写者、又は本書の類纂者、或いは本書の傳來の早い段階での書写者が筆写時の気付きを記すのに用いた一人称の内、いずれかと解せる。方31は冒頭に「勅方」とあり、「勅」（人名家名等解説及び索引53頁）と略称された合香家に傳來した品であることが記載される。ただし、本方は方25から32まで連続して記載された薫物・荷葉の処方群の内、冒頭に位置する方25と処方の内容が一致しており、方25は「御室方」（人名家名等解説及び索引50頁「御室」）との由緒を伴う薫物方である。このことから、方31の書写者又は本書の類纂者は、本方が「勅方」として傳來していたことから起筆したが、「御室方」の由緒を伴う別の処方と内容が同じであることに気づき、その旨を「私」に、すなわち私見として書き添えた可能性が考えられよう。

方・説 同（荷葉）方31（勅方）私同御室方

注

（注一）拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』翻刻…附・『薫物秘藏抄』人名家名等解説」（『薫物書の研究』第二号、薫物書研究会、平成二十八年）六十三―六十五頁、及び「厳島御室任助入道親王と薫物―薫物秘傳書における「御室」ゆかりの秘方秘説を中心に―」（『厳島研究』第十四号、世界遺産・厳島―内海の歴史と文化プロジェクト研究センター、平成二十九年）十五―十七頁、及び「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」（『薫物書の研究』第四号、薫物書研究会、平成三十年）一三八―一三九頁

（注二）件数は本間洋子『中世後期の香文化…香道の黎明』（思文閣出版、平成二十六年）による。

（注三）注一所掲の拙稿の内、「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」一三八―一三九頁参照。

（注四）和田英松著『皇室御撰之研究』昭和八年初版発行

（注五）注一所掲の拙稿の内、「厳島御室任助入道親王と薫物―薫物秘傳書における「御室」ゆかりの秘方秘説を中心に―」（『厳島研究』第十四号、世界遺産・厳島―内海の歴史と文化プロジェクト研究センター、平成二十九年）参照。

（注六）拙稿「新作薫物」と平安文学―春に萌え、秋に仄めく香りたち―（『AROMA RESEARCH』第六十三号（Vol.16 No.3）、フレグランスジャーナル社、平成二十七年三月）

（注七）拙稿「東山御文庫所蔵『薫物調合秘方』解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」（『杏雨』第十四号、武田科学振興財団、平成二十三年）

（注八）『薫物調合秘方』を除く諸書の内、例えば京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘藏抄』載録の「新枕」方81は「三条家秘本」を依拠資料とすることが、専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』載録の「新枕」方31には「三条」こといづれかの三条家に傳來した処方である由が併記される。上田流和風堂所蔵の無銘の薫物書に載録される「新枕」方32は、本方が「陽光院殿御方」と傳わる品である旨が記載される。これらの薫物方については注1所掲の既出の拙稿においても紹介し検討していることから、適宜参照されたい。

（注九）拙稿「宮内庁書陵部所蔵『薫物黒方秘方』翻刻」（『広島女学院大学日本文学』、十九号、平成二十一年）参照。

（注一〇）『後奈良院宸記』、『言繼卿記』、『御湯殿上日記』天文二年（一五三三）十月十九日条による。例えば『言繼卿記』同日条には次のように記載される。

十九日、戊子、天晴、（中略）○当番之間七時分参内、青門御参、轉法輪三條前左府、同大納言祇候、薫物黒方、調合御相傳、云々、夜半計退出候了、三献参候、御陪膳三條宰相中將、青門、御前予、三條父子、前諸仲朝臣、季遠朝臣両人也、三献天酌也、初献三條宰相中將、二献予仕了、（下略）

（注一一）『實隆公記』大永三年七月十日から十一月十九日までの条々に記載。栗屋元隆の動静については、須田悦生氏著『若州三湯郡佐柿国古籠城記…校註』（福井県美浜町文化財保護委員会、昭和四十五年）、『小浜市史』（小浜市史編纂委員会、第十一卷、通史上、平成四年）及び須田悦生氏著『若狭猿楽の研究』（三弥井書店、平成四年）、『福井県史』（福井県、通史編2、中世、平成六年）等に詳しい。

（注一二）注七所掲の拙稿三三七頁、三四〇頁参照。

（注一三）『實隆公記』文龜元（一五〇一）年三月二十九日条、『和長卿記』同年十一月十三日

条等による。

(注一四) 踐祚から崩御までの間に行われた主な活動として、漢籍については天皇のお召しにより永正四(一五〇七)年二月から翌五年八月にかけて僧省佐が『文選』を、『實隆公記』、『元長卿記』永正四年二月三十日条、『實隆公記』同五年三月五日条、六月十七日条、八月七日条、及び同月十三日条による)、永正九(一五一一)年四月と同十六年四月には高辻章長が『東坡集』を、『實隆公記』永正九年閏四月十六日条、同十六年四月十五日条による)、同十六(一五一九)年四月にはまた清原宣賢が『論語』を講じている(『水記』永正十六年四月二十一日条による)。和歌や連歌の創作には頻繁に取り組んでおり、御法楽や月次御会等において詠まれた多数の御製が『後柏原院御集』等の歌集に収録されて今日に傳わる。音楽については文龜二(一五〇二)年と大永三(一五二二)年に雅楽頭豊原統秋より笙曲の傳授、灌頂を、文龜三(一五〇三)年、永正十二(一五一五)年、及び同十五(一五一八)年には四辻季経から箏曲の傳授を受けた由が知られる(『實隆公記』文龜三年十一月三十日条、『山科家断簡』享祿二年六月二十日写永正十二年十一月十日条、『公卿補任』後柏原朝永正十五年藤季経条による)。

(注一五) 三条西實隆は、後土御門朝の文明九年十二月三十日、二十五歳の時に参議に補されて公卿に列して以降、内大臣正二位に至った。後柏原朝の永正十三(一五一六)年に六十二歳で落飾してからも朝廷に奉仕し続け、後柏原天皇が大永六(一五二六)年四月七日に崩御する直前の三月三十日にも勅問に与る等、この天皇の寵臣として奉仕し続けた一人である。後柏原朝には堂上歌人として和歌の詠進や歌集の撰集、批点、屏風和歌の制作等に頻繁に取り組んでおり、『實隆公記』永正六(一五〇九)年二月三日条によると、同日、御所望により初卯発句を詠進し、翌四日に宸筆の「源氏詞」二帖を「御手本」として賜ったと云う。奉仕への返礼として御料物を下賜されるのも頻繁であり、大永四(一五二四)年正月二十日等には炭を、同年七月七日には鮎を、御料所より下されている(『實隆公記』各日条による)。

(注一六) 例えば、文龜二(一五〇二)年四月二十九日、室町殿足利義高より禁裏に対して团扇形色紙六枚が届けられ、それらの裏面に等持院尊氏以下の足利家歴代当主による和歌十二首の宸筆を所望する由の申し入れがあった。天皇は同夜に参内した實隆にその旨をご相談になり翌五月五日には二行七字の配置による染筆が成された模様である。同月十二日には義高の希望通りに染筆せられた团扇形色紙が下賜され、義高からは鶴毛の御馬と白の御太刀とが進上された(『實隆公記』各日条による)。義高は義澄と改名して以後も度々後柏原天皇の御製を賜る等、和歌の道における交流に与っている。永正五(一五〇八)年に義尹(義植)が將軍に復職して以降は、義尹が参内して御前での宴や和歌会に列席し、御製の下賜もしばしば行われた。

(注一七) 拙稿「宮内庁書陵部所蔵『薰物黒方秘方』翻刻」、『広島女学院大学日本文学』十九号、広島女学院大学文学部日本文学科、平成二十一年七月。

(注一八) 後奈良天皇の即位から二か月後の大永六(一五二六)年六月九日には、先帝の御遺物を將軍足利義晴、徳大寺公胤、及び右京大夫細川晴元ら公武の有力者に下賜(『實隆公記』同日条)。義晴には享祿元(一五二八)年、ころから五月五日の重陽の節句に御薬玉を下されることも続いており、天文十五(一五四六)年以降には、父義晴から將軍職を譲られた子息義藤(後に義輝と改名)に下賜している(御湯殿上日記、享祿元年五月五日条等)。大永六(一五二六)年八月十四日には、三条西實隆の自筆により、後柏原天皇御製と三条西實隆の詠歌を書した色紙を用いて御屏風を新調させて先帝を追懐(大永六年内裏御屏風和歌)。翌七(一五二七)年三月二十二日には伏見宮貞敦親王の懇望により宸筆御短冊を下賜。貞敦親王とはその後も轉法輪三条公頼を交えて宸筆古今集の校合に取り組む(公頼公記、大永七年八月二日、九日、二十九日条)等、和歌を始めとした文化藝術活動においてしばしば協働した。皇室の親族や公武の寵臣らとの間で御製による和歌の贈答を交わすことも多く、天文三(一五三四)年二月十八日

には、病床の三条西公條に桜花を届けてこれをいたわり、公條が和歌を献上したことに対して、御製の御返歌を下されている(御湯殿上日記、同日条)。享祿四(一五三二)年から天文二十三(一五五四)年には法楽和歌御会や法楽連歌御会を催すこともままあり、歎喜天等信仰を篤くした神仏への代参も併せて行われるのが通例であった。その他、三条西實隆に古今傳授と『古今和歌集』を、實隆子息公條に『古今和歌集』と漢書を、建仁寺龍崇に『古文真宝』を進講せしめる等して、和漢の御学問にも自ら取り組んでいる(以上、實隆公記、御湯殿上日記、等)。

(注一九) 注二所掲の先行研究による。

(注二〇) 注一所掲の拙稿による。

(注二一) 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物方』説8において、新作薰物「をそさくら(遅桜)」の由来については、「これもおなし(改行)するか三条いゑにあはせ候かほうをしよまうし候へは(改行)みなかきてたひ候」、これも同じ、駿河三条家で調合していた薰物方を所望したところ、全て書いて下さった、と記載される。「これもおなし」とは、直前の説7にも新作薰物「ふし(富士)」の由来に関して記載された語句であり、前文の説6に新作薰物「のかせ(野風)」の由来として、「てんほうりんいゑには(改行)あはせす候たけのほう(改行)なり」、轉法輪家では調合しない種類であり、他家の薰物方である、との意の言説に同じ由来の種類であることを示唆するものと解せる。

(注二二) 「花」は「菊花」の誤写ないし誤傳であらう。

(注二三) 拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』翻刻」(『薰物書の研究』創刊号、平成二十六年)の解題、及び注1所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』翻刻」・附・『薰物秘藏抄』人名家名等解説」の解題において報告しており、参照されたい。

(注二四) Tsao 科研費 P1820339 の助成による。

(注二五) 注二三所掲の拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』翻刻」の他、拙稿「『新作薰物』と平安文学」(研究餘滴、『むらさき』第五十一輯、平成十六年十二月)等において報告しており、参照されたい。

(注二六) 注七所掲の拙稿「東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』解説と釈文」杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考」において考察しており参照されたい。

(注二七) 諸藝稽古の開催については『土御門泰重卿記』元和元年正月十三日以降の条、及び『中院道村日記』同年二月三日条等に詳細に記録される。開催の詳細や経緯については熊倉功氏『後水尾院』(朝日新聞社、昭和五十二年)に、開催の場については藤田勝也氏「中近世天皇御所における御学問所の変容と展開」(『日本建築学会計画系論文集』、平成十六年六月)等の先行研究に詳しい。

(注二八) 『槐記』享保十三(一七二八)年二月四日条には、後水尾院政期の禁中における立花の隆盛ぶりについて物語られる中に「後水尾院様ハ、立花ニ於テ、甚タンノウ(堪能)アル御事也」(高頭忠造編・発行、史料大観、百四十六頁・下段、明治三十三年)とあり、院が立花の名人であった由が傳わる。

(注二九) 注四所掲の和田英松著書による。

(注三〇) 注二所掲の本間洋子著書の他、注1等に所掲の既出の拙稿による。

(注三一) 翠川文字編『香道文献目録―所蔵館別―』(香書双書…資料1、香書に親しむ会、平成二十七年)参照。

(注三二) 注七所掲の拙稿「東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』解説と釈文」杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考」・注二三所掲の拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』翻刻」・注二五所掲の拙稿「『新作薰物と平安文学』において考察しており、参照されたい。

(注三三) 注一所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』翻刻」・附・『薰

物秘藏抄』人名家名等解説」解題に詳述しており参照されたい。

(注三四) 注一所掲の拙稿「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」解題に詳述しており参照されたい。

(注三五) 公益財団法人陽明文庫所蔵「基熙公台翰」(香之事、一卷、九四九五六) 釈文(部分)

※釈文は原文二行を二行又は一行にまとめて記述。各行冒頭の算用数字は原文の行番号。傍線は稿者記入。

1	人のもてあそひのおほ	2	き中にたきものといふ
3	ものこそむかしより傳	4	はりてふかき教へも委
5	しく残りけるちかき世	6	には後陽○院此道の <sub>成</sub>
7	上手におはしまして	8	その御つたへ後水尾院
9	後西院いまほりかはに	10	まします太閤御口傳
11	なにてくはしくつた	12	へましますとか
13	後陽○院の御時ある <sub>成</sub>	14	公卿御前にて勅さく
15	の御たきものをかゝされ	16	おはしましてたきものと
17	伽羅といかゝおほゆると仰	18	ありけるに御たきものは
19	申も中くをろかなり此	20	香はなへてのたき物には
21	まさりや侍らんと申され	22	ければ御かんにて有ける
23	とそこを思ふに伽羅は	24	蘭しやたい紅沉なといま
25	の世につたはりなから靈物	26	にてたやすく人のかく

27 事まれなり

(中略)

155	右香の事としりたる	156	人たにまれなるをきゝて
157	いさゝか聞傳たる事のあ	158	らは教へよとたつぬらるゝ
159	人の侍にこゝろふかく	160	いはさらんもかへりてもの
161	しりかほなればきゝ侍見	162	をよひぬる事を心にまか
163	せて残り出侍るさそ老の	164	ひかことのみにて侍らん
165	寶永六年のはる	166	燈のもとにて
167	軒雪齋遊雲	168	老人書

(注三六) 注二所掲の本間洋子著書による。

(注三七) 注七所掲の拙稿「東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」において考察しており参照されたい。

(注三八) 近衛家堀川邸敷地図(内題「堀川御殿御敷地」、図面一枚、東京都立中央図書館木子文庫、請求記号・木032-114)、「近衛家本邸・別邸ほか敷地坪数一覧」(外題「間尺坪書」、文書一枚、東京都立中央図書館木子文庫、請求記号・木032-116)、藤田勝也「近世近衛家の屋敷について―近世公家住宅の復古に関する研究 2―」(日本建築学会計画系論文集、第77巻、第675号、平成十四年五月) 参照。

(注三九) 『基熙公記』記事については本稿解題6頁と注二三所掲の拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』翻刻」に、『无上法院御日記』についても同じ拙稿に引用しており参照されたい。

(注四〇) 注一所掲の各稿に詳述しており参照されたい。

(注四一) 注一所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』翻刻」附・『薰物秘藏抄』人名家名等解説」解題及び人名家名等解説による。

(注四二) 注一所掲の各稿に詳述しており参照されたい。

(注四三) 注二三所掲の拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』翻刻」、注一所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘藏抄』翻刻」附・『薰物秘藏抄』人名家名等解説、「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」において考察しており参照されたい。

(注四四) 注一所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘蔵抄』翻刻…附・『薰物秘蔵抄』人名家名等解説」、「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」において詳述しており参照されたい。

(注四五) 『言継卿記』慶長八年十一月十四日条による。

(注四六) 注七所掲の拙稿「東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』解説と釈文—杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考—」において考察しており参照されたい。

(注四七) 前注に同じ。

(注四八) 注一所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘蔵抄』翻刻…附・『薰物秘蔵抄』人名家名等解説」解題において考察しており参照されたい。

(注四九) 注一所掲の拙稿「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」人名家名等解説及び索引による。

(注五〇) 前注に同じ。

(注五一) 拙著『薰集類抄の研究…附・薰物資料集成』(三弥井書店、平成二十四年) 載録「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『薰物故書』」解題、注九所掲の拙稿「宮内庁書陵部所蔵『薰物黒秘方』翻刻」において検討しており参照されたい。

(注五二) 注七所掲の拙稿「東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』解説と釈文—杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考—」において考察しており参照されたい。

(注五三) 注一所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘蔵抄』翻刻…附・『薰物秘蔵抄』人名家名等解説」人名家名等解説による。

(注五四) 注七所掲の拙稿「東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』解説と釈文—杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考—」において考察しており参照されたい。

(注五五) 本稿解題6頁と注二三所掲の拙稿「徳川林政史研究所所蔵『薰物之方』翻刻」による。

(注五六) 注一所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘蔵抄』翻刻…附・『薰物秘蔵抄』人名家名等解説」人名家名等解説による。

(注五七) 注七所掲の拙稿「東山御文庫所蔵『薰物調合秘方』解説と釈文—杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考—」において考察しており参照されたい。

(注五八) 注一所掲の拙稿「京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薰物秘蔵抄』翻刻…附・『薰物秘蔵抄』人名家名等解説」、「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」による。

(注五九) 注一所掲の拙稿「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」による。

## 投稿論文執筆要領

- ◇ 「薫物書の研究」への投稿資格は会則に記載した通りです。
- ◇ 投稿は未発表のものに限ります。
- ◇ 投稿論文は三部提出してください。
- ◇ 投稿論文の文字数や図表、写真の枚数に制限はありませんが、A4用紙に縦組二八字、二五行の二段組にて紙面を作成してください。
- ◇ 図版、写真、翻刻等の掲載申請は投稿者が行ってください。
- ◇ 投稿論文の要旨を四〇〇字程度にまとめて三部提出してください。
- ◇ 本文、要旨とは別に、住所、氏名、所属（職名）ならびに投稿資格に係る研究業績一覧を記入した用紙を三部提出してください。
- ◇ パソコンを使用した場合は、文書ファイルをUSBメモリー等一点に保存して提出してください。
- ◇ 投稿論文一式（USBメモリー等も含む）は事務局宛に必ず簡易書留にて郵送してください。一式の返却はいたしません。
- ◇ 採用された投稿論文の執筆者校正は、三校までとします。
- ◇ 投稿論文の執筆者には、発行時に電子データ公開先のURLを通知します。

## 編集後記

「薫物書の研究」第五号をお届けします。前号の発行から一年半を経ての発行となります。年一回の発行を目指して取り組んでおりますが、特に締切というものを定めていない為でしょう、ズルズルと月日を重ねる傾向が顕れて参りまして、反省しきりです。

「締切の無いものをきちんと仕上げるのは、けっこう大変なことなんですよ」といったお言葉を、院生時代に先学からうかがったことがございました。当時は「そうなんだ」くらいの感想しか持ちませんでした。が、日々の暮らしに変化が生じ、次第に研究がおろそかになるにつれ、このお言葉が、訓戒として身に染みて思い出されます。

今号も私のみの寄稿となりました。先日、ある会員の方から、「投稿しても良いのでしょうか」といったお尋ねをいただきました。薫物の古文書古典籍の研究は萌芽的な領域ですので、執筆者にはどうしても、自己責任能力の高さが問われます。そのような事情から会則等を立てましたところ、ご不審を招いてしまったようで、恐れ入ります。会員の皆さんにおかれましては、どうぞお気軽にご投稿ください。

会員数の極めて少ない当会ですが、掲載先のカウンターによりまずと、毎号五〇〇名前後の読者の方に恵まれておりますようで、感謝いたしております。可能であれば年内には、会員の皆さんの活動をご紹介する報文や研究ノートの掲載が可能となるよう、投稿論文執筆要綱を改正したく存じております。今後とも当会と弊誌にご理解、ご協力の程賜りますよう、何卒宜しくお願いいたします。（田中）

二〇一九年一月二二日発行 無料公開

## 薫物書の研究 第五号

編集兼発行者 薫物書研究会 代表 田中圭子  
発行所 薫物書研究会事務局

〒七三九・〇六一一

広島県大竹市新町一丁目八・一八・二〇四

e-mail: misimal7@hotmail.com